

国道 11 号津田交番前交差点改良事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

神野遺跡

2021.3

香川県教育委員会
国土交通省四国地方整備局

国道 11 号津田交番前交差点改良事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

神野遺跡

2021.3

香川県教育委員会
国土交通省四国地方整備局

序 文

本報告書には、国道11号津田交番前交差点改良事業に伴い発掘調査を行った香川県さぬき市津田町津田に所在する神野遺跡（こうのいせき）の報告を収録しています。

当遺跡は津田湾の西側の海岸平野に位置し、東側には砂堆が広がっています。発掘調査により、弥生時代後期の土器のほか、砂糖甕が検出され、東讃地方の砂糖製造の歴史を考える上で貴重な資料を得ることができました。

本書が、本県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告に至るまでの間、関係機関並びに地元関係者各位には多大なご援助とご協力をいただきました。ここに深く感謝申し上げますとともに、今後もご支援賜りますようお願い申し上げます。

令和3年3月
香川県埋蔵文化財センター
所長 西岡 達哉

例　　言

1 本書は、香川県さぬき市津田町津田に所在する神野遺跡（こうのいせき）の発掘調査報告書である。

2 本書に収録した調査は、国土交通省四国地方整備局から香川県教育委員会に委託され、香川県教育委員会を調査主体とし、埋蔵文化財センターを調査担当として実施した。

3 現地での発掘調査期間及び担当者は次のとおりである。

期間 平成 28 年 7 月 1 日～平成 28 年 9 月 30 日

担当 文化財専門員 小野秀幸 嘱託 徳永貴美 名倉美保

4 現地調査及び報告書作成に当って、次の関係機関の協力や教示を賜った。記して謝意を表したい。

萩野憲司、芳澤直起、山田泰三（山田製糖）、三谷製糖、瀬戸内海歴史民俗資料館、地元自治会、地元水利組合（順不同、敬称略）

5 報告書の作成は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。執筆・編集は山元が行った。

6 報告書で用いる座標系は、国土座標IV系（世界測地系）を使用した。また、標高は東京湾平均海面を基準とした。

7 遺構は次の略号により表示した。

SF 窟跡 SP 柱穴跡・小穴跡 SK 土坑 SD 溝状遺構 SX その他の遺構

8 土層・土器の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』を使用した。

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘作業と整理作業の経過	2
第2章 立地と環境	
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	
第1節 概要と調査の方法	6
第2節 土層	6
第3節 遺構・遺物	18
第4章 まとめ	
第1節 遺構の変遷	50
第2節 砂糖竈について	51

挿図目次

第1図 調査位置図	1
第2図 周辺の遺跡	5
第3図 調査区割図	7
第4図 1区 土層断面図①②	8
第5図 2区 土層断面図⑤	8
第6図 2区 土層断面図①②	9～10
第7図 2区 土層断面図③④	11
第8図 3区 土層断面図①②	12
第9図 道構配置図	13～14
第10図 1区 道構配置図	15
第11図 2区 道構配置図	16
第12図 3区 道構配置図	17
第13図 1区 SK1002 平・断面図、出土遺物	18
第14図 SF2001 平・断面図	20
第15図 SF2001 出土遺物 1	21
第16図 SF2001 出土遺物 2	22
第17図 1区 SK1003 平・断面図、出土遺物	23
第18図 1区 SK1007 平・断面図、出土遺物	24
第19図 1区 SK1008 平・断面図	25
第20図 1区 SK1010 平・断面図、出土遺物	25
第21図 1区 SK1011・SK1012 平・断面図、出土遺物	26
第22図 1区 SK1013 平・断面図、出土遺物	27
第23図 1区 SK1014 平・断面図、出土遺物	28
第24図 1区 SK1016 平・断面図	28
第25図 1区 SK1019 平・断面図	28
第26図 1区 SK1021 平・断面図	28
第27図 1区 SK1022 平・断面図	29
第28図 1区 SK1024 平・断面図、出土遺物	29
第29図 1区 SK1030 平・断面図	30
第30図 2区 SK2001 平・断面図、出土遺物 1	31
第31図 2区 SK2001 出土遺物 2	32
第32図 1区 SK2001 出土遺物 3	33
第33図 2区 SK2002 平・断面図、出土遺物	33
第34図 2区 SK2003 平・断面図、出土遺物	34
第35図 2区 SK2005 平・断面図、出土遺物	35
第36図 2区 SK2006 平・断面図、出土遺物	36
第37図 2区 SK2010・SK2011 平・断面図、出土遺物	37
第38図 2区 SK2013 平・断面図、出土遺物	38
第39図 2区 SK2018 平・断面図、出土遺物	38
第40図 2区 SK2021 平・断面図	39
第41図 1区 SP1005 平・断面図、出土遺物	39
第42図 2区 SP2002 平・断面図、出土遺物	40
第43図 2区 SP2013 平・断面図、出土遺物	41
第44図 2区 ピット 平・断面図	42
第45図 1区 SD1001 平・断面図	43
第46図 2区 SX2001 平・断面図、出土遺物	44
第47図 1区 SK1001 平・断面図	45
第48図 1区 SK1004 平・断面図	45
第49図 1区 SK1006 平・断面図	45
第50図 1区 SK1017 平・断面図	45
第51図 1区 SK1028 平・断面図	46
第52図 2区 SK2009 平・断面図	46
第53図 2区 SK2019 平・断面図	46
第54図 1・2区 包含層 出土遺物	48
第55図 2・3区 包含層 出土遺物	49
第56図 原間道路・三段出口道路・金毘羅山遺跡位置図	56
第57図 原間道路 SF II 01～SF II 03 平・断面図 （報告書より再トレース）	57
第58図 原間道路 SF II 04 平・断面図 （報告書より再トレース）	58
第59図 原間道路 SF II 05・SF II 06 平・断面図 （報告書より再トレース）	59
第60図 三段出口道路 SF01・SF02 平・断面図 （報告書より再トレース）	60
第61図 三段出口道路 SF03・金毘羅山遺跡 SF01 平・断面図 （報告書より再トレース）	61
第62図 旧六車家砂糖釜屋平・断面図 （財）四国民博物館 1987「讃岐および周辺地域の 砂糖製造器具と砂糖しめ小屋・釜屋<調査報告書>」 P215～P216 より再トレース	63

表目次

第1表 平成28年度発掘調査体制一覧	2
第2表 令和2年度整理作業体制一覧	2
第3表 砂糖窯関連土坑	50
第4表 香川県内の砂糖窯の調査例 (1)	52
第5表 香川県内の砂糖窯の調査例 (2)	53
第6表 香川県内の砂糖窯の調査例 (3)	54
第7表 土器観察表 (1)	65
第8表 土器観察表 (2)	66
第9表 土器観察表 (3)	67
第10表 土器観察表 (4)	68
第11表 瓦観察表	69
第12表 鉄器観察表	70
第13表 石器観察表	70

写真目次

写真 1	1 区遺構検出状況（北西から）	71	写真 51	2 区 SK2018（北から）	83
写真 2	1 区遺構検出状況（南西から）	71	写真 52	2 区 SK2021 検出状況（南から）	83
写真 3	1 区全景（北西から）	72	写真 53	2 区 SK2021（南から）	83
写真 4	1 区全景（南東から）	72	写真 54	2 区 SK2021（南東から）	84
写真 5	2 区遺構検出状況・中央部付近（西から）	73	写真 55	2 区 SP2008（西から）	84
写真 6	2 区全景（南東から）	73	写真 56	2 区 SP2008（西から）	84
写真 7	2 区全景（北西から）	74	写真 57	2 区 SP2013（南から）	84
写真 8	2 区全景（南東から）	74	写真 58	2 区 SP2014（東から）	84
写真 9	2 区（歩道橋脇）全景（南から）	75	写真 59	2 区 SP2016（南東から）	84
写真 10	3 区（北西部）全景（北西から）	75	写真 60	2 区 SP2018（南東から）	84
写真 11	1 区南壁（北西から）	75	写真 61	2 区 SP2019（南東から）	84
写真 12	1 区 SK1002（東から）	76	写真 62	2 区 SP2020（北東から）	85
写真 13	1 区 SK1002（南東から）	76	写真 63	2 区 SP2025（北から）	85
写真 14	2 区 SF2001 崩化物検出状況（東から）	77	写真 64	2 区 SP2025（南西から）	85
写真 15	2 区 SF2001 窓部検出状況（東から）	77	写真 65	2 区 SP2022（南西から）	85
写真 16	2 区 SF2001（北西から）	77	写真 66	2 区 SP2024（北から）	85
写真 17	2 区 SF2001（東から）	78	写真 67	2 区 SP2027（南西から）	85
写真 18	2 区 SF2001（南東から）	78	写真 68	1 区 SD1001（南東から）	85
写真 19	2 区 SF2001（北東から）	78	写真 69	2 区 SX2001 a-a' 断面（南から）	85
写真 20	2 区 SF2001 崩化物除去後（北東から）	79	写真 70	2 区 SX2001 c-c' 断面（南から）	86
写真 21	2 区 SF2001 f-f' 断面（北半）（西から）	79	写真 71	1 区 SK1028（南西から）	86
写真 22	2 区 SF2001 e-e' 断面、f-f' 断面（南半）（東から）	79	写真 72	1 区 SK1006（南西から）	86
写真 23	2 区 SF2001 e-e' 断面、f-f' 断面（東から）	79	写真 73	1 区 SK1017（南西から）	86
写真 24	2 区 SF2001 d-d' 断面（北西から）	79	写真 74	2 区 SK2009（東から）	86
写真 25	2 区 SF2001 a-a' 断面（西半）（南から）	79	写真 75	2 区 SK2019（南西から）	86
写真 26	2 区 SF2001（北東から）	80	写真 76	神野遺跡出土遺物 1 1・2・4・5・6···	87
写真 27	2 区 SF2001 完掘（北東から）	80	写真 77	神野遺跡出土遺物 2 9・10・11・17・25・27・28・30···	88
写真 28	2 区 SF2001 西壁部分（北東から）	80	写真 78	神野遺跡出土遺物 3 26・29・31・32・33・34・37···	89
写真 29	2 区 SF2001 東壁部分（南西から）	80	写真 79	神野遺跡出土遺物 4 35・40・41・43・45・46・49・50・54・56···	90
写真 30	1 区 SKU003（南東から）	81	写真 80	神野遺跡出土遺物 5 59・60・61・63・64・67···	91
写真 31	1 区 SK1007（南から）	81	写真 81	神野遺跡出土遺物 6 69・72・75・77···	92
写真 32	1 区 SK1008（南から）	81	写真 82	神野遺跡出土遺物 7 71・74・76・86・93・102···	93
写真 33	1 区 SK1010（南から）	81	写真 83	神野遺跡出土遺物 8 101・103・104・106···	94
写真 34	1 区 SKU011（北東から）	81	写真 84	神野遺跡出土遺物 9 105・108・109・110・116···	95
写真 35	1 区 SKU012（北東から）	81	写真 85	神野遺跡出土遺物 10 114・118・119・122・124···	96
写真 36	1 区 SKU013（南から）	81	写真 86	四国民家博物館 旧六車家 砂糖甕	97
写真 37	1 区 SKU014（南西から）	81	写真 87	四国民家博物館 旧六車家 砂糖甕（焚口部分）	97
写真 38	1 区 SK1016（南西から）	82	写真 88	四国民家博物館 旧六車家 釜屋	97
写真 39	1 区 SK1019・SP1005（南東から）	82	写真 89	釜屋の風景（旧引田町）瀬戸内海歴史民俗資料館蔵	98
写真 40	1 区 SKU021（南東から）	82			
写真 41	1 区 SK1022（南西から）	82			
写真 42	1 区 SK1024（南西から）	82			
写真 43	1 区 SK1030（西から）	82			
写真 44	2 区 SK2001（北東から）	82			
写真 45	2 区 SK2002（北から）	82			
写真 46	2 区 SK2003（北東から）	83			
写真 47	2 区 SK2005（東から）	83			
写真 48	2 区 SK2006（東から）	83			
写真 49	2 区 SK2010・SK2011（南から）	83			
写真 50	2 区 SK2013（北西から）	83			

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

国道11号津田交番前交差点改良に伴い、香川県教育委員会では平成26・27年度に試掘調査を実施した。対象地の一部は周知の埋蔵文化財包蔵地「津田小学校西隣遺跡」の範囲内となる。試掘調査の結果、一部のトレンチで古墳時代前期に属する遺構を確認した。また、包含層から弥生時代後期、古墳時代前期の土器が出土し、この時期に伴う遺構がある可能性があることから、文化財保護法に基づく保護措置が必要と判断し、事前に発掘調査を行うこととなった。

検出した遺構は「津田小学校西隣遺跡」から連続するものであり、その範囲に含めることが妥当と考



第1図 調査地位置図

えられる。遺跡名は、行政上の地区名から「神野遺跡」と変更した。

第2節 発掘作業と整理作業の経過

香川県埋蔵文化財センターでは、神野遺跡の調査 653m²について、平成 28 年 7 月 1 日から 9 月 30 日まで発掘調査を行った。調査は、埋蔵文化財発掘調査支援業務により実施した。

整理作業は、令和 2 年 7 月 1 日から 8 月 31 日まで香川県埋蔵文化財センターで実施した。遺物の出土量は 28 t 入りコンテナ 15 箱である。

発掘調査及び整理作業の体制は以下のとおりである。

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課	香川県埋蔵文化財センター
範括	範括
課長 小柳 和代	所長 増田 宏
副課長 片桐 孝浩	次長 森 格也
秘書・生涯学習推進グループ 課長補佐 愛染伊知朗	秘務課 課長（兼） 森 格也
副主幹 松下由美子	副主幹 斎藤 政好
主事 和木 麻佳	主任 寺岡 仁美
文化財グループ 課長補佐（兼） 片桐 孝浩	主任 高木 秀哉
主任文化財専門員 山下 平重	主任 丸尾麻知子
文化財専門員 乗松 真也	主任 岩崎 昌平
	主任 西谷 敬司
	調査課 課長（兼） 森 格也
	文化財専門員 小野 秀幸

第1表 平成 28 年度発掘調査体制一覧

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課	香川県埋蔵文化財センター
範括	範括
課長 渡邉 智子	所長 西岡 達哉
副課長 愛染伊知朗	次長 稲口 和幸
秘務・生涯学習推進グループ 課長補佐（兼） 愛染伊知朗	秘務課 課長（兼） 稲口 和幸
副主幹 長谷川江里	副主幹 斎藤 政好
主事 尾平 俊	主任 高橋 篤行
文化財グループ 課長補佐 古野 徳久	主任 石田 こずえ
主任文化財専門員 松本 和彦	主任 寺尾 一夫
技師 益崎 卓巳	主任 渡山 豊
	資料普及課 課長 佐藤 麻馬
	文化財専門員 山元 素子

第2表 令和 2 年度整理作業体制一覧

第2章 立地と環境

第1節 地理的環境

神野遺跡は、さぬき市津田町津田に所在する遺跡である。南側から北西側にかけては火山（標高245m）、雨滝山（標高253.1m）、北山（標高288.4m）から延びる169.1mをピークとする山塊に囲まれ、東側は津田湾に面する。雨滝山と169.1mをピークとする山の間を北西から東側へ津田川が流れ、津田川により形成された氾濫原が広がる。遺跡は、津田の松原を含む範囲に、東西方向に細長くのびる砂堆上に立地する。

第2節 歴史的環境

旧津田町域では、旧石器・縄文時代の遺跡はほとんど見られない。

弥生時代では、旧津田町の北部、北山の山上に北山山頂遺跡がある。弥生土器や石鎌、石斧や石庖丁などが多く出土している。発掘調査が行われておらず詳細は不明だが、出土遺物や遺跡の立地から弥生時代中期後半の高地性集落と考えられる。北峯神社後方からは平形銅劍3口が出土している。

古墳時代になると、津田湾を見下ろす位置に前方後円墳の首長墓が出現する。積石塚の前方後円墳である、うのべ山古墳（37m、3世紀末）を皮切りに、火山産凝灰岩の刳抜式石棺3基を持ち、石鏡、変形神獸鏡、方格規矩鏡、碧玉製管玉などの副葬品を備える赤山古墳（45～51m、4世紀中頃）、火山産凝灰岩を用いた刳抜式石棺を認め、前方後円墳で、副葬品に中国鏡2面、碧玉製腕飾り類5個以上、勾玉などの多数の玉類や鉄器を備える岩崎山4号墳（61.8m、4世紀後半）、前方後円墳で、縄掛け突起のついた火山産凝灰岩の堅穴式石室の蓋石が露出し、平成21（2009）年の調査では、刳抜式石棺の棺蓋の一部が見つかったけは山古墳（55m、4世紀後半）へ続く。4世紀中頃の一つ山古墳は、円墳ではあるものの、直径約25mの規模を有し、平成16（2004）年の発掘調査で刳抜式石棺が出土したことから、首長墓の系統をひく古墳であることがわかった。龍王山古墳（4世紀後半）は、直径30mの円墳で、安山岩板石を用いた長大な堅穴式石槨を主体部とする。津田古墳群は、狭小な平野しか持たないにも拘らず、畿内の影響を強く受けたものとして、古くから瀬戸内海の海上交通を押さえる勢力が築造したものとして評価されている。

神野遺跡（旧称：津田小学校西隣遺跡）からは6世紀中頃の土師器壺、7世紀代の製塙土器が出土している。立地から考え、製塙にかかわる遺跡であった可能性がある。今回調査を行った神野遺跡もこの遺跡の一角を占める。

古代においては、調査地は寒川郡多和郷に属する。古代寺院は寒川郡では石田郷の極楽寺、神前郷の石井庵寺、造田郷の願興寺が知られるが、多和郷には知られていない。

承安4（1174）年、鶴羽の地は、鳥羽上皇女八条院璋子内親王が京都仁和寺中に建立した蓮華心院へ寄進され、鶴羽庄と称した。建暦元（1221）年に八条院璋子内親王が薨去した後は、後鳥羽上皇女春華門院、順徳上皇、後鳥羽上皇が管領することになるが、承久の乱以後幕府に没収されることになる。その後も管領者は転々とするが、南北朝期には文献からは見えなくなる。

旧津田町南東部、長見山（標高178m）の頂部には中世の山岳寺院とされる寺尾庵寺がある。その北

側の裾野である大山地区では、13世紀前半～中葉の大山遺跡、中谷遺跡がある。多数のピットとともに瓦器碗・皿が多量に出土し、前述の皇室領莊園との関連が指摘されている。大山遺跡には隣接する畠からは鎌倉時代の金銅仏が出土した。大山遺跡を含む周辺地域では火山産凝灰岩の石仏や五輪塔などが多く残され、周辺は宗教・信仰にかかるエリアであったことが窺える。

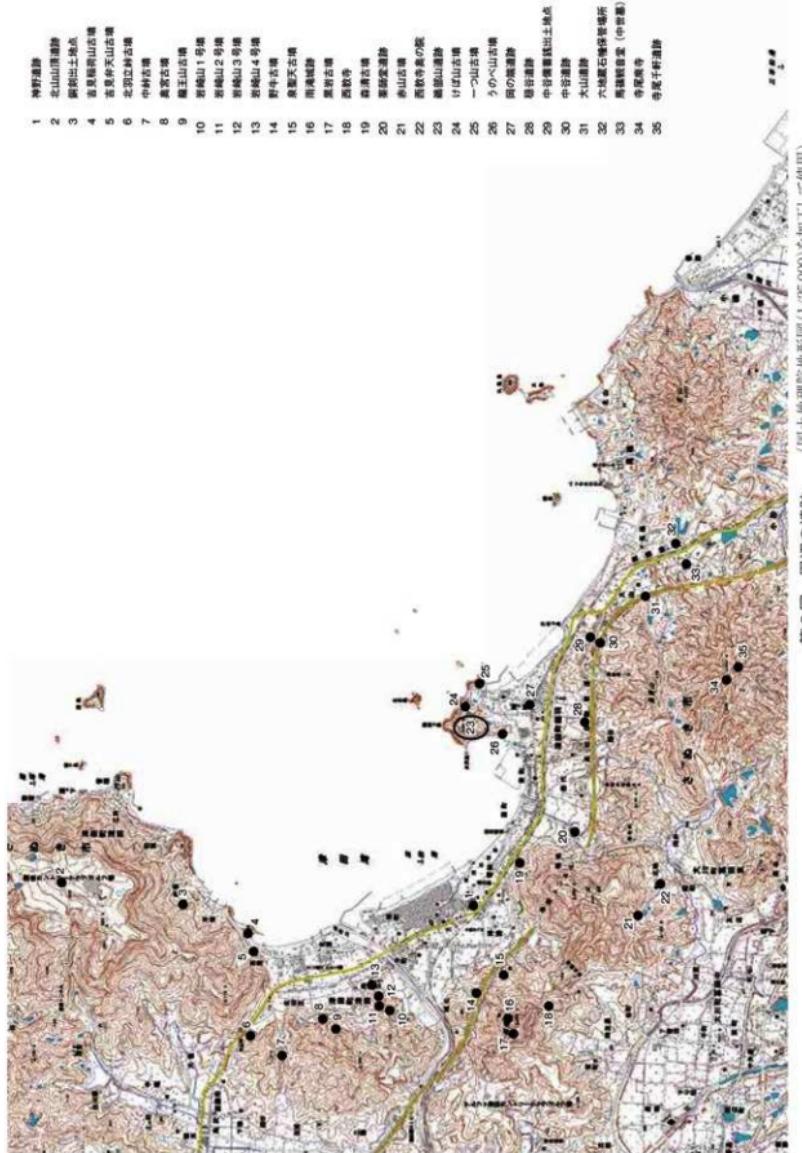
中谷遺跡の北側に近接して、備前焼壺に埋納された14世紀後半頃の大量の備蓄錢が出土した。鶴羽は文安2（1445）年「兵庫北関入船納帳」にみえる船籍地のうち「鶴箸」に相当すると考えられる。備蓄錢の出土も含め、港湾都市として繁栄した一面が窺える。

南北朝期以降になると、守護細川氏の領するところとなり、その被官安富氏が長禄年間（1460年頃）頃築城した。しかし、天正11（1583）年長宗我部元親の侵攻を受け落城した。

雨滝城は山頂を主郭とし、それより3方へ伸びる尾根上に曲輪・堀切を設ける。縄張りは織豊系の技術による改変が認められる可能性がある。発掘調査では主郭を中心とした多くの曲輪で礎石建物跡を検出しておらず、その一部は瓦葺きであった可能性がある。16世紀代の土器、陶磁器や鉄製品、鉄滓などが出土している。

参考文献

- 香川県 1988「香川県史」第1巻 原始・古代編
香川県大川郡津田町 1986「再訂 津田町史」
香川県教育委員会ほか 2004「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第48冊 大山遺跡 中谷遺跡 梶谷遺跡」
香川県教育委員会 1995「津田町鶴羽発見の備蓄錢」「香川県教育委員会発掘調査年報 平成6年度」
香川県教育委員会 2003「香川県中世城館跡詳細分布調査報告」
津田町教育委員会 2002「岩崎山4号古墳発掘調査報告書」
六車惠一 1965「讃岐津田溝をめぐる四、五世紀ごろの説」「文化財協会報特別号7」香川県文化財保護協会



第2図 周辺の遺跡 (国土地理院地形図(1/25,000)を加工して使用)

第3章 調査の成果

第1節 概要と調査の方法

調査区は国道11号とJR高徳線を挟んで南西側（山側）と北東側（海側）に分かれ、国道の南西側を1区、北東側のなかでも北西側（高松方面）を2区、南東側（徳島方面）を3区とした。調査は2区、3区、1区の順で行った。2区は、調査区の北東部を南北方向に通る道路で分断されているが⁶、道路の西側は歩道橋の橋脚により調査を実施できる範囲が非常に限られていたため、トレンチ調査を行った。3区についても調査区の幅が狭小であったため、トレンチ調査を行った。

測量に使用する杭は測量業者に委託して設置した。測量はトータルステーションを使用して行った。調査は概ね遺構面までを重機により掘削し、以下は人力で掘削をした。

第2節 土層

1区土層（第4図）

1区では北東側の壁面の南部（土層図①）と南東側の壁面（土層図②）で土層図を作成した。

現地表標高約25mから厚さ65～90cmの造成土の下部で厚さ30～50cmの旧耕土や近世以降の遺物包含層であるにぶい黄褐色中疊混じり・灰黄褐色・暗褐色細疊混じり粘質シルトが堆積し、標高1.5～1.7mで褐色～にぶい黄色細疊混じり粗砂の基盤層を検出した。調査区南端部付近では灰黄褐色細疊混粘質シルトの包含層が8～15cm程度堆積する。遺構は包含層上面で確認した。包含層下部では遺構は確認できなかった。

2区土層（第5～7図）

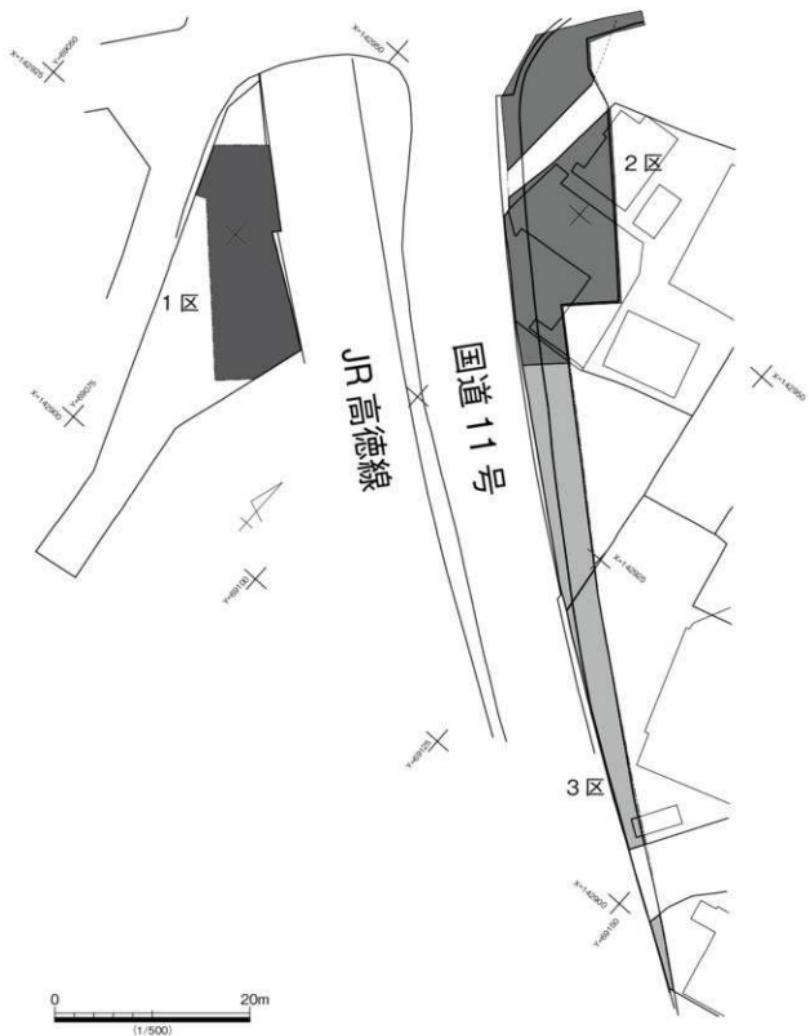
2区では、南西側の壁面（土層図①）、西側の壁面（土層図②）、南東側の壁面（土層図③）、南西部で突出した部分の北東側の壁面（土層図④）で土層図を作成した。

土層図①では、標高約28mの現地表面から70～90cmの造成土の下部で15～20cmの灰黄褐色～にぶい黄褐色中砂・細疊混じり粘質シルト層が堆積し、その下部で黄褐色細疊混中砂・褐色細疊混中砂の基盤層を検出した。

土層図②では、造成土は徐々に薄くなり、現地表面は北へ向けて傾斜する。北端では造成土の厚さは30cm程度である。基盤層の標高は概ね1.9m程度、SK2021付近から北は基盤層の標高は約1.7mである。基盤層は砂層、砂混粘質シルト層が交互に堆積し、砂堆の堆積層を示すと考えられる。

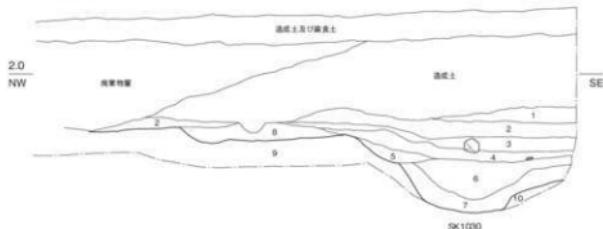
土層図③④では、2.8m程度の地表下で厚さ90～100cmの造成土の下部に、旧耕作土と考えられる、20cm程度のにぶい黄褐色粗砂・細疊混中砂・粘質シルト、暗褐～黒褐色細砂混粘質シルト層を挟み、褐色～黄褐色中砂混細砂の基盤層を検出した。遺構面の標高は2m前後である。SF2001は造成土下部、にぶい黄褐色細砂混中砂層から掘り込まれたと考えられる。

2区（歩道橋脇）では西側の壁面（土層図⑤）を作成した。地表面の標高約2.6mから厚さ70cm程度

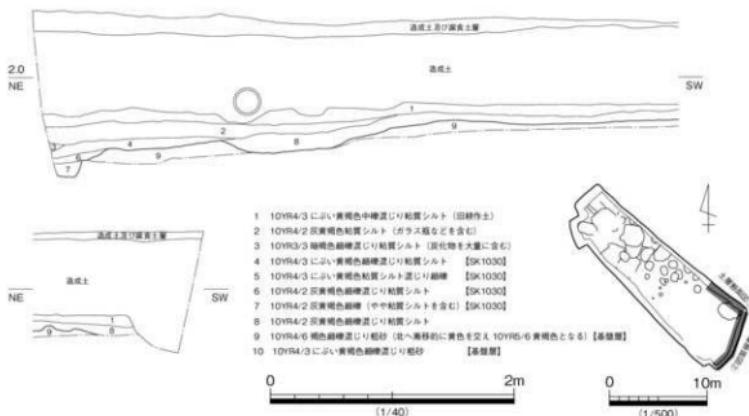


第3図 調査区割図

1区 土層断面図①

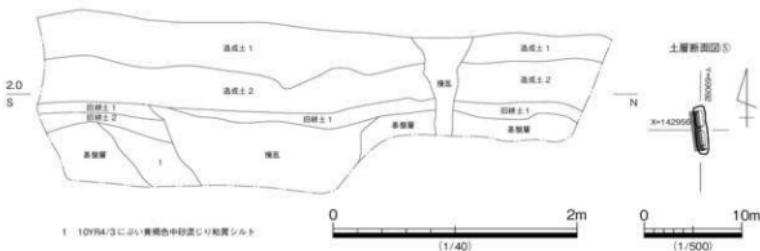


1区 土層断面図②



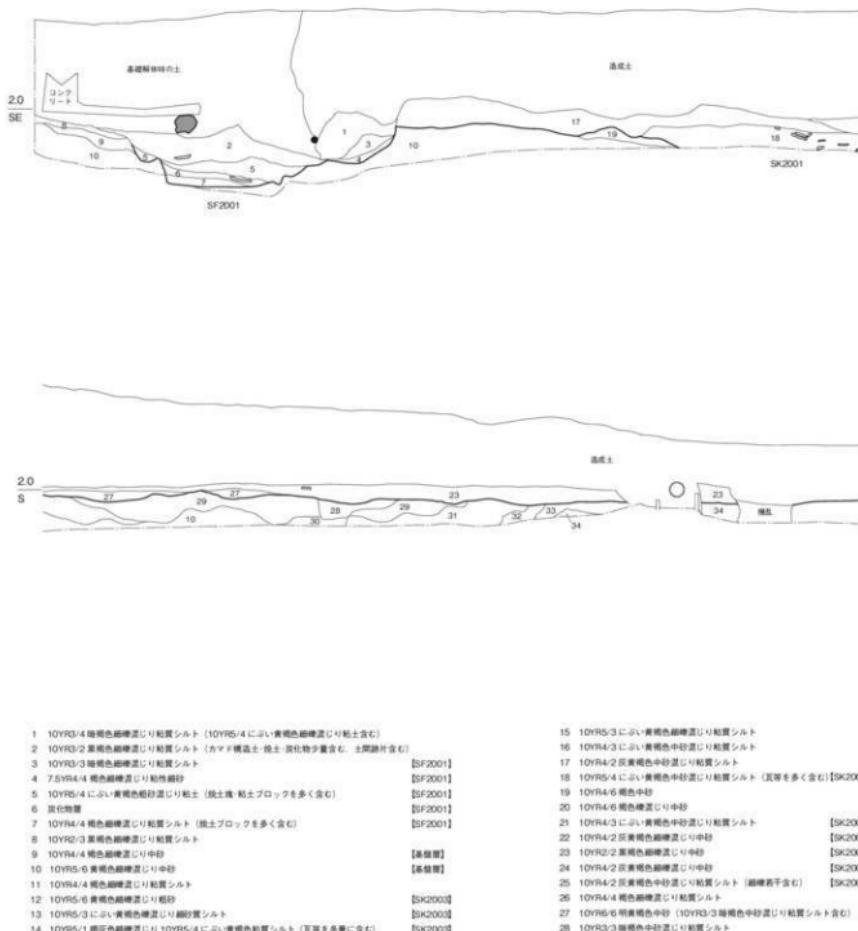
第4図 1区 土層断面①②

2区 土層断面図⑤

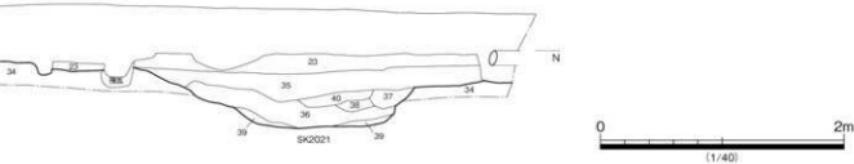
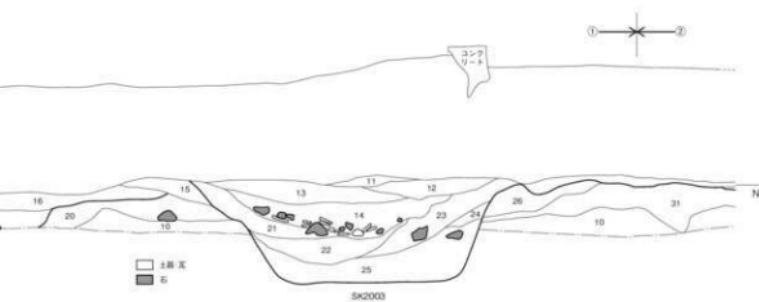


第5図 2区 土層断面図⑤

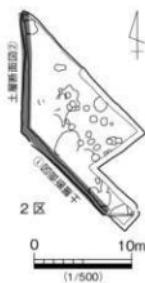
2区 土層断面図①②



第6図 2区

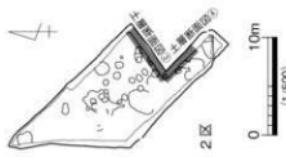
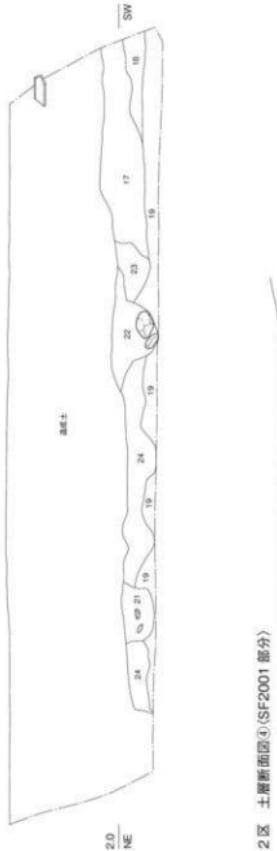


- 29 10YR4/4 黄色中砂混じり粘質シルト [10YR5/6 黄褐色粗砂混じり中砂 ブロック多く含む]
- 30 10YR3/4 棕褐色中砂混じり粘質シルト
- 31 10YR4/6 黄色中砂混じり粘質シルト
- 32 10YR3/3 棕褐色中砂 (炭化物微量含む)
- 33 10YR5/6 黄褐色粗砂
- 34 10YR4/4 黄色中砂混じり粘質
- 35 10YR4/3 に少し黄褐色～10YR5/6 黄褐色中砂混じり粘質 (炭化物若干含む)
- 36 10YR2/1 黄色中砂混じり粘性細砂 (炭化物多量に含む) [SK2021]
- 37 10YR4/4 黄色中砂 [SK2021]
- 38 10YR2/3 黑褐色中砂混じり粘質シルト [SK2021]
- 39 10YR3/3 棕褐色中砂混じり粘質シルト [SK2021]
- 40 10YR2/1 黄色中砂混じり粘度シルト



土層断面図①②

2区 土層断面図(3)

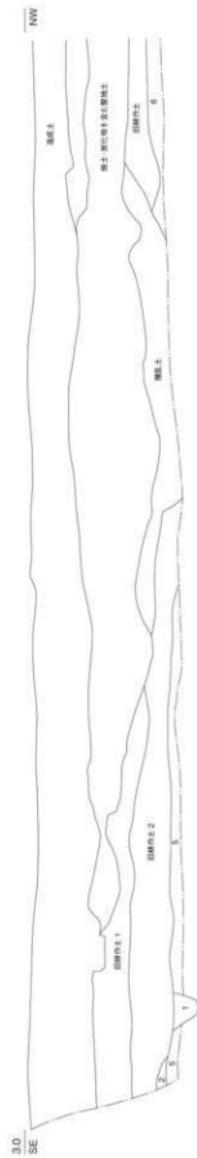


1. 10mS6に近い褐色粘土質砂層(10mS6シルト～細砂層)リムルート
2. SFH4.6 黄褐色砂層(10mS6シルト～細砂層)リムルート (漂砂土質)
3. 10mS4.6 黄褐色砂層(10mS6シルト～細砂層)リムルート (漂砂土質)
4. 7.5mH4.6 黄褐色砂層(10mS6シルト～細砂層)リムルート (漂砂土質)
5. 7.5mH4.6 黄褐色砂層(10mS6シルト～細砂層)リムルート (漂砂土質)
6. 9.5mH4.6 黄褐色砂層(10mS6シルト～細砂層)リムルート (漂砂土質)
7. SFH4.6 黄褐色砂層(10mS6シルト～細砂層)リムルート (漂砂土質)
8. 7.5mH4.6 黄褐色砂層(10mS6シルト～細砂層)リムルート (漂砂土質)
9. SFH4.6 黄褐色砂層(10mS6シルト～細砂層)リムルート (漂砂土質)
10. 7.5mH4.6 黄褐色砂層(10mS6シルト～細砂層)リムルート (漂砂土質)
11. SFH4.4 ごく薄い褐色粘土質砂層(10mS6シルト～漂砂土質)
12. 10mH4.4 黄褐色砂層(10mS6シルト～漂砂土質)
13. 8.5mH4.6 黄褐色砂層(10mS6シルト～漂砂土質)
14. 10mH4.6 黄褐色砂層(10mS6シルト～漂砂土質)
15. 10mS2 黄褐色砂層(10mS6シルト～漂砂土質)
16. 10mH4.4 ごく薄い褐色粘土質砂層(10mS6シルト～漂砂土質)
17. 10mH4.4 ごく薄い褐色粘土質砂層(10mS6シルト～漂砂土質)
18. 10mH4.4 黄褐色砂層(10mS6シルト～漂砂土質)
19. 10mH4.6 黄褐色砂層(10mS6シルト～漂砂土質)
20. 7.5mH2.4 黄褐色砂層(10mS6シルト～漂砂土質)
21. 10mH2.4 黄褐色砂層(10mS6シルト～漂砂土質)
22. 21.5mH2.4 黄褐色砂層(10mS6シルト～漂砂土質)
23. 10mH2.2 黄褐色砂層(10mS6シルト～漂砂土質)
24. 10mH2.3 黄褐色砂層(10mS6シルト～漂砂土質)

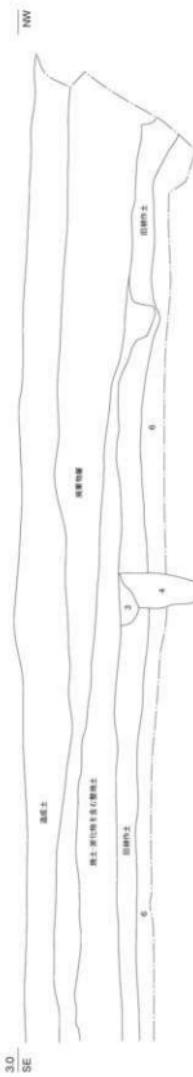
[SF2001]

第7図 2区 土層断面図(3)(4)

3区 土層断面図①



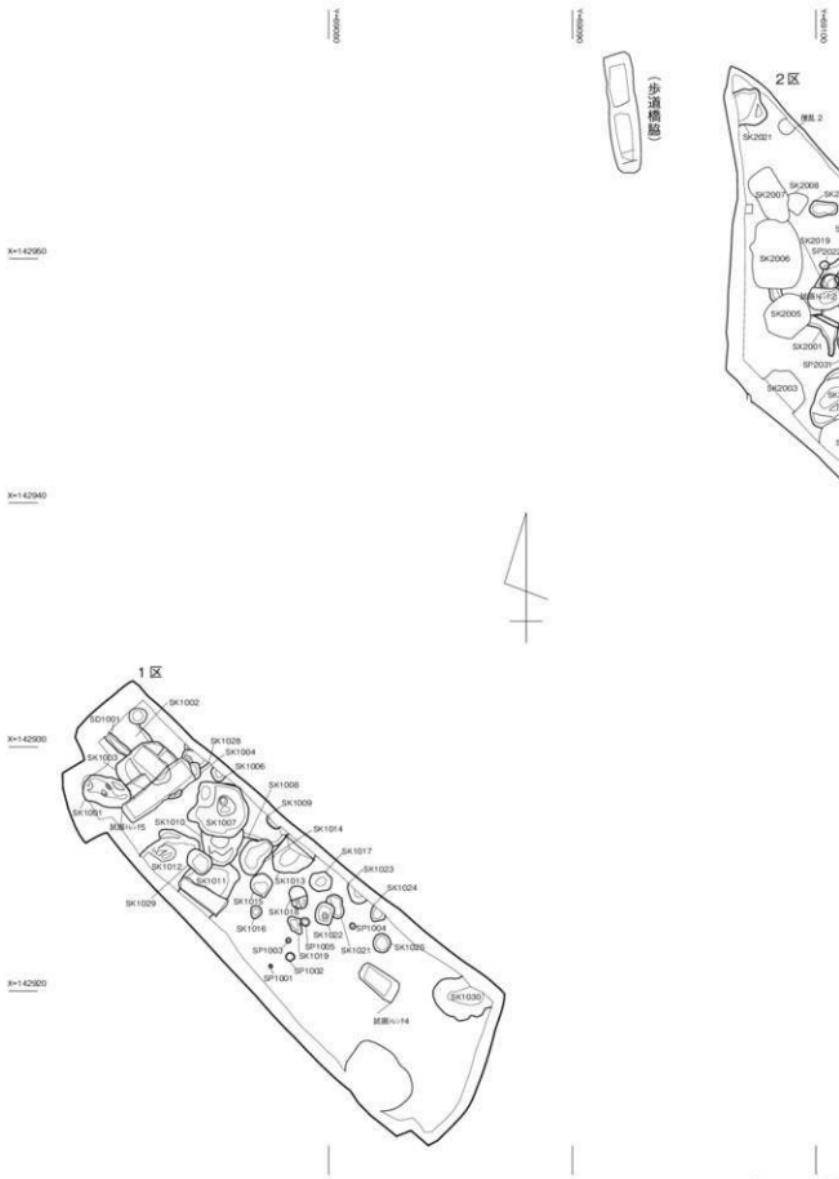
3区 土層断面図②



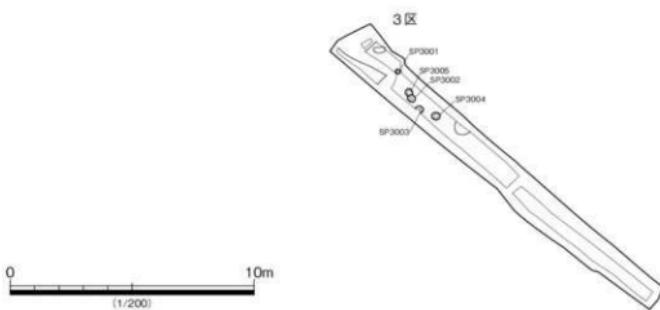
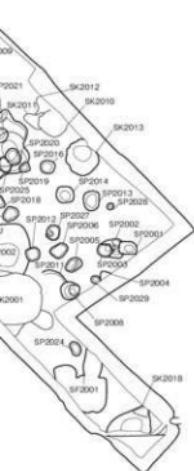
3区 土層断面図③

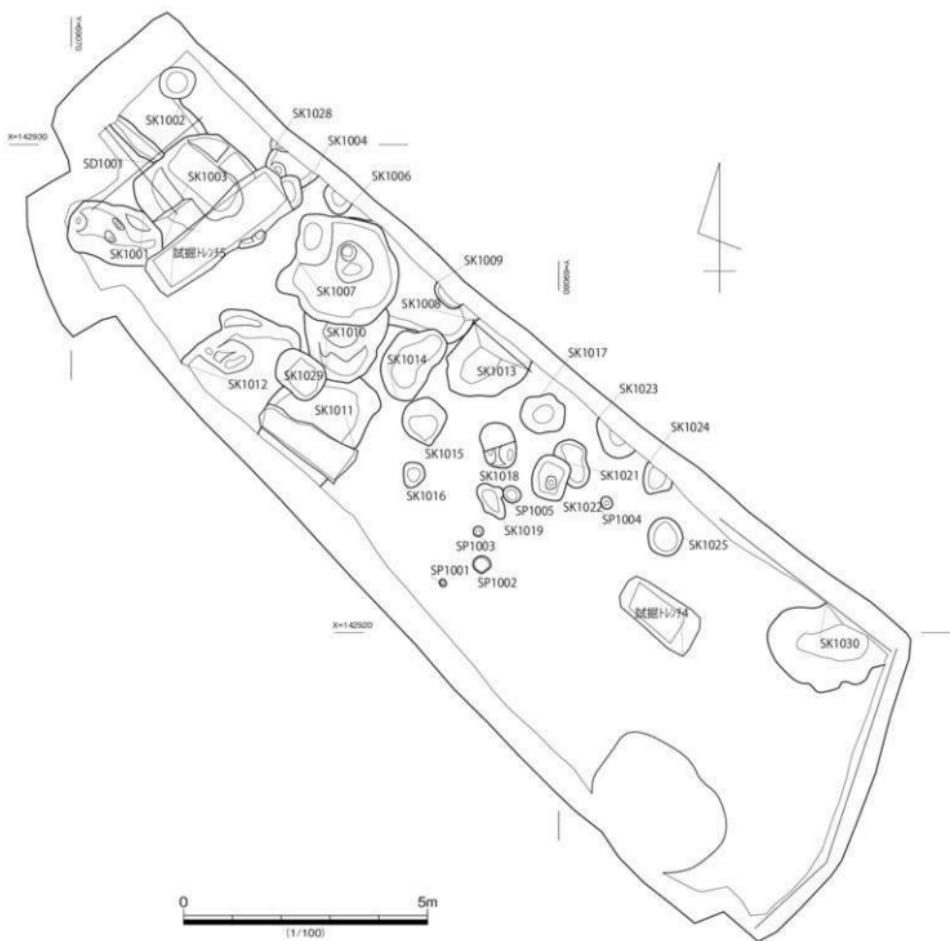


第8図 3区 土層断面図①②

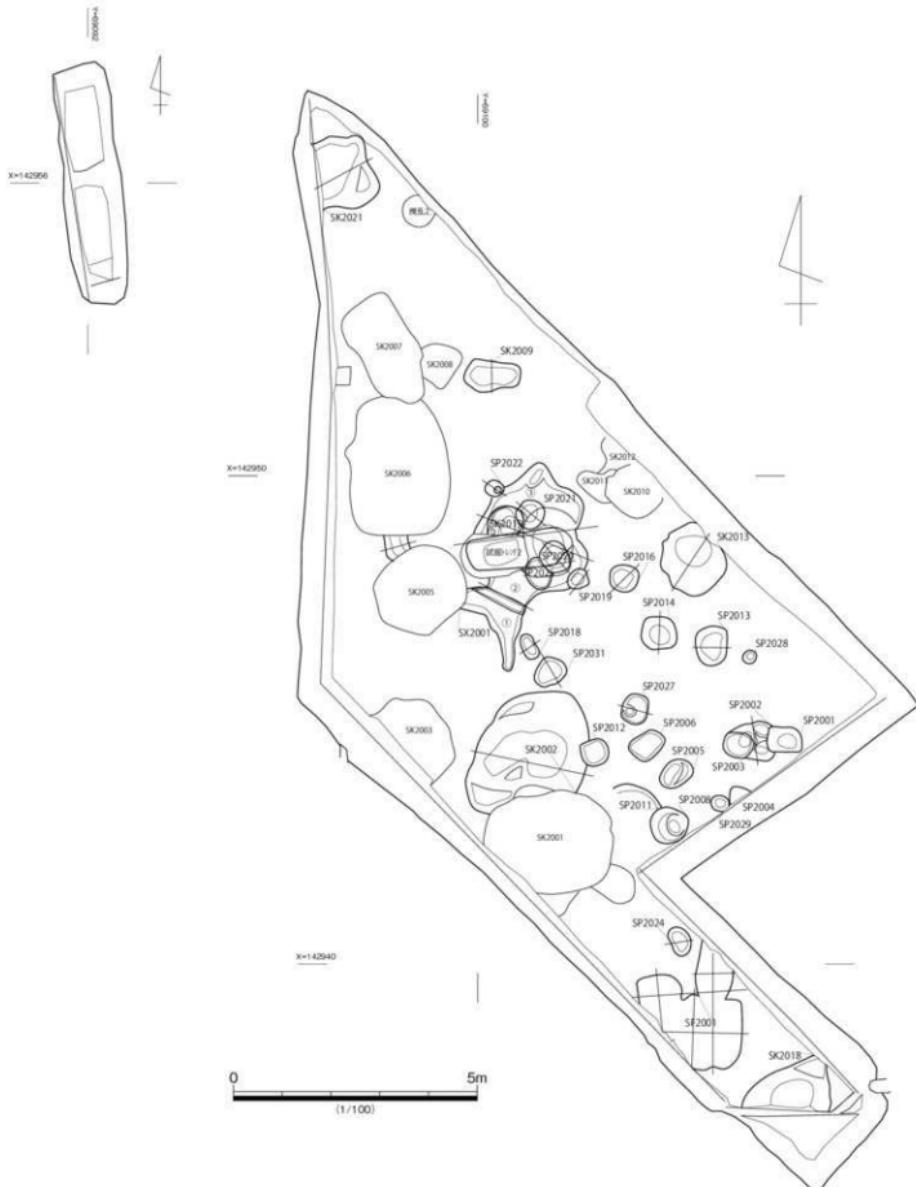


第9図 遺跡

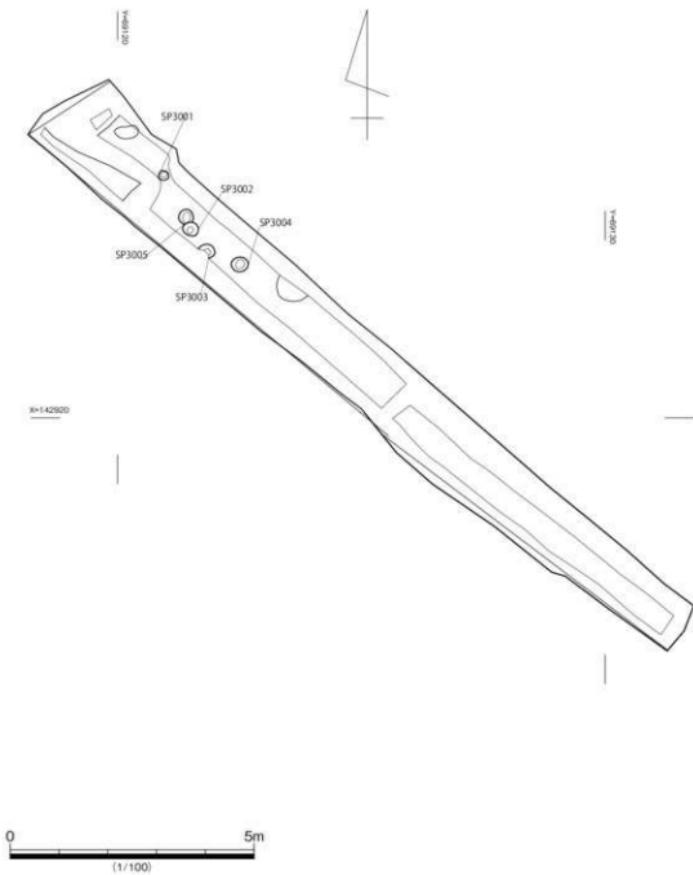




第10図 1区 遺構配置図



第11図 2区 遺構配置図



第12図 3区 遺構配置図

の造成土が堆積し、その下部で厚さ約10～20cmの旧耕作土が堆積する。標高約1.8mで基盤層を検出した。

3区土層（第8図）

3区では南西の壁面（土層図①）、北西の壁面（土層図②）の土層図を作成した。標高約3mの現地表面の下部で40～100cmの造成土、その下部で20～65cmの旧耕作土が堆積する。その下部、標高約1.8m

で黄褐色細礫混中砂・粘質シルトの基盤層を検出した。

第3節 遺構・遺物

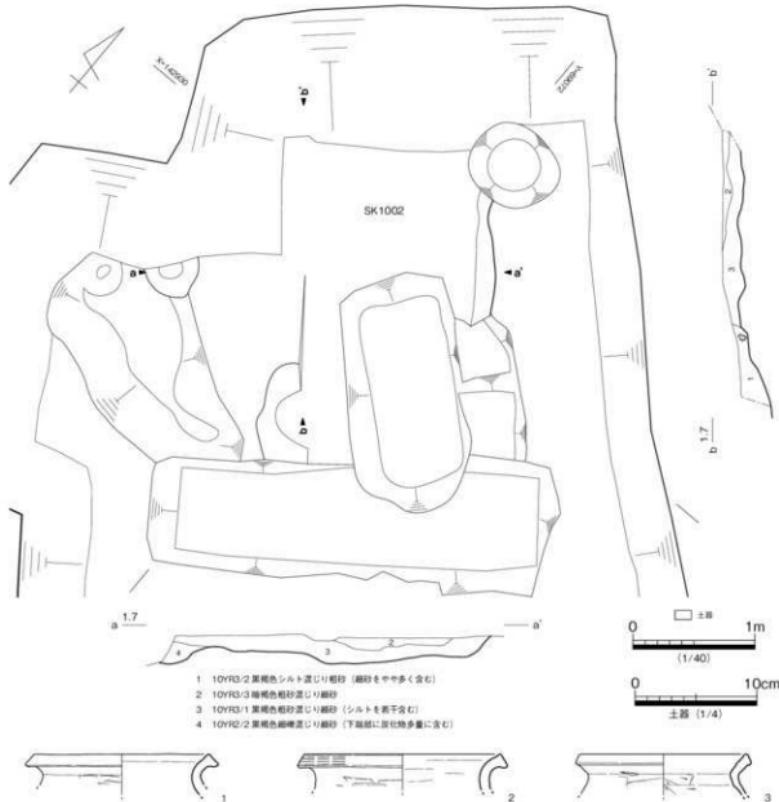
1. 弥生時代の遺構・遺物

①土坑

1区 SK1002（第13図）

1区北西端部で検出した。北西側は調査区外へ延び、南西・南東側はSK1001、SK1003により消失するため、全体の規模・形状は明らかでない。幅約2.5mを検出した。深さは約20cmで、埋土は概ね暗褐色～黒褐色粗砂・細礫混細砂である。埋土中からはほとんど摩滅を受けない弥生土器、サヌカイト片が出土した。

1～3は弥生土器である。1・2は壺、3は甕である。



第13図 1区 SK1002 平・断面図、出土遺物

遺構の時期は、出土遺物により弥生時代後期前半と考えられる。

2. 近世以降の遺構・遺物

① 窯

2区 SF2001（第14～16図）

2区南西端部で検出した。南西側と北東側は調査区外へ延びる。主軸方向はほぼ南北方向である。南側には作業場、北側に2基の窯がつく。遺構の形状から砂糖窯と考えられる。

南側の作業場は、方形で、南北が1.1m、東西が1.4m程度現存する。深さは約17cm、最下部には8～14cm程度の焼土ブロックを多く含む土層により貼床とし、その上部には窯内から掻き出したと考えられる炭化物層が堆積する。貼床後の作業場の標高は窯に近い側では焚口と同程度で、作業場の外側へ向けて徐々に上側へ傾斜する。

窯は2基設置される。2基の窯は別々に掘削され構築されている。残存状況が比較的良好な東側の窯は、作業場の東端付近から取り付き、長方形を呈する。規模は、石列の外側で長さ90cm、幅60cm、深さ10cmで、長辺部分では幅14～16cmの石列を1段検出した。石列間の内側の幅は25cm程度である。最奥部には石は設置されず、煙出しにつながると考えられる。石列の上面は被熱により全体に赤変しており、窯を使用していた時に露出していたと考えられる。窯の底部は平らで、1～2cm程度の暗褐色粗砂混粘土を貼り付ける。窯内は全体に被熱により硬化している。

西側の窯は東側の窯から芯々距離で105～130cm程度西側で、主軸方位を東側の窯よりやや西へ振る方向で検出した。長方形を呈し、規模は、石列の外側で長さ70cm、幅60cmである。長辺部分では幅18～22cmの石列を1段検出した。石列の上面は被熱により全体に赤変している。石列間の内側の幅は25cm程度である。奥側に石は設置されず、煙出しにつながると考えられる。底部は平らにし、厚さ1cm程度の暗褐色粗砂混粘土を貼り付ける。その上部には炭化物層が堆積する。東側の窯よりやや長さが短い。窯内は、東側の窯同様、被熱による硬化が認められる。

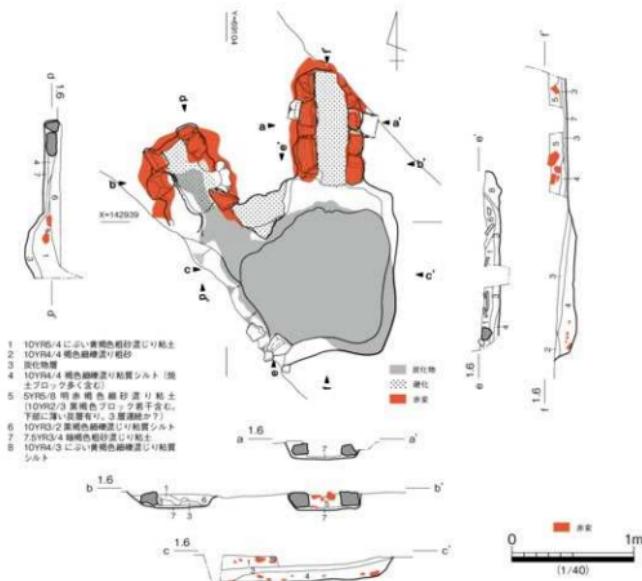
四国民家博物館に移築復元されている砂糖窯は、窯の形状が違うものの、焚口が2段になっており上段に薪を置いた状態で展示されている。本来は、石列の上面に鉄の棧等を設けてその上で薪を燃焼させたと考えられる。

作業場と窯の境付近で、東側の窯と西側の窯の間は粘土が硬化しており、高熱の影響を強く受けたと考えられる。

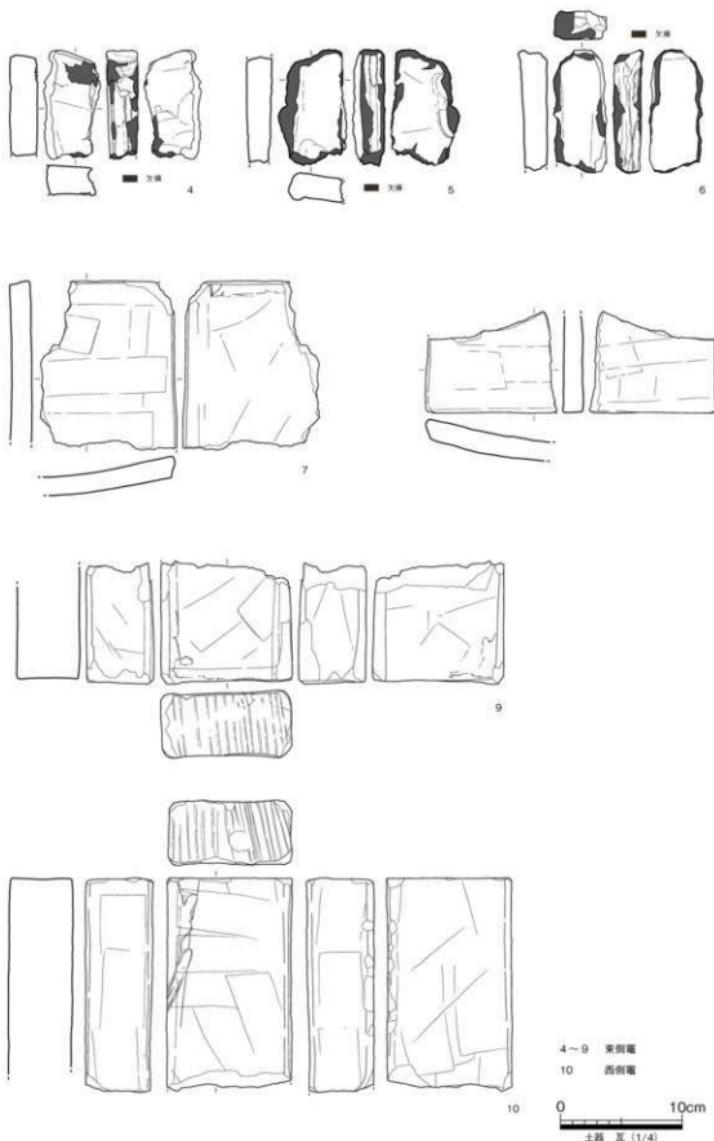
窯には2個の大釜が設置され、それぞれ灰汁を除去する工程に使用する「荒釜」と、灰汁を除去した後の圧搾汁の水分を蒸発させて粗製糖を製造する「揚釜」の役割がある。2基の窯はそれぞれの役割に相当すると考えられる。

両側の窯の内部からは窯の壁と考えられる多量の焼土塊のほか、多量の平瓦、レンガが出土した。窯廃絶後の作業場の堆積土からは瓦が多量に出土した。

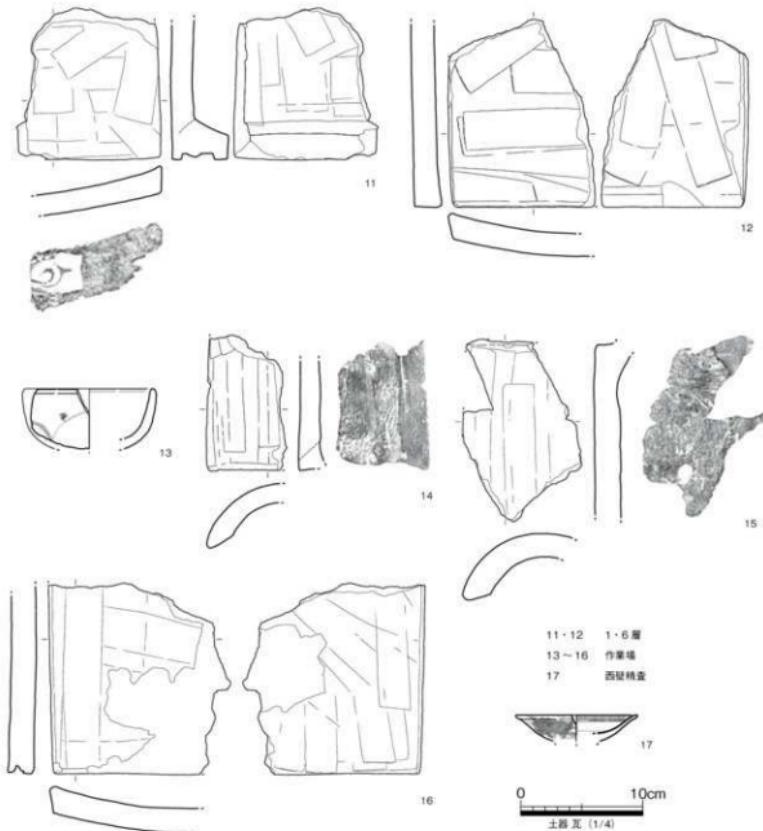
4～9は東側の窯から出土した。4～6は長辺8～9cm、短辺4～5cm、厚さ2cm程度の土師質の直方体に近い形状で、脆い。長辺側の側面には縦方向に断面が半円状の溝がある。同様の遺物は他にも出土している。窯を構築する壁材の一部か。7・8は平瓦。いずれも凹面には横方向の板ナデを施し、凸面はほとんど調整痕を残さない。側縁部の凹面側の端部は丸みを持ち、凸面側の端部には角がある。凸面から側縁部中程までの型成形によるものであろう。この特徴は神野遺跡出土平瓦全般にあてはまり、こ



第14図 SF2001 平・断面図



第15図 SF2001 出土遺物1



第16図 SF2001 出土遺物2

これらがほぼ同時期に廃棄されたことを示していると考えられる。9はレンガ片である。直方体と考えられ、広い面は型に嵌めたのちに粗くナデで、小口は短辺方向と同方向の直線の刻み目を施す。10は西側の竈から出土した遺物である。10は9と同規格のレンガで、製作方法も同じである。11・12は竈部分・作業場を通して炭化物層より上部で出土した遺物で、砂糖壺の廃絶後に堆積した遺物である。SF2001の最終的な埋没に伴う遺物と考えられる。11は軒平瓦。12は平瓦。とともに凹面は横方向の板ナデで、長辺側の端面は最後に縦方向に板ナデする。13～16は作業場から出土した遺物である。13は陶胎染付椀。外面には染付で草花文を描く。14・15は丸瓦。凹面側の側縁部は面取りし、端部は丸く仕上げる。14には凹面に布目痕、15にはコピキBの痕跡が残る。16は平瓦。7・8・12と同規格と考えられる。17は調査区南西側壁面の、SF2001に該当する部分を精査中に出土した。上部に堆積していた埋め立て土のから出土した可能性もある。磁器皿。外面に花文を染付で描き、内面には口縁部に帯状に染付を施す。

遺構の時期は、出土遺物の大半が瓦、竈材、レンガで、時期が明らかになる遺物は乏しい。しかし、後述する2区SK2006からは、廃棄された砂糖竈の竈材と考えられるレンガや焼土塊等とともに、統制陶磁器（太平洋戦争直前から直後である昭和16～20（1941～1945）年に政府によって製造が規制された陶磁器）が出土しており、SF2001は太平洋戦争中前に廃絶したと考えられる。多量に出土した瓦は、砂糖竈を覆う「釜屋」の建物で使用した可能性が考えられる。

②土坑

1区 SK1003（第17図）

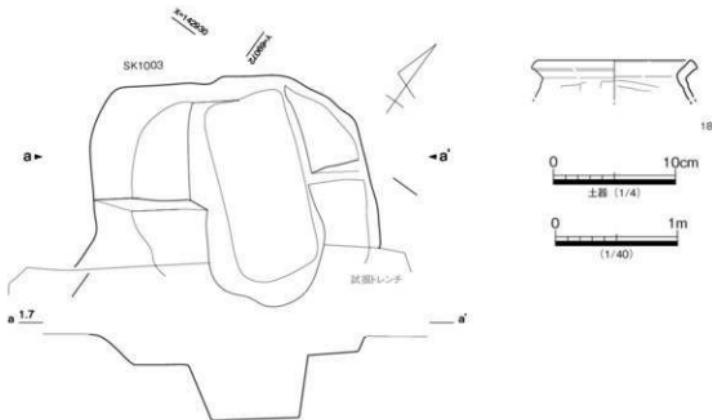
SK1002の東南部で検出し、SK1002、SD1001を掘り込む。東南部は試掘トレンチにより消失する。試掘トレンチより東南部に一部検出した落ち込みは、SK1003の一部である可能性がある。隅丸方形または不整形を呈し、長軸27m、短軸23mで、遺構の北東側と南西側は一段高い段掘り状を呈する。試掘調査の記録から、深い部分は後から掘りこまれたものである。深さは北東側、南西側が約30cm、中央部付近が70cmで、試掘調査の記録から埋土は深い部分が灰褐色砂質土（黒灰色粘質土ブロックを含む）、浅い部分は黄灰色砂質土で弥生土器、土師器を含むものである。埋土中からは摩滅した弥生土器小片、近世以降の土師質土器の大型壺体部片が出土した。弥生土器小片はSK1002からの混入と考えられる。

18は弥生土器甕。弥生時代後期前半で、SK1002出土のものと同時期と考えられる。

近代の遺構であるSD1001を掘り込むことから、遺構の時期は近代以降と考えられる。

1区 SK1007（第18図）

1区中央やや北西寄りで検出した。遺構の重複関係により、SK1008・SK1010より新しい。不整形で長軸24m、短軸22m、深さは10cm程度である。中央付近および北西部は部分的に深く、ともに遺構



第17図 1区 SK1003 平・断面図、出土遺物

面から20cm程度を測る。最も深い中央やや北寄り部分は深さ約40cmである。埋土中からは土師質土器小片、磁器片が出土した。

19は磁器小椀である。樹木や葉葺きの家を染付で描く。

遺構の前後関係により、後述する昭和16（1941）年以降の遺構であるSK1010より新しいことから、遺構の時期は昭和16（1941）年以降と考えられる。

1区 SK1008（第19図）

1区中央部付近、北東部壁面に接して検出した。遺構の重複関係によりSK1007・SK1010・SK1014より古い。北東半部は調査区外へ延びる。長楕円形を呈し、長軸3.2m程度、短軸1.5m以上と考えられ、深さは20cmである。埋土中からは瓦片、陶器壺小片が出土した。

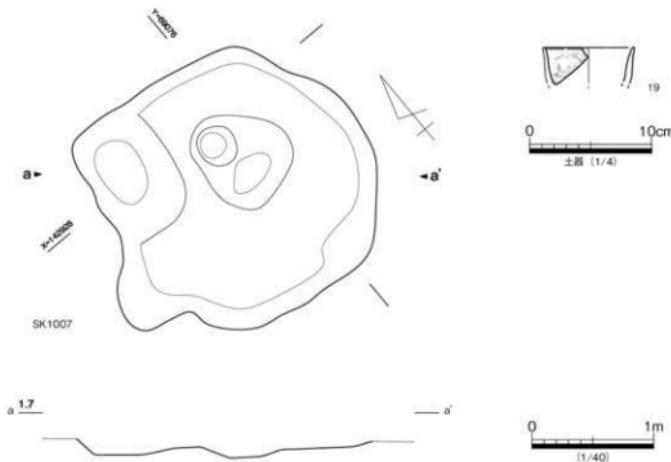
出土遺物から、遺構の時期は近世以降と考えられる。

1区 SK1010（第20図）

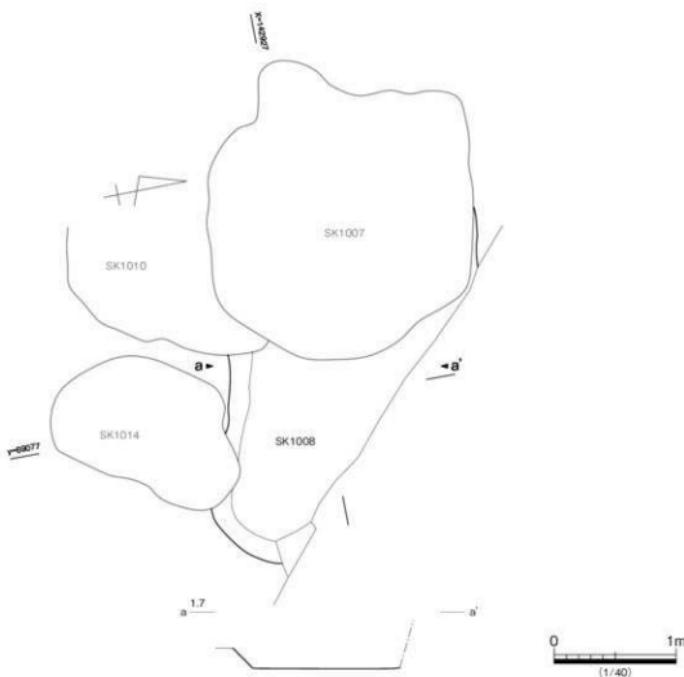
1区中央部やや北西寄りで検出した。遺構の重複関係により、SK1011より新しく、SK1007より古い。楕円形で、長軸1.8～3.4m、短軸1.7mで、南側が高い段掘り状になる。深さは南側で20cm、北側では30cmである。埋土中からは瓦片、陶器の椀のほか、スレートの破片が出土している。

20は軒平瓦。瓦当部が一部残る。

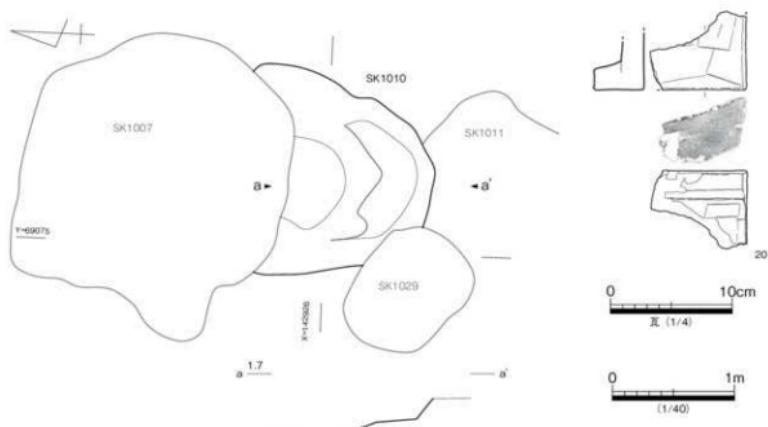
昭和16（1945）年以降の遺構であるSK1011を掘り込むことから、遺構の時期は昭和16（1945）年以降である。



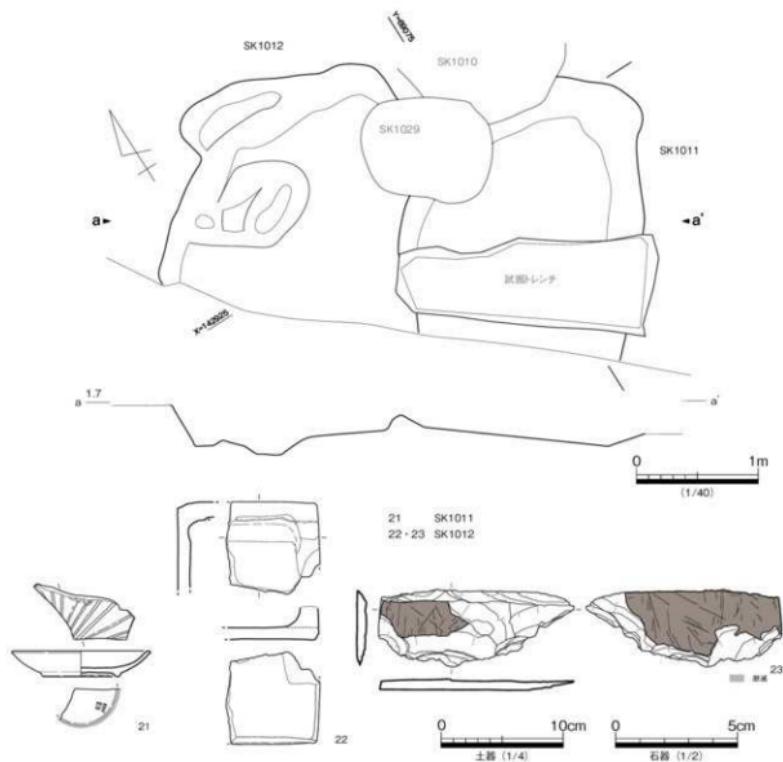
第18図 1区 SK1007 平・断面図、出土物



第19図 1区 SK1008 平・断面図



第20図 1区 SK1010 平・断面図、出土遺物



第21図 1区 SK1011・SK1012 平・断面図、出土遺物

1区 SK1011（第21図）

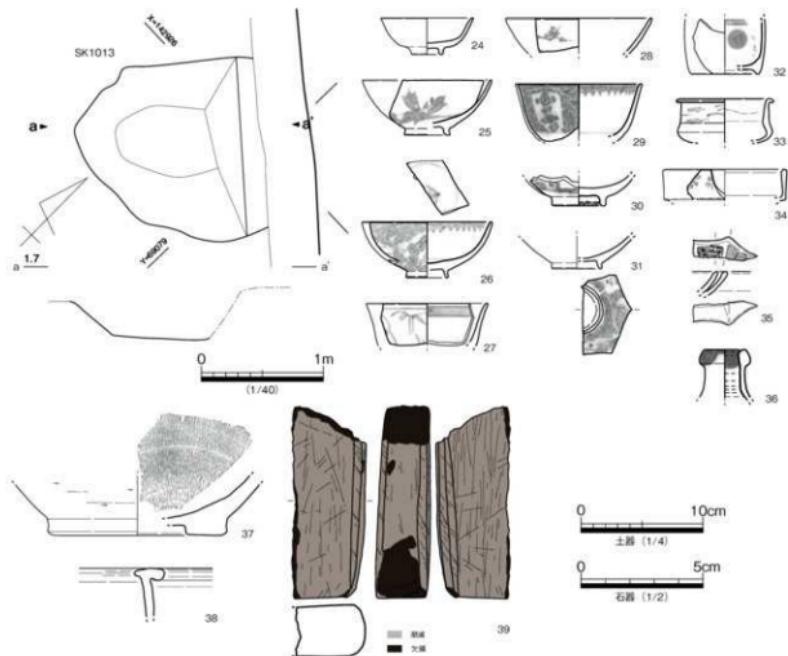
1区中央付近で検出した。西南側は調査区外へ延びる。遺構の前後関係により、SK1010より古く、SK1012より新しい。検出範囲では隅丸方形で、長軸22m以上、短軸2.0m、深さは12cmである。埋土中からは磁器片が出土した。

21は磁器皿。青磁の色合いを呈する。高台内に「岐6038」の刻印がある。岐阜県で作られた統制陶磁器である。製造品や数量を管理するために義務付けられた生産者別表示番号で、「岐」は岐阜県産であることを表す。

統制陶磁器が出土したことから、遺構の時期は昭和16（1945）年以降と考えられる。

1区 SK1012（第21図）

1区中央部やや北西寄りで検出した。南西側は調査区外へ延びる。南東側でSK1011に掘り込まれ、遺構の前後関係によりSK1011より古い。楕円形を呈し、長軸2.2m以上、短軸1.8m以上である。遺構



第22図 1区SK1013 平・断面図、出土遺物

の中央西北端付近はピット状にやや深く掘りこまれる。深さは浅い部分で15cm、ピット状の最も深い部分で40cmである。埋土中からは弥生土器小片やサヌカイト片とともに土管状の土師質土器片や陶磁器片が出土した。土管状の土器片は、砂糖壺の煙突の一部と考えられる。

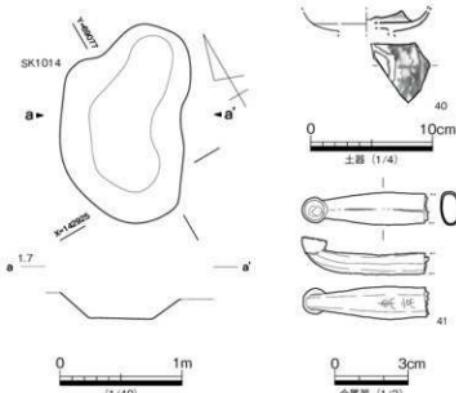
22は瓦質土器壺の一部。方形で、上面の1角が残ると考えられる。内面の屈曲部は強い指ナデで成形し、外側面はヘラ磨きで平滑に仕上げる。23はサヌカイト片。加工痕があり、表・裏面ともに摩滅する。

その他、砂糖壺の煙突と考えられる土管状の土師質土器片が出土した。SF2001からは少し離れており、SF2001で使用されたものではない可能性もあるが、SF2001周辺で出土した煙突と類似しており、構造の時期は近代以降と考えられる。

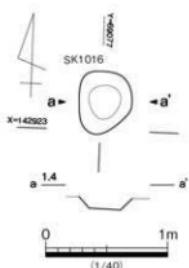
1区SK1013(第22図)

1区中央部付近で検出した。平面形は楕円形と考えられ、北東側は調査区外へ延びる。長軸1.5m以上、短軸1.5m程度で、深さは33cmである。埋土中からは近代以降の陶磁器片、砥石、ガラス小瓶、ビーベ等が出土した。

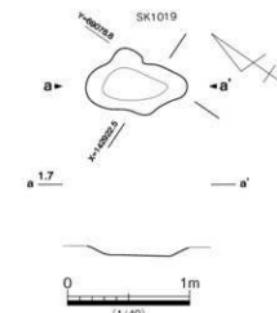
24～34は磁器。24～31は碗。25は外面に銅板転写により緑色に発色する顔料で木の枝を描く。26は内外面ともに型紙刷りにより施文する。28は外面に梅花文を描く。青色の顔料が描線の外へも薄く



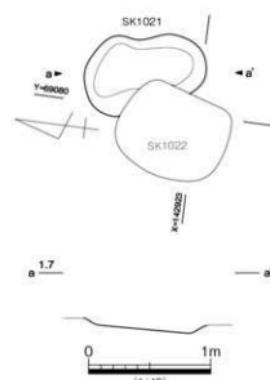
第23図 1区SK1014 平・断面図、出土遺物



第24図 1区SK1016 平・断面図



第25図 1区SK1019 平・断面図



第26図 1区SK1021 平・断面図

はみ出し、ぼやけた仕上がりである。29はコバルトの顔料を使用して型紙刷りによる施文する。30は外面に青色と緑色に発色する顔料により文様を描く。高台内側に離れ砂痕を残す。31は外面を型紙刷りにより文様を施す。32は壺底部。外面に「福」の字と文様を描く。33は香炉。34は段重。底部外面は無釉。文様には青色と緑色の顔料を使用する。35～38は陶器。35は珉平焼小皿。緑色の釉を全面に掛け、形状は多角形である。36は壺口縁部。全体に赤褐色の鉄釉を掛け、口縁端部内外面は厚く施釉する。37は擂鉢。高台底部以外は赤褐色の鉄釉で施釉する。38は甕口縁部。口縁端部を内外に拡張する。39は砥石。6面のうち2面は折損。3面に摩滅痕がある。安山岩。

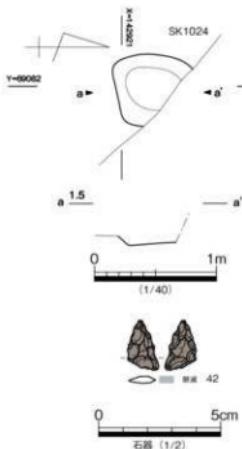
型紙刷りや銅板転写による施文する磁器碗が出土したことや顔料にコバルトの使用が認められることにより、造構の時期は近代以降である。

1区SK1014（第23図）

1区中央部付近で検出した。SK1008を切り込む。椭円形を呈し、長軸1.6m、短軸1.0m、深さ18cm



第27図 1区 SK1022 平・断面図



第28図 1区 SK1024 平・断面図、出土遺物

を測る。埋土中からは陶磁器片、土師質土器の大型窓片、キセルが出土した。

40は磁器椀。高台部分は全体に故意に打ち欠く。外面の樹木文の向きが、高台に近い方が下側となっていたので焼として復元したが、蓋の可能性もある。41はキセル。底部に「東京」の刻印がある。

キセルに「東京」の刻印があることから、遺構の時期は近代以降である。

1区 SK1016(第24図)

1区中央付近で検出した。概ね円形で、直径0.5m、深さ17cmである。埋土中からは近世以降と考えられる焼し瓦の小片が出土した。

遺構の時期は近世以降と考えられる。

1区 SK1019(第25図)

1区中央付近で検出した。楕円形で長軸0.8m、短軸0.4m、深さ7cmである。SP1005とは前後関係はない。埋土中からは型紙刷りにより施文した磁器小片、ビー玉等が出土した。

遺構の時期は、出土遺物により近代以降である。

1区 SK1021(第26図)

1区やや南東寄りで検出した。楕円形で長軸1.0m、短軸0.6m、深さ6cmである。SK1022に掘り込まれる。埋土中からは、近世以降と考えられる陶器椀、瓦質土器小片が出土したのみであった。

遺構の時期は、出土遺物により近世以降と考えられる。

1区 SK1022(第27図)

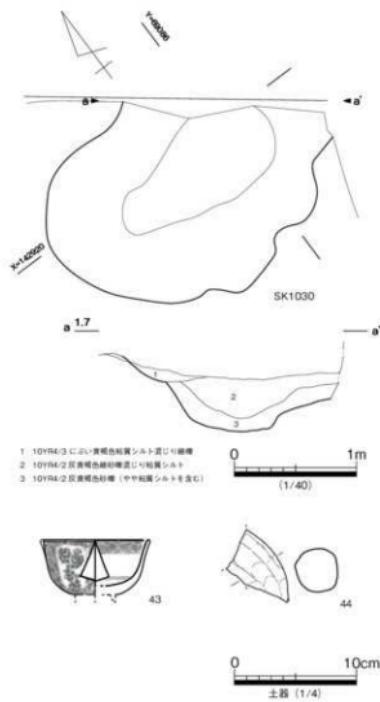
1区中央付近で検出した。隅丸方形を呈し、中央付近にはさらにピット状の掘り込みがある。長軸0.9m、短軸0.7m、深さは浅い部分が11cm、深い部分は17cmである。遺構の前後関係により、SK1021より新しい。埋土中から土器小片が出土したのみである。

SK1021を掘り込むことから、遺構の時期は近世以降と考えられる。

1区 SK1024(第28図)

1区南東部で検出した。北東部は調査区外へ延びる。隅丸方形で、長軸0.7m以上、短軸0.6m程度、深さ6cmである。埋土中からは石鎚が出土したのみであった。

42は石鎚。凹基式で基部の一方は欠損する。サヌカイト製。全体に摩滅しており、混入遺物と考え



第29図 1区 SK1030 平・断面図

た色絵により施文する。やや歪みがある。46は土師質土器壺。口縁端部よりやや下側に沈線と緩い波状文を施す。口縁端部から体部内面にはスヌが付着する。47～53は瓦。47は丸瓦。下部小片。下端部、側縁部の凹面側を面取りする。凹面に内叩き痕を残す。48～53は平瓦。いずれも凹面側は横方向の板ナデのち側縁部に縱方向のナデを施し平滑に仕上げ、凸面側には成形痕がほぼ残らない。49・50は4隅のうち1隅を短辺側約15cm、長辺側約12cmで三角形に欠損する。焼成後道具瓦として加工した可能性がある。49・51・52には凹面側に屋根に葺いていた際にできたと考えられる色調の変化がある。瓦の大きさは、概ね長辺が26cm程度、短辺側の狭端側が22.5cm、広端側が24cm程度で、同一規格の瓦と考えられる。これらの平瓦はSF2001と同一の規格である可能性がある。

遺構の時期は出土遺物により近代以降と考えられる。

2区 SK2002（第33図）

2区中央やや南寄りで検出した。SK2001に切り込まれる。楕円形を呈し、長軸3.0m程度、短軸2.3m、深さ60cmである。埋土中からは陶磁器片、土師質土器焙烙片等の土器小片、平瓦・丸瓦小片等が出土した。

54は縄文土器深鉢。外面に刻目突帯を巡らせる。縄文時代晚期。55は磁器碗。体部をていねいに打

られる。

遺構断面の画像によりSK1013の掘り込み面が旧耕土層と考えられることから、近代以降と考えられる。

1区 SK1030（第29図）

1区東隅で検出した。楕円形で検出面での規模は長軸2m以上、短軸1.7m、深さ62cmである。東側は調査区外へ延びる。埋土中からは磁器片、瓦片、土師質土器杯・足釜脚部小片が出土した。

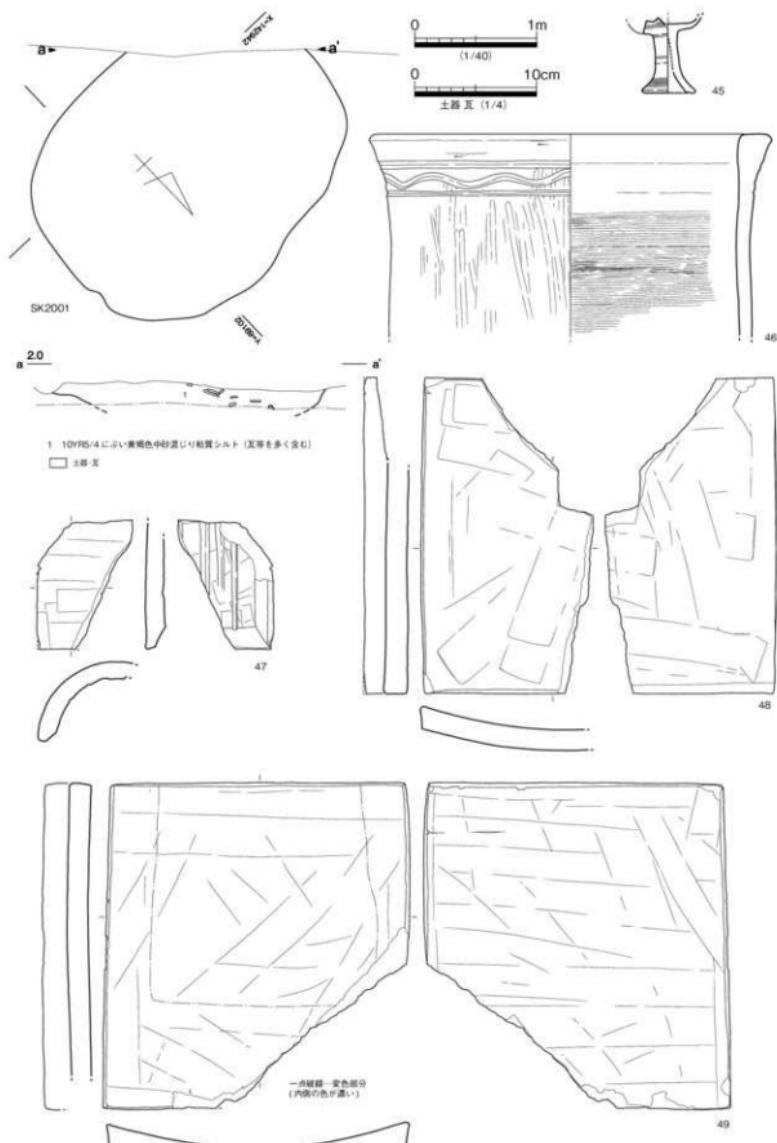
43は磁器碗。顔料はコバルトで型紙刷りにより施文する。44は土師質土器足釜脚部。中世の遺物で、混入と考えられる。

出土遺物により、遺構の時期は近代以降である。

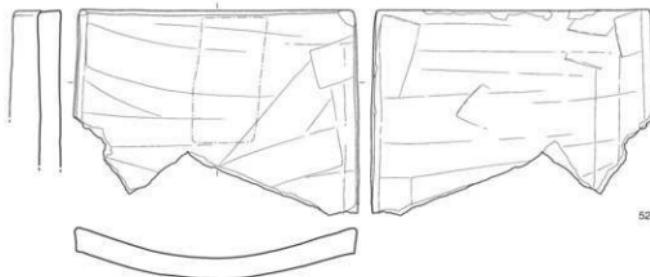
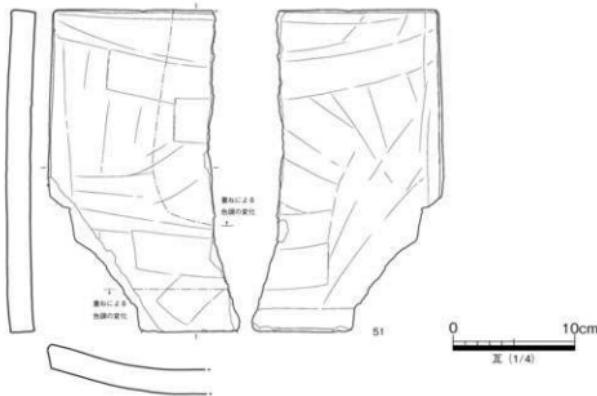
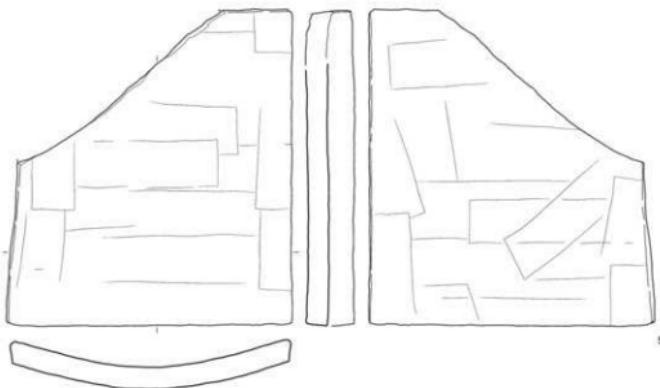
2区 SK2001（第30～32図）

2区西南部で検出した。2区土層断面図①から、造成土、旧耕土と考えられる層の下部で検出したことわかる。SK2002を切り込む。隅丸方形と考えられ、南北側は調査区外へ延びる。長軸2.6m程度、短軸2.0mである。埋土中からは多量の瓦のほか、陶磁器片、土師質土器片、錫びた鉄片が出土した。

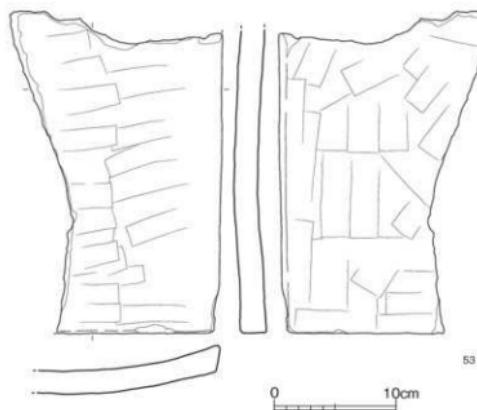
45は磁器。仏壇器である。外面は赤色を使用した色絵により施文する。やや歪みがある。46は土師質土器壺。口縁端部よりやや下側に沈線と緩い波状文を施す。口縁端部から体部内面にはスヌが付着する。47～53は瓦。47は丸瓦。下部小片。下端部、側縁部の凹面側を面取りする。凹面に内叩き痕を残す。48～53は平瓦。いずれも凹面側は横方向の板ナデのち側縁部に縱方向のナデを施し平滑に仕上げ、凸面側には成形痕がほぼ残らない。49・50は4隅のうち1隅を短辺側約15cm、長辺側約12cmで三角形に欠損する。焼成後道具瓦として加工した可能性がある。49・51・52には凹面側に屋根に葺いていた際にできたと考えられる色調の変化がある。瓦の大きさは、概ね長辺が26cm程度、短辺側の狭端側が22.5cm、広端側が24cm程度で、同一規格の瓦と考えられる。これらの平瓦はSF2001と同一の規格である可能性がある。



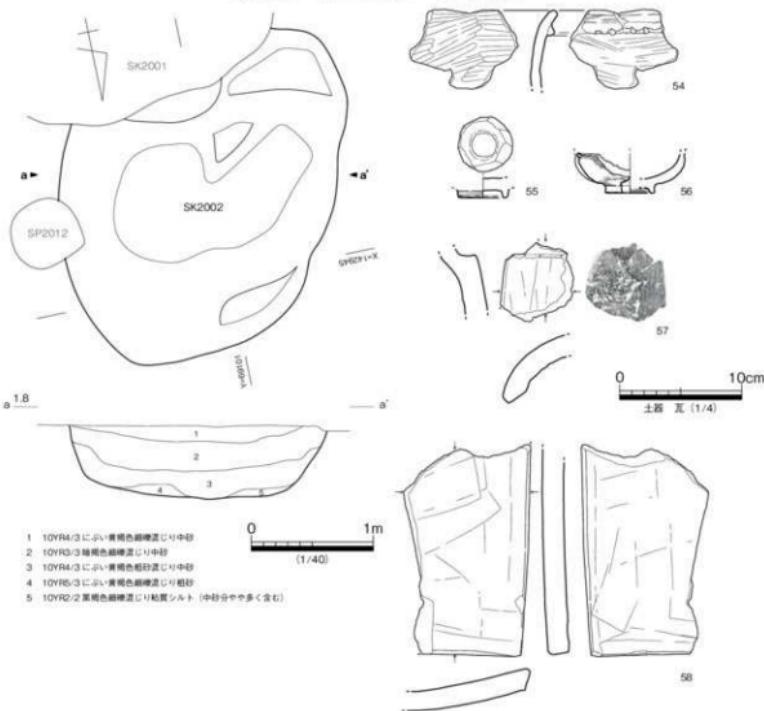
第30図 2区 SK2001 平・断面図、出土遺物 1



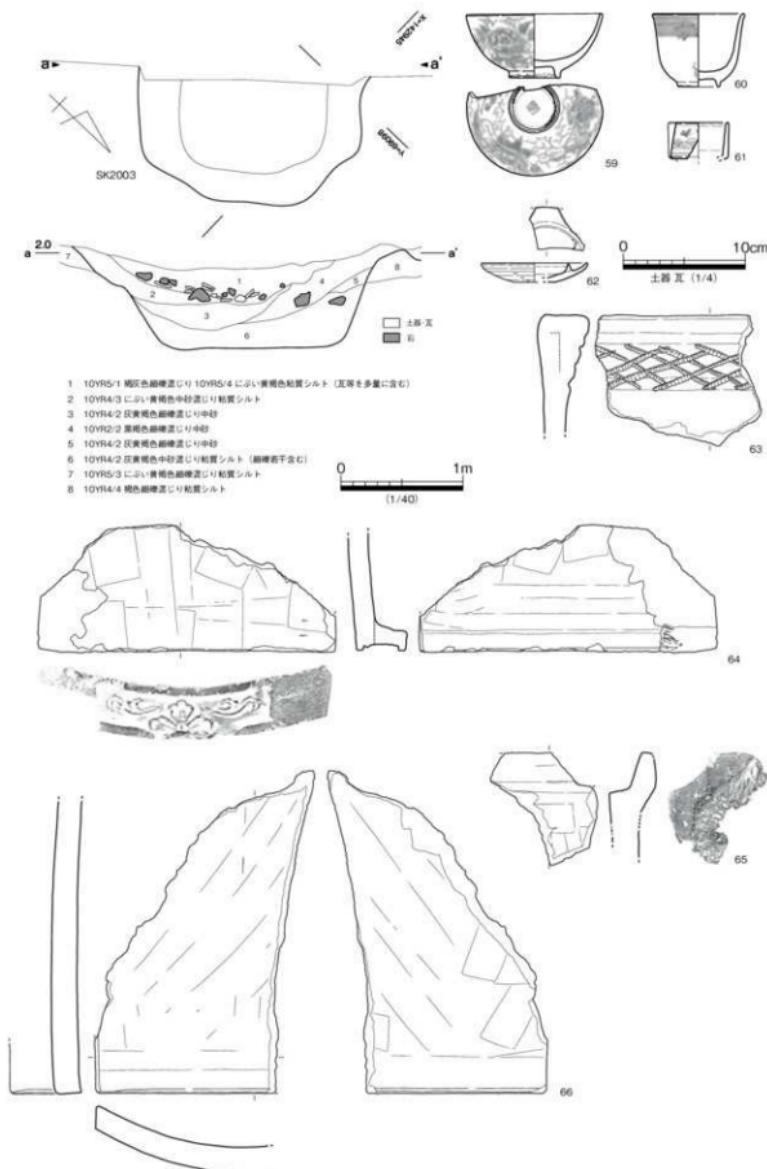
第31図 2区 SK2001 出土遺物2



第32図 1区 SK2001 出土遺物3



第33図 2区 SK2002 平・断面図、出土遺物



第34図 2区 SK2003 平・断面図、出土遺物

ち欠いて円盤状にする。見込みには蛇の目釉剥ぎを施す。56は陶器椀。内面には透明釉、外面には鉄釉を掛ける。鉄釉は部分的に垂れ流したように厚くなる。瀬戸美濃産。57は丸瓦。玉縁部分がわずかに残る。凹面側の側端部は面取りするが、端部までは及ばず、丸みを持つ。58は平瓦。

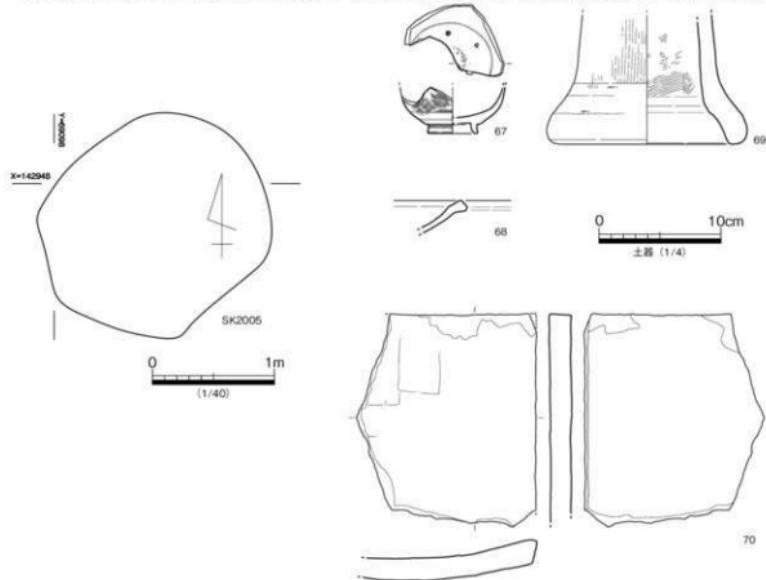
遺構の時期は出土遺物から近世以降と考えられる。

2区 SK2003 (第34図)

2区中央西部付近で検出した。SK2001の北西で検出した。2区土層断面図①からは、旧耕作土層と考えられる層を掘り込み、SK2001の掘り込み面よりも上位層から掘り込む。南西部は調査区外へ延びる。不整形で、一方の軸が18m、他方が1.0m以上、深さ70cmである。1層下部から礫とともに遺物が多く出土した。遺物は多量の瓦のほか、レンガ、長方形の焼土塊、陶磁器類が出土した。レンガ、焼土片はSF2001に由来すると考えられる。

59～61は磁器。59は椀。外面には龍と牡丹の文様を交互に2個ずつ描く。高台内には「龍」の文字を描く。60は湯呑のような形状で、胎土が灰色味を帯びる。61は猪口。外面に青海波と鳥を描く。62は陶器燈明皿。内面から口縁端部外面まで施釉する。63は土師質土器甕。外面に、先端に刻み目がある工具で斜格子の文様を施す。口縁部外面と上端部は粘土を足して肥厚させる。肥溜め用か。64～66は瓦。64は軒平瓦。半截花菱の中心飾りを持つ。平瓦の先端に粘土を足して瓦当とする。瓦当を接合する平瓦の端面には、接合面を増すための刻み目が認められる。65は丸瓦。66は平瓦。

SF2001に由来すると考えられる遺物が多く出土することから、SF2001廃絶に伴う廃棄土坑である



第35図 2区 SK2005 平・断面図、出土遺物

可能性がある。同様に、後述する2区SF2001の廃絶に伴うと考えられるSK2006の時期が、統制陶磁器の出土により昭和16（1941）年以降と考えられることから、2区SK2003も同時期と考えられる。

2区 SK2005（第35図）

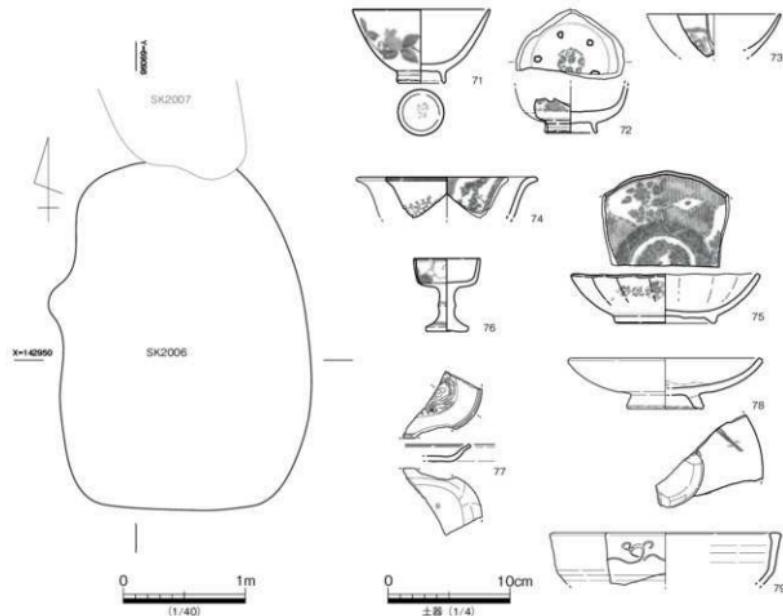
2区中央付近で検出した。遺構の重複関係によりSX2001、SK2019より新しい。円形に近い梢円形で長軸2.0m、短軸1.6mである。直径120cm程度と考えられる土師質土器甕を埋める。埋土中からは、埋められた甕の一部と考えられる土師質土器甕片や瓦等が出土した。

67は磁器椀。コバルトにより外面に花文を施す。見込みにハリ支え痕を残す。68は土師質土器焰烙。外面は型成形による。69は内外面ともハケで成形する。土管に似た形状で、砂糖甕の煙突の一部と考えられる。70は平瓦。

遺構の時期は、コバルトによる施文がある磁器や焰烙の製作技法から近代以降と考えられ、砂糖甕SF2001の煙突と考えられる土師質土器が出土していることから、昭和16(1941)年以降と考えられる。

2区 SK2006（第36図）

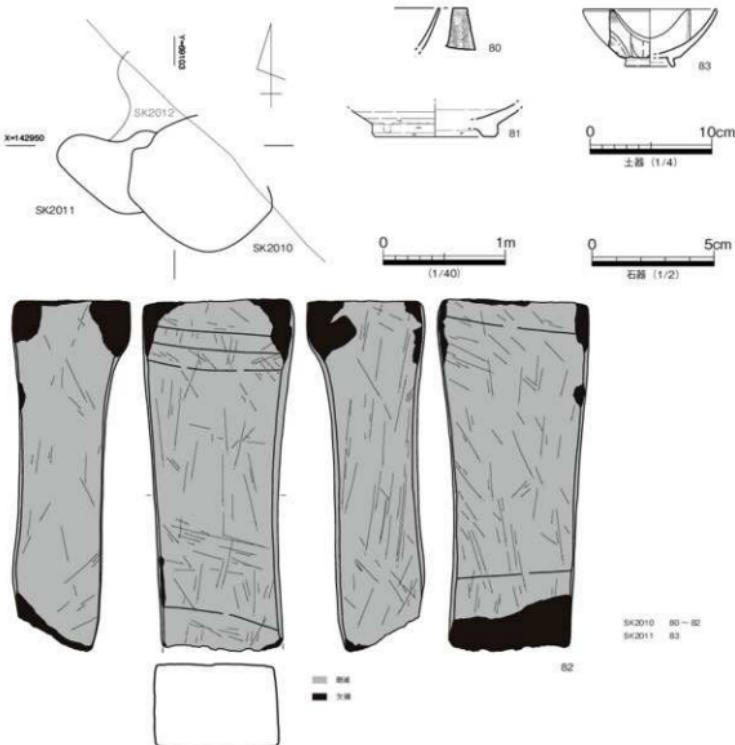
SK2005の北側約0.4mの位置で検出した。梢円形で、長軸2.8m、短軸2.0mである。遺構の南半部ではSK2005同様の土師質土器甕が埋められていた。埋土中からは陶器片のほか、平瓦、レンガ、焼土塊、ガラス、ビー玉、ストレート等が出土した。レンガ、焼土塊、平瓦等はSF2001に由来する可能性



第36図 2区SK2006 平・断面図、出土遺物

が考えられる。また、SK2001 出土 46 と同一個体または同一規格と考えられる、内面にススが付着した土師質土器甕が出土した。

71～76は磁器。71～74は椀。71は高台内に「岐38」の刻印がある。昭和16～20（1941～1945）年の間に岐阜で生産された統制陶磁器である。72はコバルトによる顔料で、型紙刷りにより施文する。見込みにハリ支え痕が4ヵ所に残り、6ヵ所程度あったと考えられる。73は外面に錢貨風の文様の中に「画學口命」と書かれる。椀の形態は71に似る。74は端反椀。被熱し、表面がただて断面が赤変する。75は鉢。体部は縱方向に緩く凹凸をつけ、輪花形態のように成形する型打成形による製品である。高台内は蛇の目四型高台で無軸である。型紙刷りにより施文する。外面は白地の部分に顔料が付着しており、仕上がりがよくない。76は仏飯器。赤・緑・金色の色絵により施文する。77～79は陶器。77は珉平焼小皿。楕円形の器形と考えられる。全体を黄色に施釉し、見込みには龍の文を印刻する。78は皿。高台内および見込みは無釉である。高台には残存部分で2ヵ所の切れ込みが認められ、残存部分から4ヵ所程度の切れ込みが施されたと考えられる。外面は濃茶色の描線で文様が施される。79は陶器鉢。うすい黄白色の釉で、外面には白い顔料で施文する。内外面とも底部は無釉である。



第37図 2区 SK2010・SK2011 平・断面図、出土遺物



第38図 2区 SK2013 平・断面図、出土遺物

遺構の時期は、統制陶磁器が出土したことから昭和16(1941)年以降である。出土遺物の中にレンガや焼土塊が含まれることから、SK2003と同じくSF2001の廃絶に伴う土坑である可能性もある。

2区 SK2010 (第37図)

2区北東壁付近で検出した。北東部の一部は調査区外へ延びる。遺構の重複関係により、SK2011より新しい。楕円形で長軸1.1m、短軸0.9m以上である。土坑内には直径1m程度の土師質土器甕が埋められていた。埋土中からは陶磁器片、土師質土器甕片、瓦片、ガラス片、硯、鉄片等が多量に出土した。

80は磁器碗。外面には薄い染付で同心円の文様を縱に並べ、その後、通常の濃さの染付で縱方向の波状文を描く。小破片。

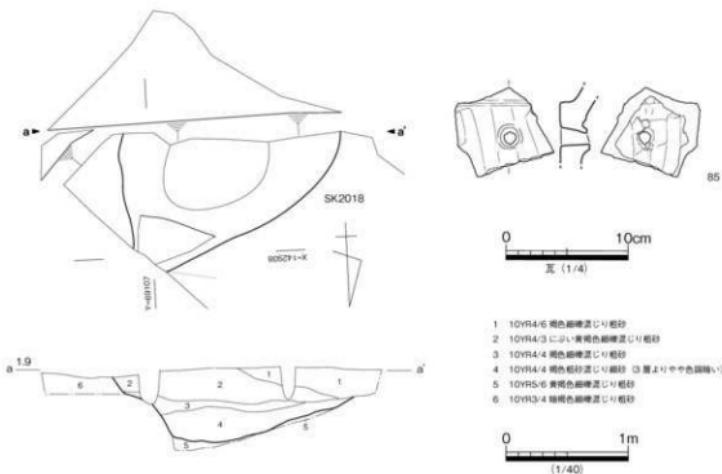
81は陶器鉢。底部外面は無釉。82は砥石。4面に使用痕がある。

遺構の時期は、ガラス片が出土したことから近代以降と考えられる。

2区 SK2011 (第37図)

2区北東壁付近で検出した。遺構の重複関係により、SK2010より古い。不整形を呈し、長軸1m程度、短軸0.6m程度と考えられる。埋土中からは磁器片、瓦片が出土した。

83は磁器碗。外面は連弁状に縦方向に面を持たせる。型打成



第39図 2区 SK2018 平・断面図、出土遺物

形によるものである。口縁部外面には染付を施す。

遺構の時期は、出土遺物により近代以降と考えられる。

2区 SK2013（第38図）

2区東部中央付近で検出した。北東部の一部は調査区外へ延びる。

円形に近い楕円形で、長軸1.4m、短軸1.2m程度、深さは47cmである。

埋土からは弥生土器小片、多量の瓦の小片、土器小片が出土した。

84は弥生土器甕。小片。弥生時代後期前半。やや摩滅する。

遺構の時期は、近世以降と考えられる瓦が多量に出土していることから、近世以降である。

2区 SK2018（第39図）

2区南端付近で検出した。北東・南西側とも調査区外へ延びる。

楕円形を呈し、北側が高い段掘状を呈する。長軸1.5m以上、短軸

1.5m、深さは南側が60cm、北側は1cmでほとんど掘り込みはない。

埋土中からは丸瓦片、土器小片が出土した。

85は丸瓦。玉縁部分がわずかに残る。

遺構の時期は出土した丸瓦から近世以降と考えられる。

2区 SK2021（第40図）

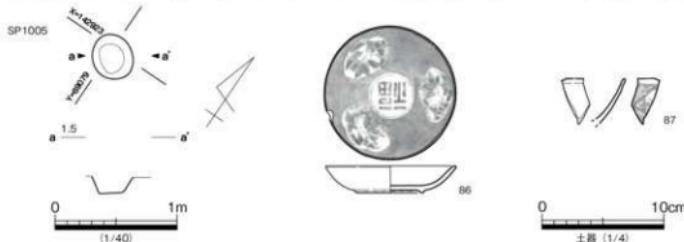
2区北端付近で検出した。西側は調査区外へ延びる。隅丸方形と考えられ、南東部は一段高い段掘り状を呈する。一方の軸は1.5m、もう一方は1.1m以上、深さ22cmで、南東部分は深さ14cmである。埋土の大半は細礫混黒褐色粘質シルトで占められる。埋土中からは摩滅の進んだ土器の小破片、タイル片が出土した。

遺構の時期は、タイル片等が出土したことから近代以降と考えられる。

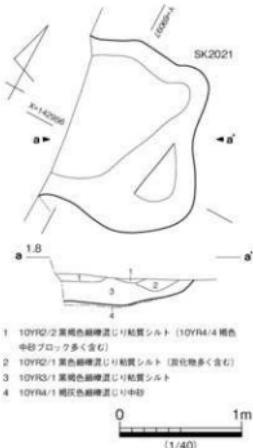
③ピット

1区 SP1005（第41図）

1区中央付近、SK1019に接して検出した。SK1019との前後関係は認められない。円形で、直径38cm、



第41図 1区 SP1005 平・断面図、出土遺物



第40図 2区 SK2021
平・断面図

深さ14cmである。埋土中からは完形の磁器皿のほか、磁器小片が出土した。

86・87は磁器。86は皿。体部内面3ヶ所に同じ文様を見込みに「福」の字を、赤・緑を使用した色絵により描く。文様部分以外は青の顔料を塗る。87は椀小片。四角の窓の内部に樹木状の文様を描き、他の部分は細かい渦巻文を描く。

遺構の時期は、出土遺物により近代以降と考えられる。

2区 SP2002 (第42図)

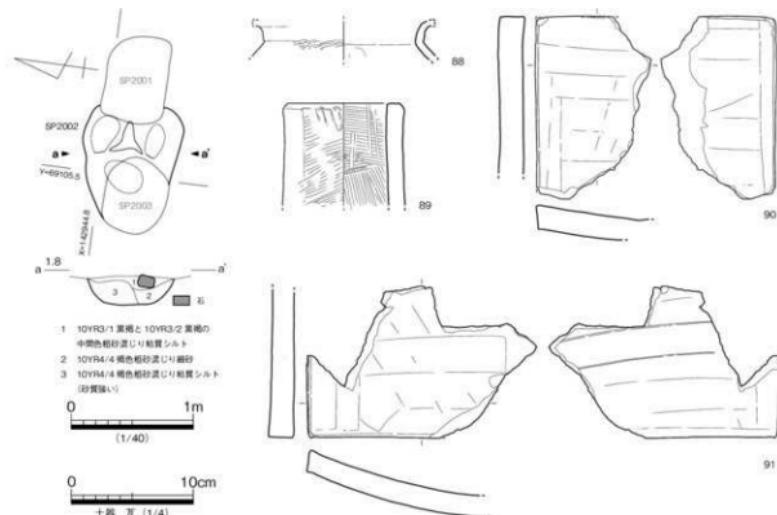
2区東南部で検出した。3基のピットが重なった状態で検出したなかで最も古いピットである。不整形で3ヶ所に深い部分を持つ。長軸110cm程度、短軸78cm、深さは西側の深い部分が最も深く31cm、北東側が15cm、南東側が21cmで、1段高い部分が11cmである。埋土中からは弥生土器片、磁器片、瓦片等が出土した。

88は弥生土器壺。口縁端部はわずかに欠損する。ほとんど摩滅しない。弥生時代後期前半。89は土師質土器で、土管に似た形状である。内外面ともハケで調整する。砂糖甌の煙突の一部と考えられる。90・91は平瓦。

遺構の時期は、出土遺物により近代以降と考えられる。砂糖甌の煙突が2区 SF2001 に由来するものと仮定すれば、昭和16(1941)年以降と考えられる。

2区 SP2008 (第44図)

2区南部で検出した。ほぼ円形で、直径78cm程度、断面は段掘り状を呈し、深さは深い部分が54cm、その他は33cmである。埋土中からは瓦片、焼土片が出土した。焼土片は甌材と考えられ、SF2001 に由



第42図 2区 SP2002 平・断面図、出土遺物

来する可能性があろう。

遺構の時期は、SF2001 以降と考えられ、昭和 16（1941）年以降と考えられる。

2 区 SP2013（第 43 図）

2 区中央付近やや東寄りで検出した。楕円形を呈し、長軸 80cm、短軸 68cm、深さ 30cm である。埋土中からは陶磁器片、瓦片が出土した。

92 は磁器椀。内面にハリ支え痕が 1 カ所に残る。93 は陶器徳利。内外面とも茶色の鉄釉を掛ける。胴部を窪ませる。94 は土師質土器植木鉢。器壁は薄く、底部中央付近に直径 2cm 程度の穿孔を施す。

遺構の時期は、出土遺物により近世以降である。

2 区 SP2014（第 44 図）

2 区中央やや東寄りで検出した。隅丸方形を呈し、1 辺 66cm～72cm、深さ 13cm である。埋土中からは弥生土器小片が出土した。

埋土中からは近世以降に下る遺物は出土しなかったが、近世以降の遺構である SP2019、SP2021 との埋土の類似性から、近世以降の可能性が高い。

2 区 SP2016（第 44 図）

2 区中央付近、SP2014 の約 1m 北西で検出した。ほぼ円形で、直径 56～60cm、深さ 8cm である。埋土中からは出土遺物はなかった。

遺構の時期は、近世以降の遺構である SP2019 と埋土が同じであることから、近世以降と考えられる。

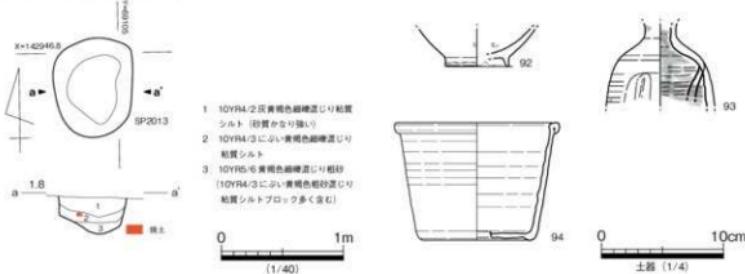
2 区 SP2018（第 44 図）

2 区中央付近で検出した。長楕円形で、長軸 56cm、短軸 29cm、深さ 8cm である。埋土中からは出土遺物はなかった。

遺構の時期は、近世以降の遺構である SP2020 と埋土が類似することから近世以降と考えられる。

2 区 SP2019（第 44 図）

2 区中央付近で検出した。SX2001 を掘り込む。不整円形で、直径 39～42cm、深さ 6cm である。埋土中からは瓦片が出土した。



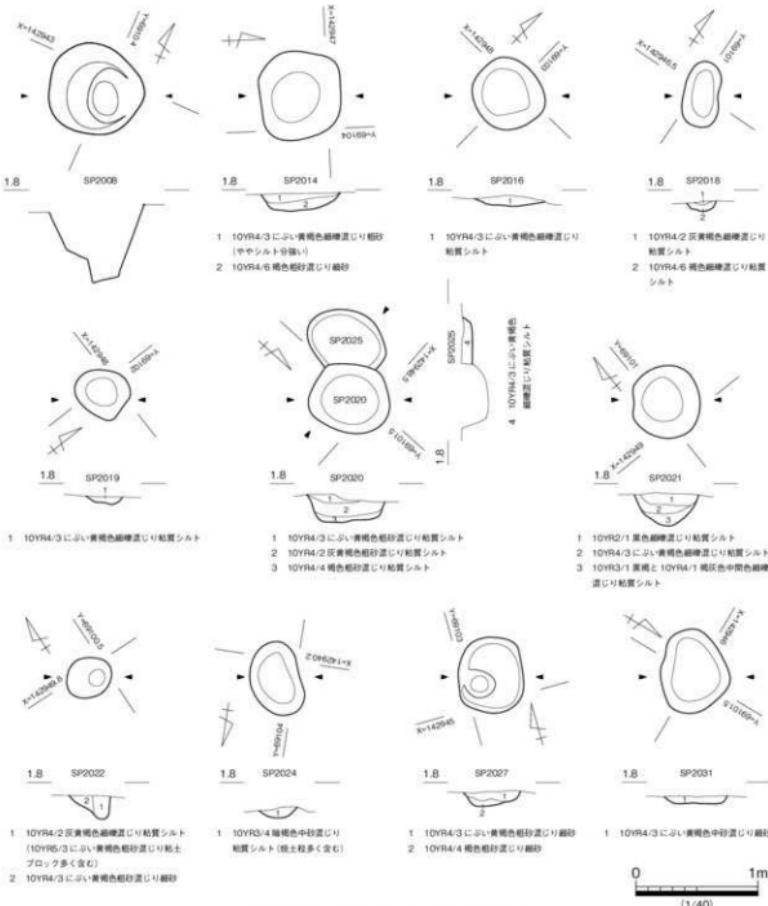
第 43 図 2 区 SP2013 平・断面図、出土遺物

遺構の時期は SX2001 より新しいことから、近世以降である。

2区 SP2020（第44図）

2区中央付近で検出した。SX2001, SP2025 を掘り込む。不整円形で直径 56 ~ 67cm、深さ 22cm である。埋土中からは瓦片、土器小片が出土した。

遺構の時期は SX2001 より新しいことから、近世以降である。



第44図 2区ピット 平・断面図

2区 SP2021 (第44図)

2区中央付近で検出した。SX2001を掘り込む。ほぼ円形で直径58cm、深さ26cmである。埋土中からは陶磁器片、瓦片が出土した。

遺構の時期は、出土遺物やSX2001より新しいことから、近世以降である。

2区 SP2022 (第44図)

2区中央付近で検出した。SX2001を掘り込む。楕円形で、長軸40cm、短軸33cm、深さ18cmである。埋土中からは陶磁器片が出土した。

遺構の時期は、出土遺物やSX2001より新しいことから、近世以降である。

2区 SP2024 (第44図)

2区南部、SF2001の西側付近で検出した。楕円形で長軸60cm、短軸40cm、深さ8cmである。埋土中には焼土粒、焼土塊を多く含み、2区SF2001に関係する遺構と考えられる。

遺構の時期はSF2001以降と考えられ、昭和16(1941)年以降と考えられる。

2区 SP2025 (第44図)

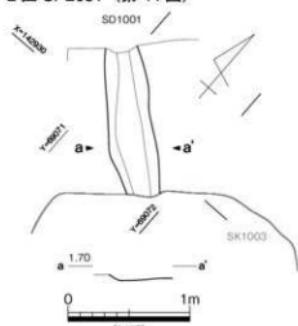
2区中央付近で検出した。SX2001を掘り込みSP2020に掘り込まれる。不整円形で長径67cm、短径54cm、深さ10cmである。埋土中からは土器小片が出土した。

遺構の時期は、SX2001より新しいことから、近世以降である。

2区 SP2027 (第44図)

2区中央やや南東寄りで検出した。隅丸方形で長軸61cm、短軸54cm、深さ12cmである。埋土中からは近世以降の瓦片、弥生土器小片が出土した。

出土遺物により、遺構の時期は近世以降である。

2区 SP2031 (第44図)

第45図 1区 SD1001 平・断面図

2区中央付近で検出した。不整円形で、長軸69cm、短軸58cm、深さ6cmである。埋土中からは出土遺物はなかった。

遺物は出土しなかったが、SP2027と埋土が類似することから、遺構の時期は近世以降と考えられる。

④溝**1区 SD1001 (第45図)**

1区北西端付近で検出した。遺構の前後関係により、SK1002より新しくSK1003より古い。幅38cm、深さ5cm、検出長は1.2mである。埋土中からは土器小片のほかスレート片、ガラス片が出土した。

遺構の時期は近代以降である。

⑤性格不明遺構

2区 SX2001（第46図）

2区中央付近で検出した。不定形の遺構で、南側と西側に溝状の掘り込みがある。SK2005・SK2006の間で検出した溝状の掘り込みも同一遺構の可能性が考えられる。遺構の重複関係により、SK2005・SK2006・SP2019～SP2022・SP2025より古く、SK2019より新しい。遺構の規模は溝状部分以外の長軸は3.4m程度、短軸1.8m、深さ46cmで、溝状部分の幅は20～50cm、深さは概ね12cm程度である。埋土中からは摩滅の進んだ弥生土器小片、須恵器片、瓦片が出土した。

95は須恵器杯蓋。

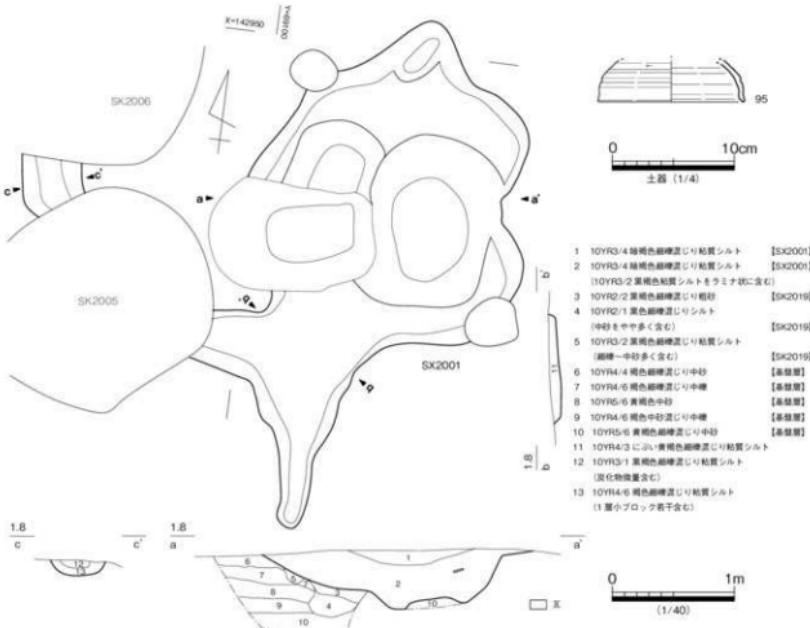
遺構の時期は、瓦片が出土していることから近世以降と考えられる。

3. 時期不明の遺構

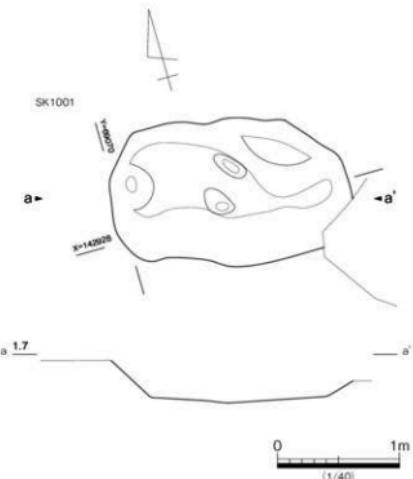
1区 SK1001（第47図）

1区北西部で検出した土坑である。楕円形で長軸2.0m、短軸1.2m、深さ32cmである。SK1002を切り込み、SK1003との前後関係は明らかではない。

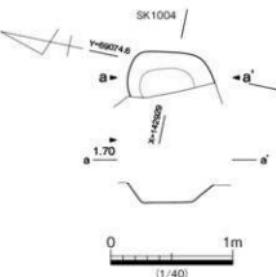
遺構の時期はSK1002より新しく、弥生時代後期であること以外は不明である。



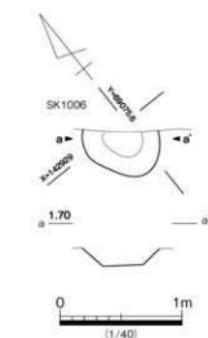
第46図 2区 SX2001 平・断面図、出土遺物



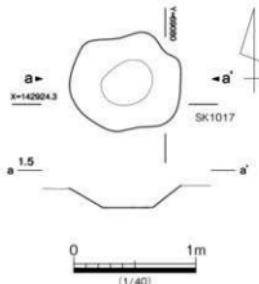
第47図 1区 SK1001 平・断面図



第48図 1区 SK1004 平・断面図



第49図 1区 SK1006 平・断面図



第50図 1区 SK1017 平・断面図

1区 SK1004（第48図）

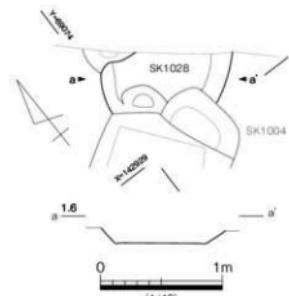
試掘トレーンチ5東側で検出した。隅丸方形で、1辺0.7m程度、深さは14cmである。埋土中からは土器の小片が出土しただけであった。

遺構の時期は不明である。

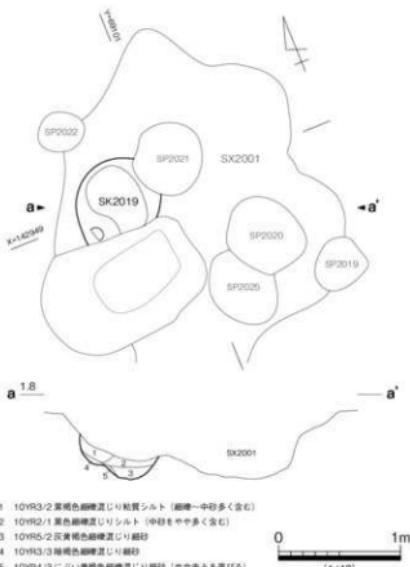
1区 SK1006（第49図）

1区北西部、SK1004の約0.3m南東側で検出した。北東半部は調査区外へ延びる。不整円形で、直径0.7m程度、深さ12cmである。埋土中からは判別のつかない土器片が出土した。

遺構の時期は不明である。



第51図 1区SK1028 平・断面図



第53図 2区SK2019 平・断面図

1 10YR3/2 黒褐色細緻じり粘質シルト (細緻～中緻多く含む)
2 10YR2/1 黒色細緻じり粘質シルト (砂粒をやや多く含む)
3 10YR5/2灰黒褐色細緻じり粘質
4 10YR3/3暗褐色細緻じり粘質
5 10YR4/3に近い黄褐色細緻じり粘質 (やや赤みを帯びる)

第52図 2区SK2009 平・断面図

1区SK1017（第50図）

1区中央部付近で検出した。円形に近い椭円形で、長軸0.9m、短軸0.8m、深さ16cmである。埋土中からは出土遺物はなかった。

遺構の時期は不明である。

1区SK1028（第51図）

1区北東部で検出した。北東側は調査区外へ延び、南西側は試掘トレンチにより消失する。遺構の重複関係により、SK1004より古い。形状は不明であるが、長軸1.0m、短軸0.5m以上、深さは14cmである。埋土中からは土器の小片が出土しただけであった。

遺構の時期は不明である。

2区SK2009（第52図）

2区北寄りで検出した。椭円形で長軸1.1m、短軸0.7m、深さ11cmである。埋土中からは出土遺物はなかった。

遺構の時期は不明である。

2区 SK2019（第53図）

2区中央付近で検出した。SX2001の掘削後に検出した。南側は試掘トレンチにより消失する。楕円形と考えられ、長軸0.8m、短軸0.7m、深さ55cmである。埋土中からは出土遺物はなかった。

遺構の時期は、遺構の前後関係によりSX2001より古いこと以外は不明である。

4. 遺構外の出土の遺物（第54・55図）

96～100は1区上面精査中に出土した遺物である。96は弥生土器壺底部。摩滅は少ない。遺構内から出土している弥生土器と同様、弥生時代後期前半頃。97は土師質土器足釜脚部。98は陶器鉢。内外面ともに鉄軸を施す。口縁端部の平らな面は軸の掛けりがやや少ない。99・100は石鎚。いずれも凹基式でサヌカイト製。全体に摩滅を受ける。

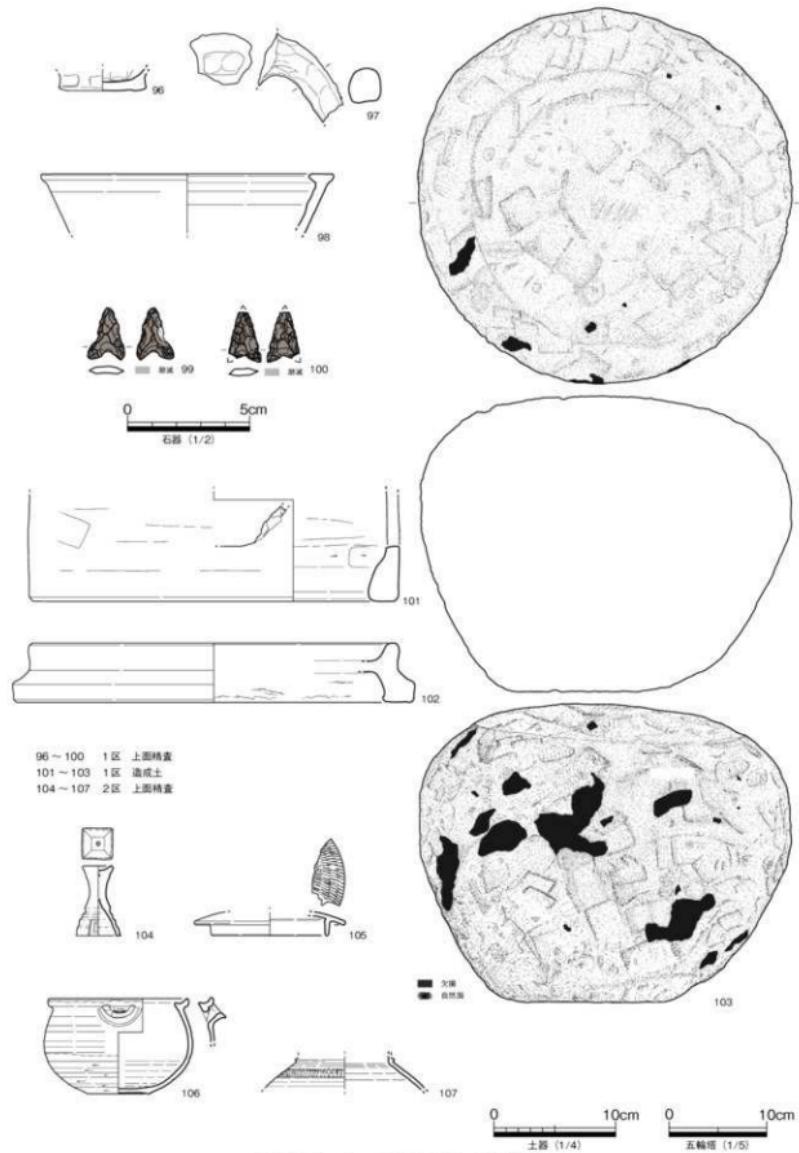
101～103は1区造成土から出土した。101・102は土師質土器。101は甌。外面はヘラ磨きで平滑に仕上げ、体部下部に窓が1ヶ所残る。底部および底部付近の内外面に煤が付着する。102は五徳か。底部及び脚部内側に煤が付着する。103は五輪塔の一部。水輪部分。凝灰岩製。

104～111は2区上面精査中に出土した遺物である。104は磁器燭台。方形で上面に蠟燭を立てる芯を挿入する穴がある。105～107は陶器。105は蓋。土瓶・片口等の蓋と考えられる。外面に黄土色の釉を掛け、内面は無釉である。106は片口。内面および外面体部上半部に施釉する。107は土瓶。口縁端部がわずかに欠損する。赤褐色の胎土で外面に透明の釉を掛け内面は無釉である。体部外面上部付近に刻み目を巡らせる。108・109は土師質土器。筒状の形状で、いずれも内外面ともハケで調整する。109は69・89と同様の大きさ・形状で砂糖甌の煙突での一部と考えられる。108は器種は不明である。110は軒丸瓦。瓦当裏面の丸瓦接合部には瓦当と丸瓦の接着面が広くなるように縦方向の刻み目を施す。111は石鎚。平基式でサヌカイト製である。

112～115は2区土層断面図②の造成土下部から基盤層までの間の層で出土した遺物である。112・113は磁器。112は筒形の小椀。体部外面に2条1組の縦方向の沈線と縦方向の面が残り、外面には青磁のような薄い緑色の釉を掛ける。型打成形によると考えられる。113は一輪挿し。外面に染付でタコ唐草の文様を施す。114は陶器壺。全面に濃茶色の鉄釉を施す。115は土師質土器。七輪のさな。3ヶ所の穿孔が残る。116はSX2001部分を掘削した試掘トレンチから出土した遺物。磁器皿。内面には銅板転写により赤茶色の顔料でコウロギや蝶等の昆虫を描く。SX2001から出土した可能性もある。117～121は2区機械掘削中に出土した遺物である。117は弥生土器壺口縁部小片。SK1002出土遺物と同様、弥生時代後期前半頃と考えられる。118は磁器椀。コバルトによる型紙刷りにより施文する。119は陶器。陶胎染付椀。外面は体部下端部付近まで施釉し、底部は施釉しない。器形をやや歪めている。120は擂鉢。内面には濃茶色の鉄釉を掛ける。外面は残存範囲では施釉していないが、釉が一部付着しており、上部は施釉していた可能性がある。焼成・胎土はよくない。121は土師質土器焰熔。外面は型成形による。

122～125は2区北東部（歩道橋脇）から出土した遺物である。122～124は上面精査中に出土した。122は弥生土器壺。123は弥生土器底部。124は磁器鉢。125は機械掘削で出土した遺物である。陶器壺。内外面とも濃茶色の鉄釉を掛ける。

126は3区包含層から出土した。土師質土器杯。ほとんど摩滅しない。13～14世紀頃と考えられる。



第54図 1・2区包含層 出土遺物



第55図 2・3区包含層 出土遺物

第4章 まとめ

第1節 遺構の変遷

1 弥生時代後期

1区でSK1002を検出したのみであった。しかし、1区、2区で近世・近代以降の遺構から、小破片であるが摩滅の少ない土器が出土しており、近世・近代の遺構に壊された弥生時代の遺構が存在した可能性がある。

2 古墳時代～中世

遺構は確認できなかった。遺物は、わずかではあるが近世・近代の遺構群や包含層で出土しているので、当該期の遺構が存在していた、または近在する可能性があろう。

3 近世以降

近世・近代以降の遺物が出土する土坑が多数出土した。近世以降とした遺構も近代に下る可能性がある。遺構群の上部には厚い造成土や廃棄物の層があり、ある時期に大きな土地改変が行われたことがわかる。土地利用の改変に伴い、穴を掘って不要なものを埋め立て、その後さまざまな廃棄物を含めた造成土を盛り、現代の土地利用としたのであろう。遺構の埋土中からは昭和16（1941）～20（1945）年に製造された統制陶磁器が2点出土したことから、土地改変の時期は太平洋戦争後と考えられる。昭和26（1951）年に、国道11号のうち津田川から津田町琴林地区で改修工事が行われている（註1）。土地改変の契機はこの時である可能性もある。

2区SF2001からは明確な時期を示す遺物は出土しなかったが、2区SK2003、2区SK2005、2区SK2006、2区SP2002、2区SP2008からは、2区SF2001の一部と考えられるレンガや焼土塊、煙突の一部、2区SF2001の釜屋で使用された可能性のある平瓦等が出土し、2区SF2001の撤去時の廃棄物の投棄に使用されたと考えられる。また、2区SK2006からは昭和16（1941）～20（1945）年に生産された統制陶磁器が出土している。2区SF2001はその頃に壊されたものである可能性が考えられる。砂糖甕の形状は、後述するように古くから使われる形状であり、遺構の壊れた時期と操業停止の時期が異なる可能性もある。一方、旧津田町内では昭和20年代前半までは数10軒の砂糖甕が操業していたとの聞き取り事例がある（註2）。神野遺跡で検出した砂糖甕もそのようなものの1例である可能性もある。

	レンガ	焼土塊	直方体の粘土塊	煙突	平瓦	統制陶磁器	その他の遺物
SF2001	○	多い	○		多い		陶胎塗付片
SK1011				○			
SK1012							
SK2003	○		○		多い		磁器焼 土胚質土器裏
SK2005				○			磁器焼 土胚質土器焰培
SK2006	○	○			○	○	陶磁器 ガラス ビーカー
SP2002					○	○	磁器片
SP2008		○					

第3表 砂糖甕関連遺物等出土土坑

第2節 砂糖竈について

1 製糖の工程

日本の砂糖製造の歴史は18世紀前半、8代将軍徳川吉宗の時代に始まる。香川県では、5代高松藩主松平頼恭の命を受け、池田玄丈らが砂糖製造に取り組み、寛政2(1790)年、大内郡湊（現東かがわ市湊）の医師向山周慶が精製糖の製造に成功した。

製糖の工程には ①甘蔗を栽培・収穫する工程 ②甘藷の皮をむき、圧搾して汁を絞る工程 ③絞った汁を煮詰める工程（非精製糖である白下糖を製造する工程） ④白下糖から蜜を分離させて精製糖を製造する工程 がある。このうち、①～③は「縮小屋」、④は「絞屋」が行う。砂糖竈は、③の工程で必要なものである。

享和元（1800）年、播州二見の小山氏が白鳥の亀屋新吉から聞き書きしたもので、当時の讃岐の砂糖の製法について詳しく記述された貴重な資料である「砂糖製法聞書」「砂糖の製法扣」によれば、煎ごう工程は、6斗入りの大釜に搾汁と石灰を加え、とろ火で煮詰め、灰汁が出ればこれを除去する。その後、澄し桶に移し、ミョウバンの粉を振り入れて糖液中の不純物を桶底に沈殿させる。これを再び鍋に入れて加熱し、煮詰める。「砂糖製法聞書」「砂糖の製法扣」では大釜の数について記述はない。しかし、讃岐の糖業の発展について記された「讃岐砂糖沿革盛衰記」（明治18年 四国連合共進会事務所の算紙に毛筆書き）（註3）によれば、「文化三年（一八〇六）それまでは煮沸には釜一個を用いていたのを、向山周慶が荒釜と揚釜の二種類の釜を用途に応じて使い分けることし（註4）たとされる。灰汁をとる工程に使用する釜は「荒釜」、煮詰める工程に使用する釜は「揚釜」と呼ばれる。

煮詰めた糖は「冷やしガメ」と呼ばれる素焼き甕へ入れ、結晶化させる。

2 香川県の発掘調査での砂糖竈の調査例（第56～61図）

砂糖竈は、神野遺跡で検出したSF2001のはか、四国横断自動車道建設に伴う発掘調査で、原間遺跡（東かがわ市川東原間）（6例）、三殿出口遺跡（東かがわ市三殿）（3例）、金毘羅山遺跡（東かがわ市水主下屋敷）（1例）で検出している。内容の概要は第4～6表のとおりである。

なお記述中では、「竈」は砂糖竈全体ではなく、大釜を設置する部分とその下部の薪を燃焼させる部分を合わせた部分を指すことし、「竈上部」は大釜を設置する部分、「竈下部」は薪を燃焼させる場所を指すこととする。

3 検出した砂糖竈の構造

砂糖竈には、薪を投入する焚口、竈上部（大釜を設置する部分）、竈下部（薪を燃焼させる部分）、作業場、煙出し（煙突）がある。

県内の発掘調査で検出した砂糖竈は、竈を1基備えるもの（原間遺跡 SF II 02・SF II 06）と竈を2基備えるもの（その他）があり、竈を2基備えるものが圧倒的に多い。

2基の竈を備える場合、検出時の平面形状には ①2つの円が連なる形状の場合、②長方形または長楕円形の溝状を呈する形状の場合がある。

竈の規模は、平面形状が2つの円が連なる形状の場合は概ね直径90cm程度、長方形または長楕円の溝状を呈する場合は長さ70～90cm程度、幅20～25cm程度である。大釜の大きさが直径90cm弱程度と

遺跡名	所在地	遺構名	大塗の数	塗の発見時の 形状(※1)	塗出面の露 出し部の高さ、 下部の幅(※2) (cm)	塗出面の露 出し部の底版構 造(柱等の有無) (cm)	塗出面の露 出し部の底版構 造(柱等の有無) (cm)	塗の高さ と長さ (cm)	漆付粘土 の厚さ (mm)	漆付粘土 の面積 (mm)	漆付粘土 の面積 (mm)	生麦塗 焼き×幅 (mm)	その他の 記述		
坂内通跡	東かがわ市 (日金内町) SF II 01	作業場	2	貼付粘土に漆を塗 付けて露出する部 分を柱等で支えて ある。柱等は柱等と 柱等の間に漆が塗られ て柱等が柱等に接続す る。柱等の間に漆が塗 付けて柱等が柱等に接 続して柱等を支持す ることで構成される。	166 ①37cm ②26cm 平均約94cm 16cm 約24cm	100 ①70×56 ②44×56	100 ①34/54 ②32/52	98	薄く板が堆積 する。付口付面も堆 積する。付口付面は均 等の厚さである。柱等 の間隔は柱等と柱等の 間に設けられる。	漆口部は堆積 する。付口付面は均 等の厚さである。柱等 の間隔は柱等と柱等の 間に設けられる。	漆口部は堆積 する。付口付面は均 等の厚さである。柱等 の間隔は柱等と柱等の 間に設けられる。	54 106 106 106	106 106 106 106	106 106 106 106	106 106 106 106
坂内通跡	東かがわ市 (日金内町) SF II 02	作業場	1	円形	長方形の露部は側 方から見られない。	漆ののみ	漆ののみ	70×68	—	33	—	漆の厚さ 10mm 付口付面は均等 である。	漆の厚さ 10mm 付口付面は均等 である。	漆の厚さ 10mm 付口付面は均等 である。	漆の厚さ 10mm 付口付面は均等 である。
坂内通跡	東かがわ市 (日金内町) SF II 03	作業場	2	作業場に対して 柱等で支えられてい る。柱等の間に漆が塗 付けて柱等が柱等に接 続して柱等を支持す ることで構成される。	なし ①160 ②155 全体の幅 165～185 の範囲で浅 く落ち込む	100 ①84×18 ②58×30 () 内は現存範囲	100 ①10 ②18	100	漆部分は厚さ 5mm程度で漆を貼 る。漆の厚さ 5mm程度で漆を貼 る。	漆部分は厚さ 5mm程度で漆を貼 る。漆の厚さ 5mm程度で漆を貼 る。	漆部分は厚さ 5mm程度で漆を貼 る。漆の厚さ 5mm程度で漆を貼 る。	漆の厚さ 5mm程度で 漆を貼る。	漆の厚さ 5mm程度で 漆を貼る。	漆の厚さ 5mm程度で 漆を貼る。	漆の厚さ 5mm程度で 漆を貼る。
坂内通跡	東かがわ市 (日金内町) SF II 04	作業場	2	柱等の間に漆が塗 付けて柱等が柱等に接 続して柱等を支持す ることで構成される。	なし ①120 ②134 木室間と 11.1間と 134×60	漆の厚さ 64 56 64 56 () 壁は内側の 外側で計測	120 ①120 ②134 木室間と 11.1間と 134×60	106 106 106 106	漆口部は堆積 する。付口付面は均 等の厚さである。	漆口部は堆積 する。付口付面は均 等の厚さである。	漆口部は堆積 する。付口付面は均 等の厚さである。	漆口部は堆積 する。付口付面は均 等の厚さである。	漆口部は堆積 する。付口付面は均 等の厚さである。	漆口部は堆積 する。付口付面は均 等の厚さである。	

第4表 番川県内の砂礫窯の調査例(1)

遺跡名	所在地	遺跡名	大金の枚数	壺の検出時の 蓋と底(各2)	壺の形と 高さ(各3) (長軸×幅 (cm))	検出場面の壺 の内側に貼付 した下部構の底 部の底部分 (内部で分 かれた 場合は 左側 全長 (cm))								
														その他
阪間通跡 東かがわ市 川東大内町) SF II 05				円形容 長方形容 長方形容	110×88 110×128 全體の 1/2 分	①長軸 ②長軸 ③長軸 底	90×80 90×128 底 全體の 1/2 分							
阪間通跡 東かがわ市 川東大内町) SF II 05	東かがわ市 川東大内町) SF II 01 に同じ			長方形容	120×100 100×90									
阪間通跡 東かがわ市 川東大内町) SF II 06	円形容			長方形容の裏 が残る。	120×100 100×90									
三輪通跡 東かがわ市 山入内町 二段	SF01	作業場	2	対して の底部分 の間に 施設が残る。		118 112 110 全體の 1/2 分	90×20 94×24 100 底 170							
三輪通跡 東かがわ市 山入内町 二段	SF02	作業場	2	対して の底部分 の間に 施設が残る。			120 110×24 110×26 全體の 1/2 分	8800 1200 1100 底 220	120 110×24 110×26 全體の 1/2 分	8800 1200 1100 底 220	120 110×24 110×26 全體の 1/2 分	8800 1200 1100 底 220	120 110×24 110×26 全體の 1/2 分	8800 1200 1100 底 220

第5表 香川県内の砂糖窯の調査例 (2)

想定すれば(註5)、竈1基に対して設置される大釜は1個である。竈の芯々距離は90～115cm程度で、この距離も大釜の大きさに合うものである。

平面形状が2つの円が連なる形状の場合、あらかじめ2基分を掘削したのち、竈の間の仕切りを粘土で構築し、底部に粘土を貼り付ける(原間遺跡SF II 01・SF II 05、金毘羅山遺跡SF01)。竈の内側側面には、底よりやや上の位置に粘土により段を作る。竈の底部は、概ね長さ70～90cm、幅22～25cm程度の長方形または楕円形の溝状に成形される。地表面から底部までの深さは50～70cmで、深く掘削される。検出された連結する2つの円形の遺構の外側が赤変しており、原間遺跡SF II 05、金毘羅山遺跡SF01では、2つの円形が連結する形状で円筒状に焼土が残る。

2条の長方形または長楕円形の溝状を呈する場合、2基の竈の間に基盤層が残る。規模は長軸・長辺70～90cm、幅20～25cm程度、深さ10～18cm程度である。石列を長辺側に設置する場合もある(原間遺跡SF II 04、三段出口遺跡SF02(右竈)・SF03、神野遺跡SF2001)。石列の内法の規模は長辺70～90cm程度、幅22～26cm程度で、石列の上面やその付近には被熱痕跡があり、石列の上面は熱にさらされていたと考えられる。

三段出口遺跡SF02は左竈には石列は残されないが、右竈には石列を残す。地表からの深さは25cm程度で、石列を作る場合に近いが、やや深めである。

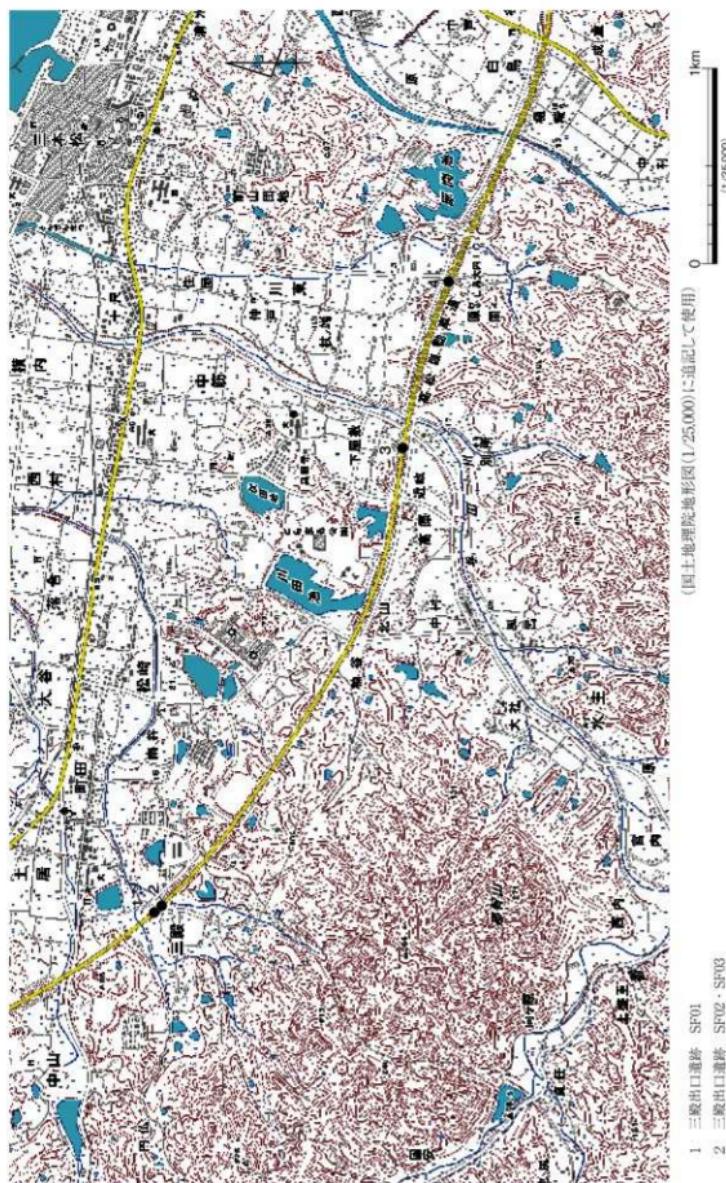
2つの円を連結させた平面形状を示す場合、平面形状が2条の溝状遺構を示す場合とも、地表面からの深さにより差はあるものの、底部に70～90cm×20cm程度の溝状遺構を検出することはほぼ共通した特徴である。砂糖竈の形態は異なるが、現在、屋島の四国民家博物館(四国村)に展示される、旧六車家砂糖釜屋(明治42年創建)の中の砂糖竈の焚口を見ると(第62図)、竈下部(燃焼させる部分)は2段の段状になっており、段の部分に板を置いて板の上に薪を載せてある。実際の作業では、空気の循環を促しつつ、灰を下部に落とせるように段の部分に金属製の棧等を設置し、薪を載せて燃焼させた。このことから、発掘調査で検出した段や石組みも、棧を截せ、薪を燃焼させるための場所であったと考えられる。

粘土により作り出される段や石列の深さは、地表面からの焚口の深さや地上にどれだけ構造物があるかの違いにつながるものである。前者は焚口は深く、地表面では竈上部に近い部分で検出していると考えられ、半地下のような構造が想定される一方、後者は焚口は地面に近い位置で、地表面では竈下部、を検出したと考えられ、大半の構造物は地上にあったと考えられる。

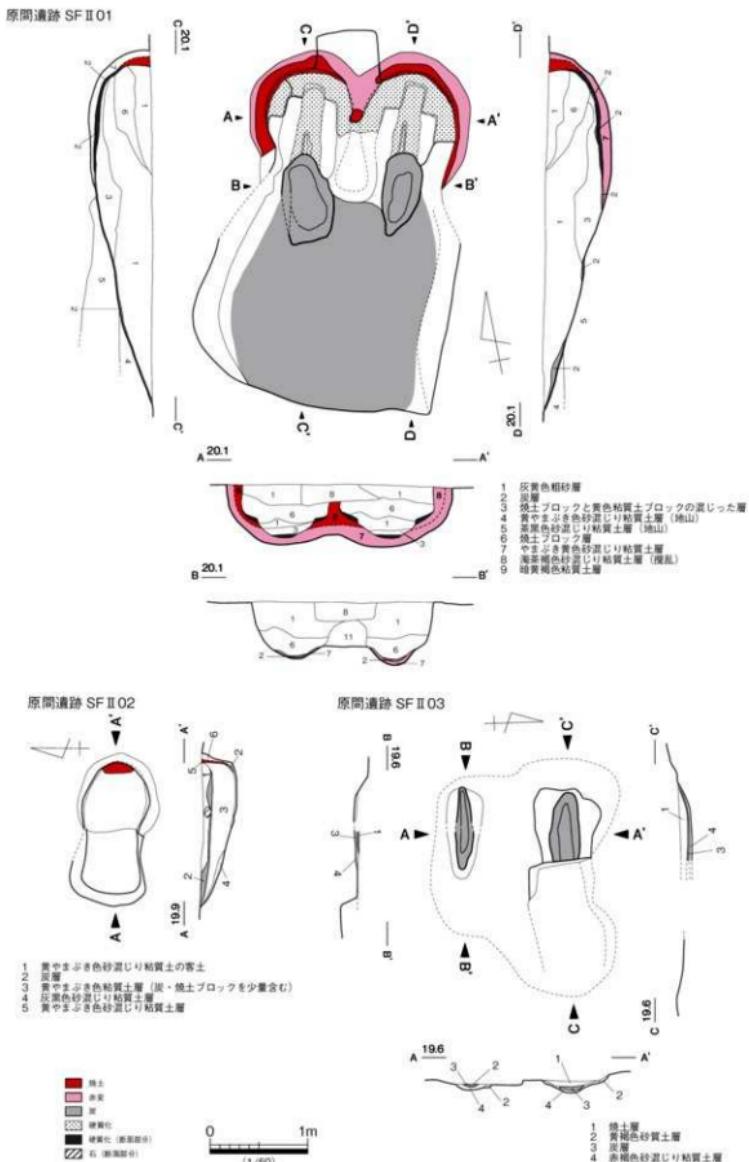
金毘羅山遺跡SF01、神野遺跡SF2001は作業場から見て左側の竈より右側の竈の方が大きい。竈に掛ける大釜には、先述の通り灰汁取りに使用された「荒釜」と煮詰める工程に使用された「揚釜」がある。「東讃産業史」では、竈の構造の異なる3連式の場合ではあるが、火力の強い焚口に近い釜を「揚釜」としている(註6)。火力の強い大きい方を揚釜、小さい方を荒釜として使用した可能性もあろう。

神野遺跡SF2001からはレンガが出土した。棧を設置する部分には石組みがあり、レンガは違う場所に使用されたと考えられる。大正年間の建築物で、現在も操業をしている三谷製糖の砂糖釜屋では、竈の側面と焚口の面に煉瓦を使用し、その内側は土を固めている。津田町で現在も操業を続ける山田製糖では焚口の面でレンガを使用している。神野遺跡の場合、レンガの出土量が少ないとから、竈の焚口の前面で使用された可能性が考えられよう。

三段出口遺跡SF01・SF02は焚口と竈の間に粘土により仕切りを構築する。仕切りを設ける例は、現在もさぬき市津田で操業を続ける山田製糖でも認められる。

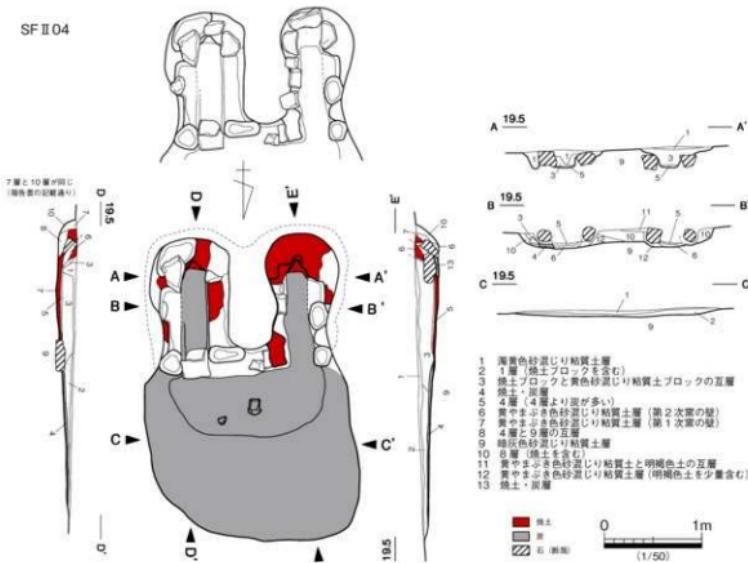


第56図 原間道路・三段出口道路・金毘羅山道路位置図



第 57 図 原間遺跡 SF II 01 ~ SF II 03 平・断面図 (報告書より再トレース)

SF II 04



第58図 原間遺跡 SF II 04 平・断面図（報告書より再トレース）

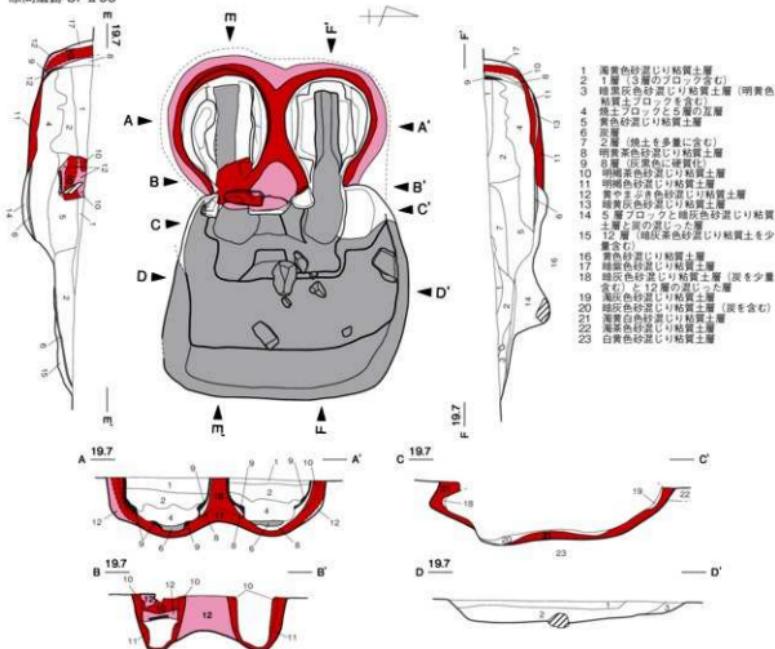
原間遺跡 SF II 02・SF II 06 は竈を 1 基しか設置せず、大釜 1 個だけを使用して砂糖を製造していたと考えられる。SF II 02 は基底部までの深さは焚口までは 32cm で、長方形の掘り込みを認めない。SF II 06 は焚口までの深さが 18cm、竈の内部に長方形の掘り込みがあり、石組みを設置した場合の形状に類似する。砂糖窯とは異なる用途がある可能性もあるが、前述のとおり、「讃岐砂糖沿革盛衰記」では、甘藷の搾汁のせんごうを 1 つの釜で行っていたものを文化 3 (1806) 年に荒釜・揚釜の 2 種類の釜を使うようになったとする。同時代の記録ではないが、参考になる資料と考えられる。

作業場は、いずれも焚口の前面で検出した。炭を焼き出すスペースと考えられ、炭化物が薄く堆積する。竈を 2 基備える場合は、形状は隅丸方形で、規模は、多少のばらつきはあるが、2 m × 2 m 程度である。地表面から焚口へ向けて傾斜するもので、焚口が深い場合は階段状に成形する。

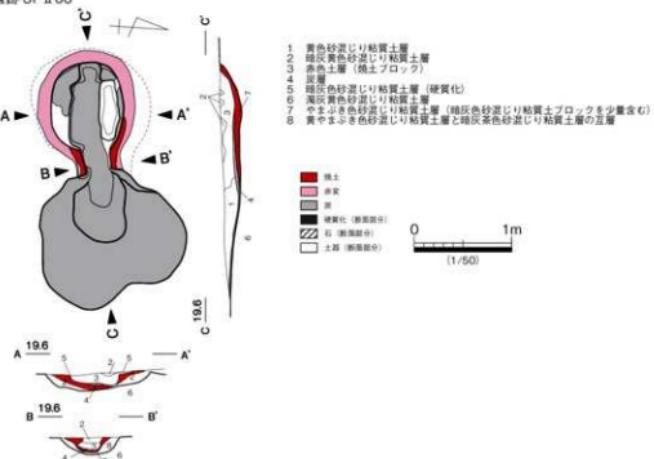
煙出しについては、地表面より上部は削平されるため明らかにならない場合が多いが、金毘羅山遺跡 SF 01 では、2 つの大釜設置部分からそれぞれ中心方向へ空洞を作り、1 か所に集めて排煙する装置を検出した。また、原間遺跡 SF II 04 では、竈の奥壁に傾斜があることから煙出しが想定されており、その場合は煙出しへはそれぞれの竈に付属していたことが想定される。現存する三谷製糖釜屋の例や、(財) 四国民家博物館 1987 「讃岐及び周辺地域の砂糖製造用具と砂糖しめ小屋・釜屋調査報告書」の実測図（第 62 図参照）から、煙突には、土管状の土師質土器を連結させていたことがわかる。

4 香川県で現在残る砂糖窯について

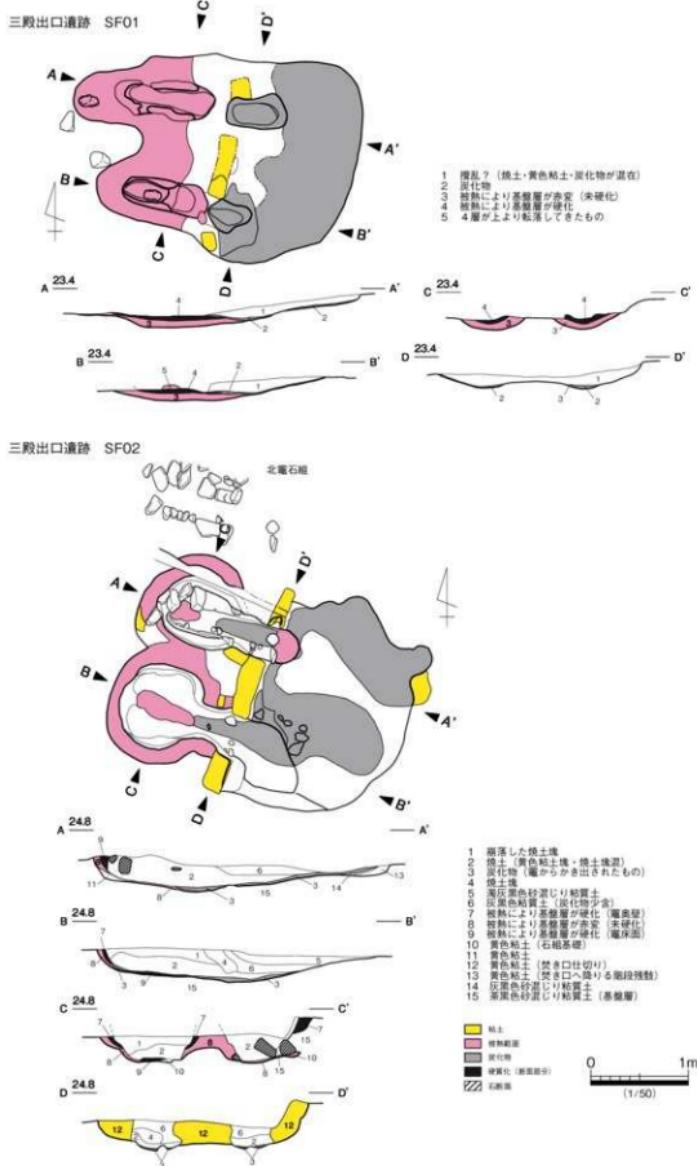
原間遺跡 SF II 05



原間遺跡 SF II 06

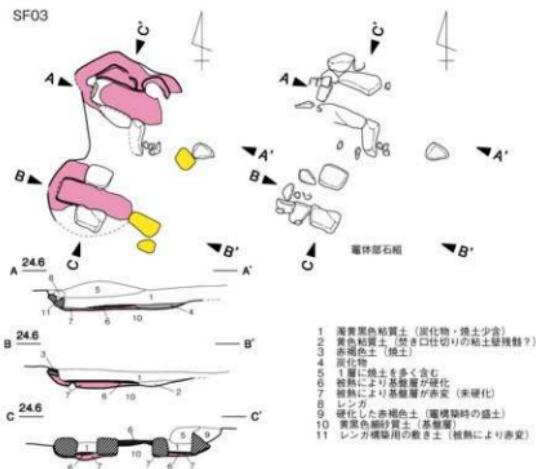


第59図 原間遺跡 SF II 05・SF II 06 平・断面図（報告書より再トレス）

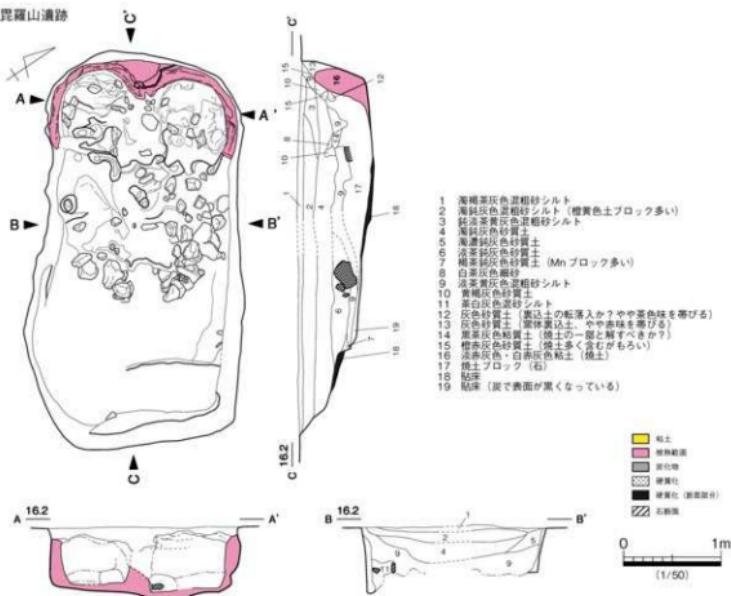


第 60 図 三殿出口遺跡 SF01・SF02 平・断面図 (報告書より再トレース)

三殿出口遺跡 SF03



金毘羅山遺跡



第61図 三殿出口遺跡 SF03・金毘羅山遺跡 SF01 平・断面図（報告書より再トレース）

現在、香川県に残される砂糖竈には、四国民家博物館に移築され、昭和58(1983)年に重要有形民俗文化財に指定された、旧六車家釜屋（明治42年に創建 東かがわ市湊）、平成14（2002）年に登録有形文化財に指定された、現在も和三盆の製造を行う三谷製糖羽根さぬき本舗砂糖釜屋（大正年間に築造 東かがわ市馬宿）、現在も白下糖を製造し、老舗和菓子メーカーへ卸している山田製糖（さぬき市津田）の例がある。いずれも焚口は一つで大釜を縦に3個連ねるもので、発掘調査で検出したものとは異なる形態の砂糖竈である。

四国民家博物館の砂糖竈は（註7）、焚口は地表から60cm程度深く、1つの焚口に対し、3連の大釜が設置される。最も手前の大釜のみ薪を燃焼させるスペースがある。竈の底部は奥側へ向かって上方に傾斜をつけて中央と奥の大釜へ火を回す構造で、少ない燃料で効率よく火を回す構造になっている。竈底部の傾斜を確保するために焚口は深い位置に設定される。

明治9年安原枝澄「讃糖便覧」には、2個の焚口に大釜を2個使用する砂糖竈が描かれ、発掘調査で検出した形状に類似する。また、昭和30年代頃に旧引田町内で撮影されたとされる釜屋の画像（註8）では、2か所の焚口が撮影されている。

上記の3例の3連式竈のうち、最も早いものは明治42年築造の四国民家博物館の例である。3連式の竈がいつ頃から出現し、また、従来の形態の竈はいつ頃まで残されていたのか、今後明らかにしたい課題である。

5 砂糖竈の釜屋及び出土遺物について

砂糖竈は釜屋に設置されていたと考えられる。しかし、検出した例では釜屋はいずれも検出できなかった。釜屋は内部で火を扱うため、火に強い土壁に瓦葺の構造をとるとされている（註9）。したがって、釜屋は礎石建物であったと考えられ、発掘調査では検出が難しい可能性がある。調査の際には、礎石の痕跡の有無等を慎重に確認し、竈に合わせて釜屋の構造を解明することも期待される。

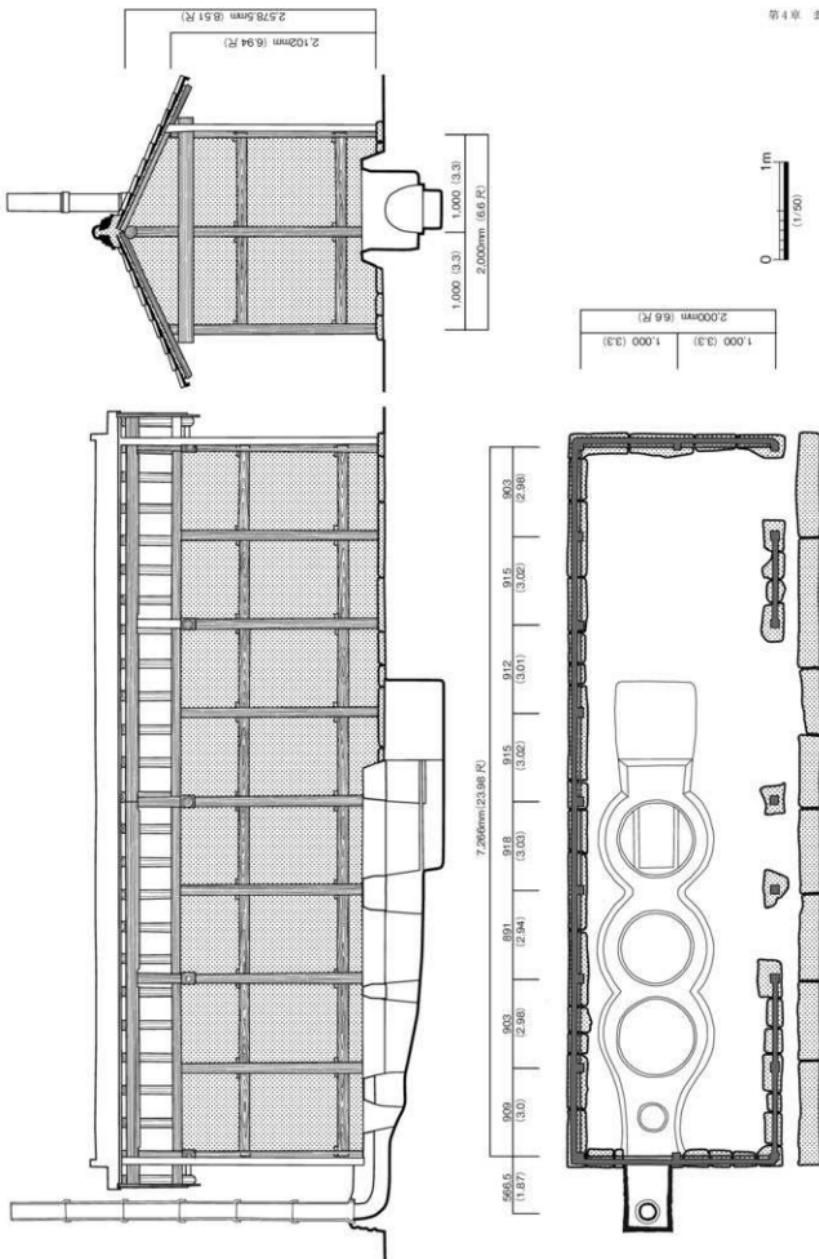
砂糖竈には共伴遺物が少ない。香川県内では砂糖竈の操業は古くても18世紀後半以降と考えられるが、昭和30年代頃まではある程度存続していたことは、聞き取り調査や写真資料等からも明らかである。その間には、異なる構造の砂糖竈が出現し、合わせて、従来の構造の砂糖竈も使用され続けたようである。18世紀後半以降昭和30年代頃までの時代ごとの変遷・傾向を知るためにも細かい時期の特定できることが期待される。また、大釜や冷やしガメ（煮詰めた汁を投入して結晶化を促す。白下糖の最後の工程で使用する。）等白下糖の製造に伴う道具の出土にも期待したい。

(註1) 香川県大川郡津田町 1986『再訂 津田町史』「第7編県政時代 第6章交通・通信 第1節道路」
P581

(註2) 松木保 1994『大川郡における糖業の実態（その2）－昭和初期の砂糖縮小屋の経営を中心として－』『香川県自然科学館 研究報告 第16卷』

(註3) 同書については（財）四国民家博物館 1987『讃岐及び周辺地域の砂糖製造用具と砂糖しめ小屋・釜屋調査報告書』p130～p132に詳しい。

(註4) (財)四国民家博物館 1987『讃岐及び周辺地域の砂糖製造用具と砂糖しめ小屋・釜屋調査報告書』
p 130



第62図 旧六車家砂糖金屋平・断面図
(財)四国民家博物館 1987「讃岐および周辺地域の砂糖製造用具と砂糖しめ小屋・金屋<調査報告書>」P215～P216より再トレーク)

- (註5) (財)四国民家博物館 1987「讃岐及び周辺地域の砂糖製造用具と砂糖しめ小屋・釜屋調査報告書」
第1章砂糖締め小屋・釜屋一解説・図版一
(註6) 村上稔 1983「東讃産業史」p.265
(註7) (註5)に同じ
(註8) 草薙金四郎資料 濱戸内海歴史民俗資料館蔵
(註9) (註5)に同じ

参考文献

- 荒尾美代 2018「日本の砂糖近世史 土を使って白くする！製造の秘法を求めて」八坂書房
松木保 1993「大川郡における糖業の実態（その1）－昭和初期の砂糖締小屋の経営を中心として－」『香川県自然科学館 研究報告 第15巻』
松木保 1994「大川郡における糖業の実態（その2）－昭和初期の砂糖締小屋の経営を中心として－」『香川県自然科学館 研究報告 第16巻』
村上稔 1983「東讃産業史」
香川県大川郡津田町 1986「再訂 津田町史」
香川県 1987「香川県史5 通史編 近代1」
香川県 1989「香川県史3 通史編 近世1」
引田町 1995「引田町史 民俗」
(財) 四国民家博物館 1987「讃岐及び周辺地域の砂糖製造用具と砂糖しめ小屋・釜屋調査報告書」
香川県教育委員会ほか 2000「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第36冊 金毘羅山遺跡I 塔の山南遺跡 庵の谷遺跡」
香川県教育委員会ほか 2002「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第39冊 原間遺跡I」
香川県教育委員会ほか 2004「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第51冊 川北遺跡 三殿出口遺跡」
富山市教育委員会ほか 2013「富山市今市遺跡発掘調査報告書 八幡小学校体育館改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」総括 第2項

現在も使用されている砂糖竈については、三谷製糖、山田製糖の諸氏に貴重な助言をいただくとともに、砂糖竈の実見についても便宜を図っていただいた。記して謝意を表したい。

第7表 土器觀察表(1)

序文 番号	調査名	内容	種類	器種	石英、赤色粒 長石	角閃石	雲母	砂岩	口径 (cm)	高さ (cm)	法量 (cm)	測定		内面	外面	内面 ナデ、板ナデ ナダ	外面 ナデ、板ナデ ナダ	内面・土 塊存半	備考
												上	下						
1 1 K	SK1002	-	学生 土器	盆	中・少	少	-	-	(14.2)	-	-	-	-	-	-	-	75YR6 6 瓢	75YR7 6 瓢	1.8
2 1 K	SK1002	-	学生 土器	盆	中・少	少	-	-	(16.0)	-	-	-	-	-	-	-	75YR6 6 瓢	75YR6 6 瓢	1.8
3 1 K	SK1002	-	学生 土器	盆	中・少	少	-	-	(13.3)	-	-	-	-	-	-	-	75YR6 6 瓢	75YR6 6 瓢	1.8
4 2 K	SF2001	東側の竈	-	竈材	-	-	-	-	少	6.9	6.7	6.2	-	-	-	-	75YR7 4 15.6 瓢	75YR7 4 15.6 瓢	-
5 2 K	SF2001	東側の竈	-	竈材	-	-	-	-	少	9.3	6.9	6.1	-	-	-	-	75YR7 4 15.6 瓢	75YR7 4 15.6 瓢	-
6 2 K	SF2001	東側の竈	-	竈材	盆・少	-	-	-	少	10.1	4.3	2.0	-	-	-	-	75YR7 6 瓢	75YR7 6 瓢	-
9 2 K	SF2001	東側の竈	-	竈材	盆・少	-	-	-	少	10.5	4.3	2.0	-	-	-	-	70YR7 31.6 瓢	70YR7 31.6 瓢	-
10 2 K	SF2001	西側の竈	-	竈材	盆・少	-	-	-	少	10.0	4.0	1.7	-	-	-	-	70YR6 4/16.6 瓢	70YR6 4/16.6 瓢	-
13 2 K	SF2001	作業場	陶器	碗	-	-	-	-	少	10.4	-	-	-	-	-	-	46YR7 2.6 瓢	46YR7 2.6 瓢	-
17 2 K	SF2001	西側拵	陶器	皿	-	-	-	-	少	9.9	-	-	-	-	-	-	1盆上N9/白	1盆上N9/白	1.8
18 1 K	SK1003	-	学生 土器	甕	中・少	少	-	-	(12.6)	-	-	-	-	-	-	-	51YR6 6 瓢	51YR6 6 瓢	1.8
19 1 K	SK1007	-	学生 土器	小甕	-	-	-	-	少	7.4	-	-	-	-	-	-	46YR7 31.9 瓢	46YR7 31.9 瓢	1.8
21 1 K	SK1011	-	学生 土器	皿	-	-	-	-	少	11.2	2.1	0.6	少	-	-	-	1盆上N9/白	1盆上N9/白	[盆 0.08]
22 1 K	SK1012	-	瓦器	碗	-	-	-	-	中・多	現存長 最短 (6.7)	6.7	0.7	少	少	少	少	10YR4 1 黑	10YR4 1 黑	8.8
24 1 K	SK1013	-	瓦器	碗	-	-	-	-	少	7.6	3.0	2.4	少	-	-	-	1盆上N9/白	1盆上N9/白	-
25 1 K	SK1013	-	瓦器	椀	-	-	-	-	少	10.4	4.5	0.8	少	-	-	-	1盆上N9/白	1盆上N9/白	-
26 1 K	SK1013	-	瓦器	椀	-	-	-	-	少	10.8	4.6	0.3	少	-	-	-	1盆上N9/白	1盆上N9/白	-
27 1 K	SK1013	-	瓦器	椀	-	-	-	-	少	10.9	4.9	0.3	少	-	-	-	1盆上N9/白	1盆上N9/白	-
28 1 K	SK1013	-	瓦器	椀	-	-	-	-	少	6.9	-	-	少	-	-	-	1盆上N9/白	1盆上N9/白	2.8
29 1 K	SK1013	-	瓦器	椀	-	-	-	-	少	10.2	-	-	少	-	-	-	1盆上N9/白	1盆上N9/白	2.8
30 1 K	SK1013	-	瓦器	椀	-	-	-	-	少	6.2	-	-	少	-	-	-	1盆上N9/白	1盆上N9/白	2.8
31 1 K	SK1013	-	瓦器	椀	-	-	-	-	少	6.0	-	-	少	-	-	-	1盆上N9/白	1盆上N9/白	3.8
32 1 K	SK1013	-	瓦器	有合	-	-	-	-	少	6.0	-	-	少	-	-	-	1盆上N9/白	1盆上N9/白	2.8
33 1 K	SK1013	-	瓦器	袋	-	-	-	-	少	6.0	-	-	少	-	-	-	1盆上N9/白	1盆上N9/白	2.8
34 1 K	SK1013	-	瓦器	袋	-	-	-	-	少	10.2	-	-	少	-	-	-	1盆上N9/白	1盆上N9/白	1.8
35 1 K	SK1013	-	瓦器	皿	-	-	-	-	少	-	-	-	少	-	-	-	1盆上N9/2.6 瓢	1盆上N9/2.6 瓢	-
36 1 K	SK1013	-	瓦器	皿	少	少	-	-	少	6.2	-	-	少	-	-	-	1盆上N9/5.5 瓢	1盆上N9/5.5 瓢	2.8
37 1 K	SK1013	-	瓦器	皿	少	少	-	-	少	6.4	2.4	0.3	少	-	-	-	25YR4 31.5 瓢	25YR4 31.5 瓢	1.8

第8表 土器觀察表(2)

原文 番号	調査名	内容	種類	器種	始上		法量		測定		内面 (cm)	外面 (cm)	施釉	(釉)	内面・施土	焼付率	備考
					高さ (cm)	底径 (cm)	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)							
38 1 KSK013	-	陶器	壺	石突・赤色粒 白石	-	-	-	-	細・少	-	-	-	施釉	施釉	(釉土:豆577.2灰白) 未調	1.8	
40 1 KSK014	-	磁器	壺	角鉢	-	-	-	-	無	-	-	-	施釉	施釉	(釉土:豆577.1灰白) 未調	1.8	
43 1 KSK030	-	磁器	壺	角鉢	-	-	-	-	粗・少	(68.8)	-	-	施釉	施釉	(釉土:豆577.1灰白) 未調	2.8	
44 1 KSK030	-	土器質 （附説）	壺	土器質 （附説）	-	-	-	-	中・多	-	-	-	施釉	施釉	TOYER7.3 ぶい焼 (釉)	-	
45 2 KSK001	-	陶器	壺	弘法瓶	-	-	-	-	細・少	-	-	-	施釉	施釉	(釉土:豆578.1灰白) 6.8 色塗（赤）	-	
46 2 KSK001	-	土器質 土器	壺	甕	-	-	-	-	中・少	(62.0)	-	-	ノア・ヘラク スリ後子半子ナギ サギ	ヨコナ ハケ目	7.5YR4.4にぶい焼 7.5YR4.3にぶい焼	-	
54 2 KSK002 新苗田 2 号	丁目	深鉢	小壺	深鉢	中・少	-	-	-	細・少	-	-	-	明鏡、ヘラク スリ等	明鏡、ヘラク スリ等	(釉土:豆578.1灰白) 未調	1.8	
55 2 KSK002	-	磁器	壺	深鉢	-	-	-	-	細・少	-	-	-	施釉	施釉	(釉土:豆578.1灰白) 未調	8.8	
56 2 KSK002	-	陶器	壺	深鉢	-	-	-	-	細・少	-	-	-	施釉	施釉	(釉土:豆578.2灰白) 未調	1.8	
59 2 KSK003	-	磁器	壺	甕	-	-	-	-	細・少	11.0	5.3	4.0	施釉	施釉	(釉土:豆578.1灰白) 未調	4.8	
60 2 KSK003	-	磁器	小壺	甕	-	-	-	-	細・少	(7.3)	6.0	3.4	施釉	施釉	(釉土:豆578.1灰白) 未調	6.8	
61 2 KSK003	-	磁器	深口	甕	-	-	-	-	細・少	(4.9)	-	-	施釉	施釉	(釉土:豆578.1灰白) 未調	1.8	
62 2 KSK003	-	陶器	明鏡	甕	-	-	-	-	細・少	(8.6)	16	(3.4) ケズリ	施釉	施釉	(釉土:豆578.3灰黄) 未調	1.8	
63 2 KSK003	-	土器質 土器	甕	甕	中・多細・少	-	-	-	細・少	-	-	-	施釉	施釉	TOYER6.4にぶい焼 7.5YR6.4にぶい焼	1.8	
67 2 KSK005	-	磁器	壺	甕	-	-	-	-	細・少	-	-	-	施釉	施釉	(釉土:豆578.2灰白) 未調	1.8	
68 2 KSK005	-	土器質 土器	甕	甕	-	-	-	-	細・少	-	-	-	マツツ ナダ	マツツ ナダ	2.5Y4.1 黄灰 7.5YR6.4にぶい焼	1.8	
69 2 KSK005	-	土器質 土器	甕	甕	-	-	-	-	中・多	(14.0)	-	-	ナデ・ヘラク スリ、ヘラク スリ	ナデ・ヘラク スリ	7.5YR6.4にぶい焼 7.5YR4.4にぶい焼	1.8	
71 2 KSK006	-	磁器	壺	甕	-	-	-	-	細・少	11.1	6.1	3.8	施釉	施釉	(釉土:豆578.1灰白) 未調	8.8	
72 2 KSK006	-	磁器	壺	甕	-	-	-	-	細・少	-	-	4.0	施釉	施釉	(釉土:豆578.1灰白) 未調	2.8	
73 2 KSK006	-	磁器	壺	甕	-	-	-	-	細・少	(10.9)	-	-	施釉	施釉	(釉土:豆577.1灰白) 未調	1.8	
74 2 KSK006	-	磁器	壺	甕	-	-	-	-	細・少	(14.2)	-	-	施釉	施釉	(釉土:豆578.1灰白) 未調	1.8	
75 2 KSK006	-	磁器	鉢	甕	-	-	-	-	細・少	(15.0)	4.1	(7.9) 鎧輪 高台	施釉	施釉	(釉土:豆578.1灰白) 未調	2.8	
76 2 KSK006	-	磁器	弘法瓶	甕	-	-	-	-	細・少	(5.4)	6.0	3.4	施釉	施釉	(釉土:豆578.1灰白) 未調	6.8	
77 2 KSK006	-	陶器	甕	甕	-	-	-	-	細・少	-	-	-	マツツ ナダ	マツツ ナダ	(釉土:豆578.2灰白) 未調	1.8	

第9表 土器觀察表(3)

原文 番号	調査名	内容	種類	器種	土上		法量		測定		色調	焼付率	備考		
					高さ (cm)	底径 (cm)	口径 (cm)	底高 (cm)	底径 (cm)	外側					
78	2 K	SK2006	-	陶器	片	-	-	-	面・少	(18.0)	-	-	(釉)透明		
79	2 K	SK2006	-	陶器	片	-	-	-	面・少	-	-	-	(釉)透明		
80	2 K	SK2010	-	磁器	陶	-	-	-	面・少	-	-	-	(釉)透明		
81	2 K	SK2010	-	陶器	片	-	-	-	面・少	-	-	-	(釉)透明		
83	2 K	SK2011	-	磁器	陶	-	-	-	面・少	(10.8)	4.7	(6.8)	施釉		
84	2 K	SK2013	-	磁器	中・基 土器	少	-	-	面・少	-	-	-	(釉)透明		
86	1 K	SP1005	-	陶器	片	-	-	-	面・少	-	-	-	(釉)透明		
87	1 K	SP1005	-	磁器	陶	-	-	-	面・少	-	-	-	(釉)透明		
88	2 K	SP2002	-	磁器	片・少	-	-	-	面・少	-	-	-	(釉)透明		
89	2 K	SP2002	-	土器	絶対の 底	根・少	-	多	少	(10.2)	-	-	-	(釉)透明	
92	2 K	SP2013	-	磁器	陶	-	-	-	面・少	-	-	(6.0)	施釉		
93	2 K	SP2013	-	陶器	骨科	-	-	-	面・少	-	-	-	(釉)透明		
94	2 K	SP2013	-	土器	木本	-	-	-	面・少	-	-	-	(釉)透明		
95	2 K	SK2001	-	須恵器	杆縫	-	-	-	中・少	(11.8)	-	-	-	(釉)透明	
96	1 K	-	上面精査	發生 土器	(底部)	中・基	-	-	面・少	-	-	-	-	(釉)透明	
97	1 K	-	上面精査	土器	(底部)	-	-	-	面・多	-	-	-	-	(釉)透明	
98	1 K	-	上面精査	土器	片	-	-	-	面・少	(23.7)	-	-	施釉	(釉)透明	
101	1 K	-	造成土	土器	壺	-	-	-	面・少	-	-	(29.6)	板ナデ・ナデ	(釉)透明	
102	1 K	-	造成土	土器	五連小	-	-	-	面・少	(28.6)	4.9	(32.2)	ナデ	(釉)透明	
104	2 K	-	上面精査	磁器	壺	-	-	-	面・少	2.3	5.7	3.6	施釉	(釉)透明	
105	2 K	-	上面精査	陶器	壺	-	-	-	面・少	-	-	(0.0)	板ナデ・施釉	(釉)透明	
106	2 K	-	上面精査	陶器	片口	-	-	-	面・少	(11.2)	7.8	(6.0)	施釉・削	(釉)透明	
107	2 K	-	上面精査	陶器	土壤	-	-	-	面・少	-	-	-	削ナデ・施釉	(釉)透明	
108	2 K	-	上面精査	土器	不明	-	-	-	中・少	(21.8)	-	-	-	ナデ・ハセナ	(釉)透明

第10表 土器観察表(4)

原文 番号	調査区 番号	遺物名	内容	種類	器種	石英、赤色粒 長石	角閃石 雲母	砂粒 (12.6)	口径 (cm)	高さ (cm)	法螺		内面	外面	裏面・柄	色調	内面・施土	焼存率	備考	
											幅・少	ハケ目								
109	2区	-	上面精査	土器質 土器	磁器	輪	-	-	-	-	幅・少	-	6.0	施釉	施釉	施土150771明暦 灰	7.5YR6.4±5.5° 暗 07YR6.3±5.5° 黄褐色	1.8	内面付着物あり	
112	2区	-	包含層	磁器	輪	-	-	-	-	-	幅・少	-	-	施釉	施釉	施土150771明暦 灰	10YR6.4±5.5° 暗 07YR6.3±5.5° 黄褐色	2.8	型打成形	
113	2区	-	包含層	磁器	輪	-	-	-	-	-	幅・少	1.5	-	施釉	施釉	施土150771灰白	6.8			
114	2区	-	包含層	磁器	輪	-	-	-	-	-	幅・少	24.4	-	施釉	施釉	施土150771灰白	1.8			
115	2区	-	包含層	土器質 土器	磁器	輪	-	-	-	-	幅・少	6.2	-	施釉	施釉	施土150771灰白	5YR6.6 灰	10YR6.6 灰	1.8	
116	2区	-	試掘トレンチ再 掘	磁器	輪	-	-	-	-	-	幅・少	9.1	2.1	6.0	施釉	施釉	施土150771灰白	1.8	スズ付着	
117	2区	-	機械掘削	承生 土器	磁器	輪	-	-	-	-	幅・少	-	-	施釉	施釉	施土150771灰白	7.5YR6.4±5.5° 暗 07YR6.3±5.5° 黄褐色	1.8	未調査	
118	2区	-	機械掘削	磁器	輪	-	-	-	-	-	幅・少	-	-	施釉	施釉	施土150771灰白	1.8	型延續		
119	2区	-	機械掘削	陶器	輪	-	-	-	-	-	幅・少	-	-	施釉	施釉	施土150771灰白	1.8	陶胎染付		
120	2区	-	機械掘削	土器質 土器	磁器	輪	-	-	-	-	幅・少	-	-	(4.8)マメツ (4.8)スリ目	施釉	施土150771灰白	2.8			
121	2区	-	機械掘削	土器質 土器	磁器	輪	-	-	-	-	幅・少	-	-	凹線	ナダ	2.5Y3.1 黒褐色	5YR6.1灰	1.8	未調査	
122	2区	-	手道具場 上部精査	承生 土器	磁器	輪	中・並	-	-	-	(4.2)	-	-	ナダ、ヨコナナダ ナダ、瓶ナダ	ナダ、ヘタケ ナダ	10YR7.4±5.5° 黄褐色 10YR7.4±5.5° 黄褐色	10YR7.4±5.5° 黄褐色 10YR7.4±5.5° 黄褐色	1.8		
123	2区	-	手道具場 上部精査	承生 土器	磁器	輪	(底部)	幅・少	-	-	幅・少	-	-	24	ハケ目、マツカツ マツカツ	施釉	10YR7.4±5.5° 黄褐色	10YR7.4±5.5° 黄褐色	3.8	
124	2区	-	手道具場 上部精査	磁器	輪	-	-	-	-	-	幅・少	23.8	-	施釉	施釉	施土150771灰白	1.8			
125	2区	-	手道具場 上部精査	陶器	輪	-	-	-	-	-	幅・少	50.6	-	凹線ナダ、輪脚 凹線ナダ、輪脚	凹線ナダ、輪脚 凹線ナダ、輪脚	2.5YR3.1 灰褐色 2.5YR3.1 灰褐色	2.5YR4.3±5.5° 黄褐色 2.5YR4.3±5.5° 黄褐色	1.8	未調査	
126	3区	-	包含層	土器質 土器	磁器	輪	-	-	-	-	幅・少	-	-	回転ヘタリ	回転ヘタリ	施土150771灰白	10YR7.4±5.5° 黄褐色	6.8		

第11表 瓦觀察表

編 番 号	測定区 域名	測定名	内容	形状	白色砂粒	黑色砂粒	灰色砂粒	全 量 (乾 燥 状 態 (cm))	厚 さ (cm)	凹面	凸面	四面	色調	備考
7	2/4	SF2001	東側の電	平瓦	面・少	-	面・少	(13.8)	1.7	板ナラ	板ナラ	7.5YR5/3 12.5V 地		
8	2/4	SF2001	東側の電	平瓦	面・少	-	面・少	(8.2)	1.6	板ナラ	板ナラ	7.5YR6/6 橙		
11	2/4	SF2001	1・6 屋	斜平瓦	面・少	-	面・少	(12.0)	2.0	板ナラ	板ナラ	7.5YR6/6 橙		
12	2/4	SF2001	1・6 屋	平瓦	面・少	面・少	面・少	(12.0)	1.9	板ナラ	板ナラ	N5/灰		
14	2/4	SF2001	作業場	丸瓦	面・少	-	面・少	(11.2)	1.6	板ナラ	板ナラ	N4/灰		
15	2/4	SF2001	作業場	丸瓦	面・少	-	面・少	(15.0)	2.1	板ナラ	板ナラ	7.5Y5/1 黄灰		
16	2/4	SF2001	作業場	平瓦	面・少	-	面・少	(15.6)	2.0	板ナラ	板ナラ	N4/灰		
3)	1/4	SK1010	-	斜平瓦	面・少	-	面・少	(6.4)	0.8	板ナラ	板ナラ	3Y7/1 地白		
47	2/4	SK2001	-	丸瓦	面・少	無	無	(10.5)	1.5	板ナラ	板ナラ	N5/灰		
48	2/4	SK2001	-	平瓦	面・少	面・少	面・少	(14.1)	1.8	板ナラ	板ナラ	N4/灰		
69	2/4	SK2001	-	平瓦	面・少	面・少	面・少	(25.8)	2.2	板ナラ	板ナラ	7.5Y1/1 地白		
50	2/4	SK2001	-	平瓦	中・少	無	無	(25.9)	2.3	板ナラ	板ナラ	N3/地灰		
51	2/4	SK2001	-	平瓦	中・少	面・少	面・少	(13.3)	1.8	板ナラ	板ナラ	5Y6/1 地		
52	2/4	SK2001	-	平瓦	中・少	面・少	面・少	(16.7)	2.3	板ナラ	板ナラ	N4/灰		
53	2/4	SK2001	-	平瓦	中・少	面・少	面・少	(25.5)	1.7	板ナラ	板ナラ	N3/地灰		
57	2/4	SK2002	-	丸瓦	面・少	-	面・少	(6.0)	1.8	板ナラ	板ナラ	N4/灰		
58	2/4	SK2002	-	平瓦	中・少	-	面・少	(17.4)	1.8	板ナラ	板ナラ	N4/灰		
64	2/4	SK2003	-	斜平瓦	面・少	面・少	面・少	(12.4)	2.2	1.7 ナラ	板ナラ	2.5Y3/1 地白		
65	2/4	SK2003	-	丸瓦	面・少	面・少	面・少	(6.3)	0.8	2.1	板ナラ	N4/灰		
66	2/4	SK2003	-	平瓦	中・多	-	中・少	(25.5)	2.1	板ナラ	板ナラ	N4/灰		
70	2/4	SK2005	-	平瓦	面・少	-	面・少	(17.4)	2.0	アメニテ、アーヴ	アメニテ、アーヴ	10YR7/4 12.5V 橙		
85	2/4	SK2008	-	丸瓦	中・少	中・少	-	(7.3)	1.7	板ナラ	板ナラ	N4/灰		
90	2/4	SP2002	-	平瓦	中・少	-	面・少	(14.9)	0.5	板ナラ	板ナラ	2.5Y5/1 黄灰		
91	2/4	SP2002	-	平瓦	中・少	-	面・少	(12.4)	1.8	板ナラ	板ナラ	N3/地灰		
110	2/4	-	上面精査	斜丸瓦	-	-	-	-	-	-	-	N5/灰		

第12表 鉄器観察表

編文番号	測量区	遺構名	内寸	遺構	注釈			材質
					規件長 (cm)	最大幅 (cm)	高さ (cm)	
41	1区	SKR1014	-	キチ	2.2	1.4	7.00	青銅

第13表 石器観察表

編文番号	測量区	遺構名	内容	器種	法量			材質
					全长 (厘米)	幅 (厘米)	厚さ (cm)	
23	1区	SKR1012	-	不明	68.0	63.2	0.4	チャカイト
39	1区	SKR1013	-	砾石	67.9	63.0	2.1	チャカイト
42	1区	SKR1024	-	石撃	2.1	1.3	0.3	チャカイト
82	2区	SKR2010	-	砾石	14.4	6.2	3.5	チャカイト
99	1区	-	上面削余	石撃	2.1	1.5	0.3	チャカイト
100	1区	-	上面削余	石撃	(2.1)	(1.4)	0.3	チャカイト
103	1区	-	造底土	五輪塔	38.5	38.3	30.3	チャカイト
111	2区	-	上面削余	石撃	1.9	1.4	0.25	チャカイト



写真1 1区遺構検出状況（北西から）



写真2 1区遺構検出状況（南西から）

神野道路（香川県埋蔵文化財センター編 2021年）



写真3 1区全景（北西から）



写真4 1区全景（南東から）



写真5 2区遺構検出状況・中央部付近（西から）



写真6 2区 全景（南東から）



写真7 2区 全景（北西から）



写真8 2区全景（南東から）



写真9 2区（歩道橋脇）全景（南から）



写真10 3区（北西部）全景（北西から）



写真11 1区南壁（北西から）



写真 12 1区 SK1002（東から）



写真 13 1区 SK1002（南東から）

写真 14 2区 SF2001
炭化物検出状況
(東から)



写真 15 2区 SF2001
竈部検出状況
(東から)



写真 16 2区 SF2001
(北西から)





写真 17 2区 SF2001
(東から)



写真 18 2区 SF2001
(南東から)



写真 19 2区 SF2001
(北東から)



写真 20 2区 SF2001
炭化物除去後（北東から）



写真 21 2区 SF2001
f-f' 断面（北半）（西から）



写真 22 2区 SF2001
e-e' 断面、f-f' 断面（南半）（東から）



写真 23 2区 SF2001
e-e' 断面、f-f' 断面（東から）



写真 24 2区 SF2001
d-d' 断面（北西から）



写真 25 2区 SF2001
a-a' 断面（西半）（南から）



写真27 2区 SF2001 完掘（北東から）



写真29 2区 SF2001 東壁部分（南西から）



写真26 2区 SF2001（北東から）



写真28 2区 SF2001 西壁部分（北東から）



写真 30 1区 SK1003 (南東から)



写真 31 1区 SK1007 (南から)



写真 32 1区 SK1008 (南から)



写真 33 1区 SK1010 (南から)



写真 34 1区 SK1011 (北東から)



写真 35 1区 SK1012 (北東から)



写真 36 1区 SK1013 (南から)



写真 37 1区 SK1014 (南西から)



写真 38 1区 SK1016（南西から）



写真 39 1区 SK1019・SP1005（南東から）



写真 40 1区 SK1021（南東から）



写真 41 1区 SK1022（南西から）



写真 42 1区 SK1024（南西から）



写真 43 1区 SK1030（西から）



写真 44 2区 SK2001（北東から）



写真 45 2区 SK2002（北から）



写真 46 2区 SK2003 (北東から)



写真 47 2区 SK2005 (東から)



写真 48 2区 SK2006 (東から)



写真 49 2区 SK2010・SK2011 (南から)



写真 50 2区 SK2013 (北西から)



写真 51 2区 SK2018 (北から)



写真 52 2区 SK2021 検出状況 (南から)



写真 53 2区 SK2021 (南から)



写真 54 2区 SK2021（南東から）



写真 55 2区 SP2002（西から）



写真 56 2区 SP2008(西から)



写真 57 2区 SP2013（南から）



写真 58 2区 SP2014（東から）



写真 59 2区 SP2016（南東から）



写真 60 2区 SP2018（南東から）



写真 61 2区 SP2019（南東から）



写真 62 2区 SP2020 (北東から)



写真 63 2区 SP2025 (北から)



写真 64 2区 SP2021 (南西から)



写真 65 2区 SP2022 (南西から)



写真 66 2区 SP2024 (北から)



写真 67 2区 SP2027 (南西から)



写真 68 1区 SD1001 (南東から)



写真 69 2区 SX2001 a-a' 断面 (南から)



写真 70 2区 SX2001 c-c' 断面（南から）



写真 71 1区 SK1028（南西から）



写真 72 1区 SK1006（南西から）



写真 73 1区 SK1017（南西から）



写真 74 2区 SK2009（東から）



写真 75 2区 SK2019（南西から）

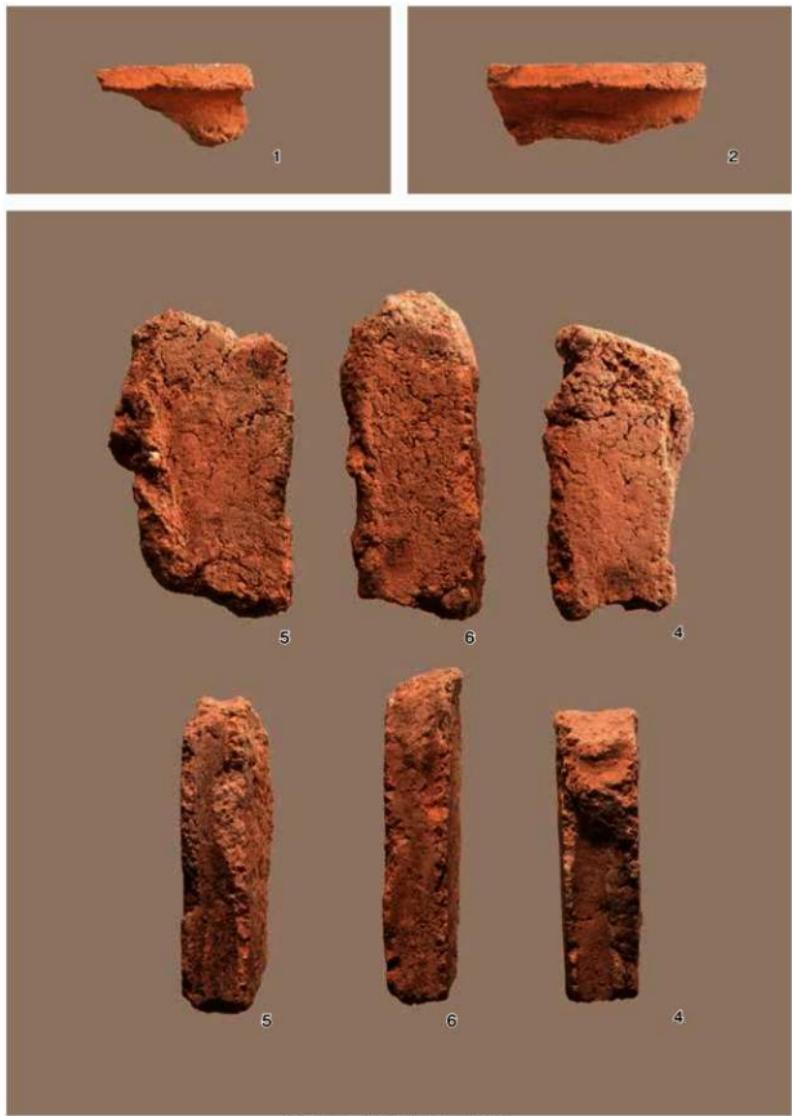


写真 76 神野遺跡出土遺物 1



写真 77 神野遺跡出土遺物 2



写真 78 神野遺跡出土遺物 3



写真 79 神野遺跡出土遺物 4



59



60



63



64



61

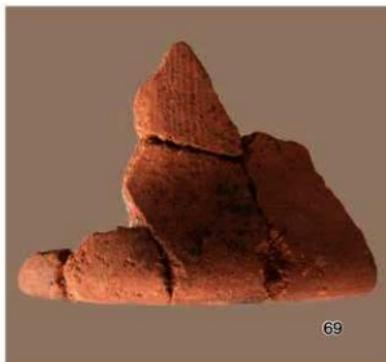


67



65

写真 80 神野遺跡出土遺物 5



69



77



72

75



72

75

写真 81 神野遺跡出土遺物 6



74



71

76



86

93

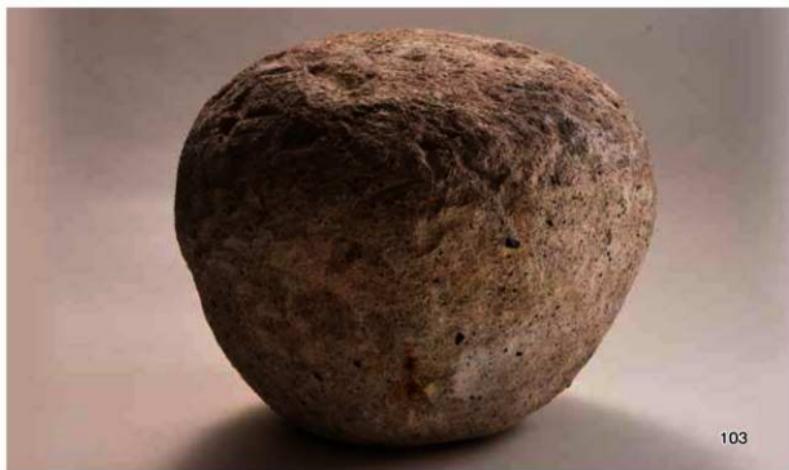


102

写真 82 神野遺跡出土遺物 7



101



103



104



106

写真 83 神野遺跡出土遺物 8



写真 84 神野遺跡出土遺物 9



写真 85 神野遺跡出土遺物 10

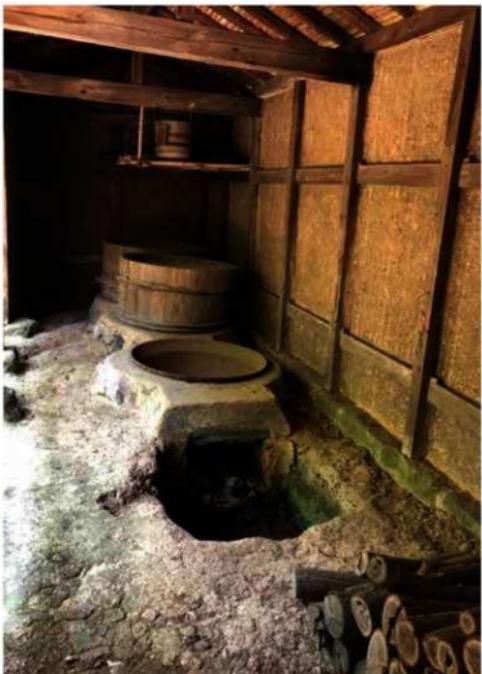


写真 86 四国民家博物館 旧六車家 砂糖竈



写真 87 四国民家博物館
旧六車家 砂糖竈
(焚口部分)



写真 88 四国民家博物館 旧六車家 釜屋

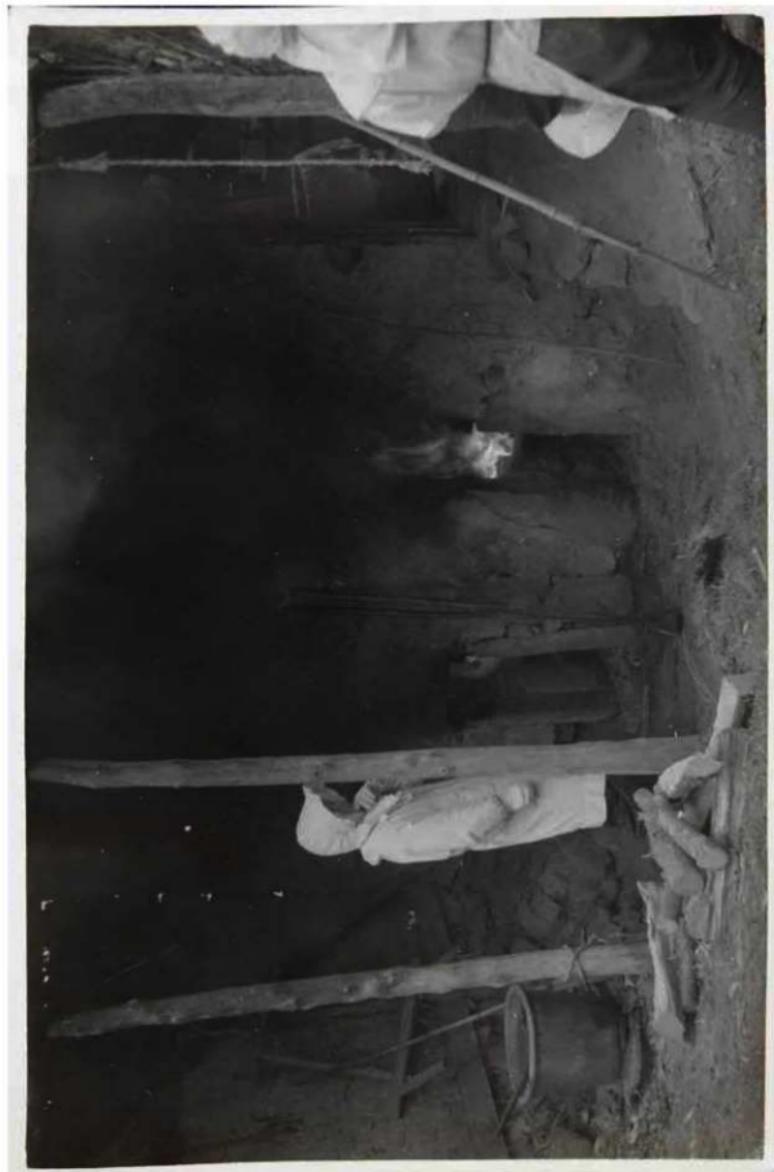


写真89 金屋の風景（日引田町）瀬戸内海歴史民俗資料館蔵

報告書抄録

国道 11 号津田交番前交差点改良事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

神野遺跡

2021 年 3 月 26 日

編集 香川県埋蔵文化財センター

〒 762-0024 香川県坂出市府中町字南谷 5001-4

Tel 0877-48-2191 Fax 0877-48-3249

発行 香川県教育委員会

印刷 株式会社 中央印刷所